
チートじゃ済まないin星海

雨季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チートじゃ済まないin星海

【Nコード】

N0349U

【作者名】

雨季

【あらすじ】

チートじゃ済まないシリーズ第三作！！

今度の舞台は宇宙に飛んで星の海！！

主人公はいつも通りORTを取り込んだ前代未聞男『一条要』。

今回彼は何をしてくれくれるのか！！

では黒歴史をご覧ください。

番外等では他作品とのコラボがあります。苦手な方はご注意を。

プロローグ（前書き）

はい、常連さんも初めましての人もこんにちは。雨季というものです。

今回はスターオーシャン・セカンドストーリー！。

俺の思い出の作品です。

ちなみに次回からは前書きと後書きで茶番劇が始まります。
では本編どうぞ。

プロローグ

要side

あー、皆さんこんにちは。俺は『一条要』だ。今は船に乗って次元の彼方をさまよっている。遭難じゃないぞ。旅だよ。

「アリストテレス、あのどれくらいで次の世界だ？」

「二日程です」

こいつはアリストテレス。俺のデバイスだが、今は人型になって執事をやっている。長年の愛機だ。

「二日……寝るか」

「いつ頃起床なさいますか？」

「三時間後くらいで」

「了解致しました」

今回は家族から貰ったプレゼント旅だ。のんびりで行こう。

.....

.....

.....

...

ここはどこだ？初めて神様に会った時のような白い世界だが。

「起きたか、一条要よ」

「起こされた、と言った方が正しいと思うが、にーちゃんとねーちゃん」

俺の前には二人の男女が立っていた。二人は背中に三対の羽があり、三日月の刃が付いた杖を持っている。服装も同じ。違いは色くらいなもんだな。

「我が名はガブリエ・セレスタ」

「我が名はイセリア・クイーン」

「一条要だ。よろしく」

「汝に依頼がある」

依頼ねえ。俺を便利屋か何かと勘違いしてないか？

「ある星が崩壊しようとしている」

「広大な世界じゃ良くある事じゃないか」

「その通りだ。だがこれは悪意ある者達による仕業」

「あつそ。関係ないね」

「そこには汝が好むものが在る」

「……それは？」

「「闘争」」

「……………それはズルい。それを出されちゃ行きたくもなる。俺の事をよくわかってるじゃないか。」

「もし星が崩壊しても文句言つなよ」

「問題ない」

「星は犠牲を元に蘇る運命」

「なら俺はいらないんじゃないか？まあいつか。正直この旅は退屈でならないと思っていたんだ。休むには十分だが、心は高ぶりを求めている。いい退屈しのぎだ。」

「飛ばせ」

「了解した。汝を飛ばすは運命に巻き込まれし者が現れし地」

「運命に巻き込まれし者と共に星へ飛べ」

「なあ、もっと柔らかくしないか？」

ちよつと固すぎる。神様くらいとは言わないが、もっと普通に喋って貰った方が重い任務に付く気がなくて気分は楽だ。

「解った。俺達も普通に話そう」

「これから貴方をこの事件に巻き込まれる者達の一人がいる場所に飛ばすわ」

「そうかい」

こつちの方が断然いいな。やっぱり話しやすい。

「何かあれば私達もサポートするかもしれないわ」

「でも君に限ってそれはないだろう。では」

「「汝に祝福あらんことを」」

体が光に包まれる。一体どんな世界に行くんだろうか。

……

……

……

…

見事なまでの廃墟じゃねえか。

「主、ここは？」

「とりあえずデバイスになりな、アリストテレス」

《了解》

さて、まずは何から説明するか。アリストテレスだから適当でいいか。

「変なのに首を突っ込んだ」

《自重して下さい。奥方様達が心配なさいますよ》

「あいつらなら大丈夫」

《この場合、主が大丈夫？では？》

なんだその大丈夫？の『？』は。頭が大丈夫かって言いたいのか？

「そこで何をしている！！」

おっと、第一村人発見ってか？

相手は金髪の青年。手には科学的な銃。どうする？

「一般人がこの惑星に入るのは禁じられている！！何者だ！？」

「事故でここに来てしまつてな。名は一条要だ」

「イチジョー・カナメ？まさか日本人か？」

「その通り。青年は？」

「僕はクロード・C・ケニー。銀河連邦軍の少尉だ」

「銀河……連邦軍？」

日本人を知ってるって事は地球を知ってる、もしくは地球人って事だよな。だが俺の知る限りでは銀河連邦軍とやらは知らない。こいつが地球人だとすれば、ここは未来か？

「銀河連邦軍を知らないのか？」

「事故の影響だろうな。断片的に記憶が飛んでる」

『よくもまあ、息をするように嘘を吐けるものですね』

『アリストテレス、黙れ。情報のためだ』

念話で一々言うような事じゃないだろうに。

「大変だな」

「全く」

俺は近くの石に腰掛ける。すると石が動いて後ろのすり鉢状の大きな窪みに転がってしまった。

「おおお！？」

突然だったが、怪我をせず、服を汚さず、窪みの底まで降りていった。

「大丈夫か！？」

青年も心配して降りてきた。

「ああ、何も問題ない」

「そうか」

しかし今思うとこいつは随分お人好しだな。あんな話を信じるなんて。

『クロード少尉！！何処にいる！？』

？ これは通信機か？青年のポケットから聞こえるが。

「！ 遺跡の左手です！！事故にあったという民間人を発見しました！！」

『すぐに向かうから動くな！！』

何やら上司でも来るのか。厄介な事になりそうだな。

カチッ

「カチッ？」

俺の足元にあった小さな機械。なんか光ってるし。経験上、非常にマズい。

「青年逃げる！！」

「え？」

「クロード少尉！！？」

「くっ、間に合わん！！」

成る程、主要人物の一人はこの青年で舞台はこの星じゃなかったわけだ。俺はそんな事を考えながら青年と共に何処かへ飛んだ。

プロローグ（後書き）

まあ最初なんでこんなもんですね。
クロードくんはあんまり使わなかったという思い出が。主人公なの
にね。
では次回もお楽しみに。

光の勇者（前書き）

アリかな雑談室

叶「前作から見てる人はこんにちは！初めましての人は初めまして！パパこと一条要の娘、神条叶（18）だよ！！苗字が違うのは気にしたら駄目」

ア「リリカルなのはから出演。アリサ・バニングス（32）よ」

叶「ゑ？」

ア「どうかした？」

叶「な、なんでそんな歳になってるの！？」

ア「叶ちゃんだって成長してるじゃない」

叶「そうだけど、結婚は？」

ア「……………」（ニッコリ）

叶「やゝめゝてゝ！！いい縁談探してあげるから！！読者様でもキヤラでもいいから！！」

ア「此処では簡単なあらすじや雑談、没ネタをやるわよ。没ネタはたまにだけど」

叶「……………前回のあらすじやろうか」

ア「前は要が何処かの惑星に飛ばされてまた飛ばされたわ」

叶「じゃあ本編どうぞ」

光の勇者

クロードside

「……………うう」

何だったんださっきのは。まだ目がチカチカする。

「起きたか、青年」

「貴方は、イチジョーさん」

僕と一緒に巻き込まれたのか。いや、僕が巻き込まれたといった方がいいのかな？

「俺は要でいい」

「なら僕もクロードと呼んでくれ。……………大丈夫か？」

「大丈夫だ」

大丈夫、と言われても。思いつ切り木にズボンが引つ掛かって逆さ吊り状態なんだが、本人が大丈夫って言うなら大丈夫という事にしておこう。

「しかし何処だ此処は。さっきまで廃墟だったのに今は心地良い森の中じゃないか」

「多分、あれは転移装置だったんだと思う。此処は別の惑星なんだ」

「はあ、大変だね。通信機は繋がらないのか？」

「そうか!!」

僕はすぐにポケットから通信機を取り出して電源を入れた。しかしうんともすんとも言わない。そうか、こんな簡易な通信機じゃ惑星間の通信なんて出来ないか。

「全く、これはいいよピンチだ」

「一体どうすれば」

「まず、いくつか確かめなければいけない事がある」

「え？」

「大気。これは俺らが普通に呼吸出来るから問題ない。次は水と食料。これもこんな森があるんだ。水は確実にあるし、食料も木の実や茸があるはず。そして人類の有無。もし人類がいて文明を築いていれば俺らは最高にラッキーだ」

「……………あんだ、何者だ？」

こんな状況に陥っても平然としていられるなんてあまりにおかしい。思えば不振な点はいくつかあった。初めての任務で舞い上がっていて気付かなかった自分が情けない。

「とにかく、今は協力しよう。生きていれば助けは来るさ」

「そう、だな」

もしかしたら、いや絶対にカルナスのみんなは僕を捜してくれて
いるはず。それまで生き残らないでどうする。

「希望を持てたようだな。それじゃ「きやあああああああああ
あああ！！？」むっ！？」

「悲鳴！？」

僕はカナメを置いて悲鳴がした方へと走った。そこにはゴリラのよ
うな化け物に襲われそうになっている少女がいた。

「危ない！！」

「きゃっ！？」

僕は少女を突き飛ばし、化け物の攻撃から助けた。そして銃、護身
用に貰ったフェイスガンを構えた。

「来い！化け物！！」

グオオオオオオオオオオ！！

実戦は初めてだ。それでも倒さないといけないんだ。

オオオオオオオオ！！

「くっ！？」

化け物の動きが思ったより速い。これじゃあなかなか狙いが定まらない。

ドスッ

グギヤアアアアアア！？

だが突然、化け物の目に太い木の枝が突き刺さった。今がチャンスだ。

「フェイスガン！！燃えろ！！」

拳銃程度の大きさしかないフェイスガンから放たれた膨大なエネルギー弾が化け物を飲み込み、そして消滅させた。

「ふう、何とかなったか。君、大丈夫だった？」

「あ……」

少女は呆然としていたけど、立ち上がると走り去ってしまった。

「え！？ちょっと待って！！」

「ナンパ失敗」

「そんなんじゃないだろ！？っていたのか、カナメ」

「助けてやったのに酷い奴だ」

「助けてやった？」

あ、さっきの木の枝はカナメが投げたのか。そうだよな。自然に起こる訳ないし。

「さっきの少女は追わないのか？」

「そうだな。早く追おう」

まだそんなに遠くに行っていないかもしれない。

要side

お、いたいた。律儀に待っていてくれてるじゃんか。

「良かった。待っていてくれたんだ」

「あの、さっきは助けてもらったのに逃げてしまつてごめんなさい」

「気になさんな。あんなの見たら逃げたくもなる」

「貴方は？さっきいませんでしたか」

「木陰にいたからな。木の枝投げたの俺ね。っと名乗らないとな。俺は要。ファミリーネームは一条だ」

「僕はクロード。クロード・C・ケニーだ」

「クロードさんにカナメさんですね。私はレナ・ランフォードと言います」

ふむ、いい娘じゃないか。いやまあこれくらいが普通だよな？普通、だよな？いかん、最近常識が曖昧になってきた。

「カナメさん、行きますよ」

「どうした？カナメ」

「いや、なんでもない」

自分の常識を疑ったらお終いだな。

.....

.....

.....

：

レナに案内された場所はアーリアという小さな村だった。小さな村だが、自然豊かで非常にいい雰囲気个村だ。

「ここが協会です」

「へえ、立派だね」

「式は大体此処で挙げるのか？」

「そうですね。あそこの家に新婚さん夫婦がいるんですが、この協会式を挙げましたから。こっちが私の家ですよ」

ちよつと歩くと他より少し大きな家があった。この村の権力者の家だろう。

「村長様？ いませんか？」

村長の家だったか。しかし留守みたいだな。

「後でいいかな。こっちが私の家ですよ。入って下さい」

村長の家のすぐ向かい側にあるのがレナの家だったらしい。俺とクロードはレナに押されるように家へと入った。家の中にはレナよりも年上の女性がいた。

「レナ！！」

「ただいま、お母さん」

ああ、お母さんだったのか。俺が会う母親ってのはどうも若い人が多いな。

「そちらの方々は？」

「私が神護の森で魔物に襲われた時に助けてくれたクロードさんとカナメさんよ」

「魔物に！？だからあれほど言ったじゃない！！お二人共、娘が迷惑を掛けました」

「いいえ、僕らは当然の事をしただけです」

「俺は目的があつたが」

「え、聞いてないぞ」

「言っていないからな。何、簡単な事だ」

グウ

「腹……減った……」

「」「プツ」「」

笑つなよ。最近暇だったから船の中で一週間程断食をしてたんだから。腹減るのは当然だろ。

「クスクス、クロードさん、カナメさん、二階で待っていて下さい。」

すぐにお食事の支度をしますから」

「私は村長様を呼んでくるね」

久しぶりに美味しい飯にありつけそうだ。ありがたや。

レナ side

クロードさんが使ったあの光。きっと光の剣だわ。それに異国の服。クロードさんが絶対に光の勇者よ。ならカナメさんは……………付き人？とにかく今は報告しないと。

「村長様!!」

「レナか。どうしたそんなに大きな声を出して」

「光の勇者様が見つかりました!!」

「何じゃと!? その方は何処に？」

「私の家です」

「すぐに向かおう」

私達が私の家に入ると机には大量のお皿が乗っていて、クロードさんは机に倒れ込み、カナメさんはお酒を呑んでいた。

「いい酒ですね」

「ありがとうございます。レナお帰りなさい。それにレジス村長様、こんばんは」

「うむ、こんばんはじゃウエスタ。さて、お客人。少しお話がしたいのじゃが」

「俺は構わないが」

「僕も……話すくらいなら」

「では……」

村長様はこの村に伝わる伝承を二人に話した。エクスペルに災厄が訪れし時、異国の衣を纏いて、光の剣を持ちし者が世界を救うという伝承を。今はその災厄、空からソーサリーグローブという隕石が落ちてきたばかり。全てが当てはまる。

「クロード殿。お主がその光の勇者ではないかの？異国の衣を纏い、光の剣でレナを救った」

私もそう期待していた。でもクロードさんの言葉はそれを否定するものだった。

「でも、僕は光の剣なんて持ってません。それ以前に勇者なんかじゃないです」

「残念ながら俺もだ。俺は拳で戦うしな」

「そんな！―クロードさんは私を助ける時光の剣を使っただじゃないですか！―」

「あれは……ごめん。違うんだ」

「そんな……」

「勇者様じゃないんですか？」

「ウエスタさんまで。確かに僕らはレナを助けました。だから言っ
ていきなり世界を救えと言われても」

「どうやら本当のようですね。では少し、お話を聞いて下さい。何故我々が勇者を求めるのかを」

村長様はソーサリーグローブの話 시작했다。最初はエル大陸に落ちた珍しい隕石と思われるという事。でも突然動物が魔物化し始めたという事。世界が危機に陥つてるという事。

「……勇者ではない貴方に言っても仕方ありませんね。レナ、わた
らの勘違いだったんじゃない」

「違うね」

みんながどんよりとしている中、黙っていたカナメさんが口を開い

た。

「こいつは勇者かもしれない」

「!!!? 何を言ってるんだ!!!僕はそんなんじゃない!!!」

「勇者や英雄つてのは多大な功績を積み上げた者に与えられる称号だ。今は違っても未来は分からないだろ?」

「ではカナメ殿は未来でクロード殿が勇者になると?」

「さあ?もしかしたら別の人かもしれないが、可能性は否定出来ないぞ。それに世界を救う」勇者ではないからな」

? なんてだろう?世界を救ったならその人が勇者様って言われても問題ないよね。」

「とある小さな村に感染症が発生しました。その感染症に抗体を持つ人はこの世界にはおらず、放置すれば世界中に広まってしまいます。そこでとある人が村人を虐殺し、感染症が広まらないようにしました。さて問題。感染症が広まらないように村人を虐殺した人は勇者でしょうか?」

「「「「.....」」」」

確かに感染症を広まらないようにしたのは認められるかもしれないけど、それはただの人殺し。勇者なのだろうか。

「物は捉えよう。同じ大量虐殺でも英雄と言われる例はある」

「それは？」

「戦時中」

そうか。戦争だと敵を沢山倒した人が英雄って言われるものね。

「結局はクロードが決める事だ。ただ今回は相手が人ではなく魔物だな」

「……………もう少し、考えさせてくれ」

「当然ですよ。こんな事をすぐに決めろというのが酷ですよ」

「お二人は二階のさっきの部屋で」

「お母さん、あれは一人部屋よ」

「あら、そうだったわね」

「なら一人はうちに来なさい。うちは老人一人にはちと広いしの」

「なら俺が世話になろうかな」

カナメさんが村長様の家に、クロードさんが私の家に泊まる事になった。それにしてもカナメさんの話は深かったな。まるでお年寄りみたい。

光の勇者（後書き）

もみもみラジオ

椛「皆さんこんにちは。犬走椛です。ここでは皆さんからの質問などを答えたいと思います。今回は何もないので要さんについて簡単な説明です」

一条要

年齢不詳

型月公式チートのORTを神様に貰った転生者。一つ的能力しかないが努力と気合いで他のチートと渡り合えるように。

ハーレムには『なのは』『フェイト』『すずか』『ヴィータ』『スバル』『木乃香』『刹那』『千雨』がいる。

詳しくは前作以降を。

椛「ちなみに私は一児の母です。では次回もお楽しみに」

謎の石（前書き）

アリかな雑談室

叶「どうも、叶です」

アリサ「アリサよ。みんな褒めたりしてくれて嬉しかったわ」

叶「大分変わったよね」

アリサ「もう歳が歳だからね」

叶「まだ彼氏募集してあげるよ」

アリサ「そんな企画ないんだけどね」

叶「出来るまで続けるよ」

アリサ「もう。じゃああらずじね」

違う星へ飛んだ要とクロード。

モンスターに襲われている少女をフェイスガンで助けたクロードは勇者と勘違いされる。

しかし要のお話で難を逃れたのであった。

叶「では本編どうぞ」

謎の石

要side

朝霧の中の瞑想は気持ち良いな。こういう自然での瞑想が一番いい。

「そろそろ戻るか」

《三時間続けてましたからね》

それだけやってたのか。時間をすっかり忘れちゃってたな。

「早く帰ろ、お家へ帰ろ」

《何故今それを》

気にしたらいけないんだぞ。はい到着。近くていいね。

「ただいま」

「おやカナメ殿。朝早くからお出かけですか？」

「そんなもんですかね。村長さんも朝が早いようで」

「歳を取るとどうも体が勝手に起きてしまってますな」

「そうですね」

俺もそんな事があったからな。若い体になって今でもたまにその癖

が出ちまうからな。

「そうそう。ウエスタがカナメ殿の朝ご飯を用意してくれているそうですね」

「それは有り難い。村長さんの？」

「……」

うん、訊いた俺が悪かった。

レナ side

朝ご飯は私とお母さんとクロードさんだけだと思ったけど、お母さんがカナメさんと呼んだみたいで四人だった。

「ウエスタさんは料理が本当にお上手だ」

「あらカナメさん。褒めてもおかずしか出ませんわよ」

「そんなつもりなかったんですがね」

カナメさんはよく食べるわね。昨日もクロードさんが言うにはかなりの量が出たようだけど、大体カナメさんが食べちゃったみたい。

「そういえばクロードさん。今日はどうするんですか？」

「ちょっとサルバって町に行ってみるよ」

サルバか。最近会ってないけどアレン元気かな？

「なら俺もついて行こう。昨日のうちに世界地図は大体頭に叩き込んだ」

「凄いですね」

「んな事はない。レナちゃんだって頑張れば出来るさ」

確かにちよつと覚えるだけなら何とかなるかも。やってみないと分からないけど。

「じゃあ行ってくるよ」

「気をつけて下さいね」

「クロード、武器持ってるか？」

「……いや」

「だろうな。ほら」

カナメさんがクロードさんに渡したのは一般的な長剣だった。

「村長さんからのプレゼントだよ」

「それは助かるな。カナメはナツクルとかはないのか？」

「大丈夫だろ」

自信満々なのね。カナメさんってそれだけ凄いのかしら？まあとりあえず、私は神護の森に行きましょう。昨日みたいな事なんてめったにある事じゃないし、大丈夫よ。

クロードside

村長さんに馬を貸してくれたからそんなに時間が掛からずにこれたな。

「この町に何かあるかね？」

「それを調べるために来たんだろ。カナメもちゃんとやってくれよ」

「はいはい」

分かってるのかな？そういえば僕ってカナメの事何も知らないな。
日本人ってのは分かってるけど、年齢すら分らない。

「今考える事じゃない。僕は僕で調査しないと」

何を訊こうか。やっぱりソーサリーグループについてだな。今一番
僕らに関係ありそうな事だし。

………

………

………

…

だ、駄目だ。いろいろ訊いてもアーリアの情報と大差ない。次で最
後にするか。

「あの」

「何だい？」

「ソーサリーグループについて調べてるんですけど」

「ソーサリーグローブってあれだろ？空から降ってきてモンスターを凶暴化させたの。残念だけど……あ」

「何か心当たりでも？」

「いや、ソーサリーグローブとは関係ないと思うんだけどね。最近アレんくんが荒くなったなと思って。時期もちょうど合うし」

「アレん？」

「ほら、あそこに大きなお屋敷があるだろ？あれの領主だよ」

あの立派なお屋敷のか。さっきは門前払いされたんだよな。しかしその領主が荒くなったか。確かに関係ないなあ。

「ありがとうございます」

「いやいや、大した事を言えなくて悪いね」

結局いい情報は見つからなかったな。カナメはどうだろう。

「おい」

「あ、カナメって酒臭っ！？呑んでたのか!？」

「違う。酒場で聞き込みだ」

「なら何を聞いてたんだよ」

「大した情報はなかったな。最近アレんってのがおかしいってくら

いか」

僕と同じ情報か。聞き込みはちゃんとやってたんだな。

「これ以上の情報はこの町にはなさそうだ。帰るか」

「そうだな」

………

………

………

…

アーリアに帰った時、僕らを待っていたのは想定外の光景だった。

「やっと、帰ってきてくれたか」

「村長さん、これは一体」

アーリア中の人々が僕らの帰りを待っていたのだ。しかもウエスタさんは顔に怪我をし、レナがいない。

「アレンが、アレンがレナを連れて行った」

「アレン……」

連れて行っただって、くそ！！すれ違いか！！

「アレンくんはレナの昔馴染みの。でもこんな事する子じゃなかったわ。お願い、レナを、助けて」

「とりあえずウェスタさん。あんたは怪我を治しな。俺とクロードが何とかする」

「当然だ。行こう、カナメ」

僕らは馬に飛び乗り、再びサルバを目指した。その途中、カナメが話をしてきた。

「クロード。少し推測の話をする」

「こんな時にか？」

「こんな時だからな。ソーサリーグローブの特徴は理解してるな？」

「モンスターを凶暴化させ、動物もモンスター化させているんだろ？」

「もし、その動物の括りに『人間』が入っていたら？」

「！？まさか！！」

ここで僕はカナメが言いたい事に気が付いた。

「そう。アレンがモンスター化しているとしたら今回の行動もおかしくない。ウエスタさんのあの様子ではごく普通の奴だったんだろう。それが突然暴力を振るってレナを誘拐したんだからな」

「レナが危ない!!」

「ああ、早くしないと何をされるか」

そんな話を話しているうちにサルバに到着した。そしてアレンの屋敷の前まで行くと、人集りが出来ていた。

「どうなってるんだ!？」

「すう……………退け!!!!!!」

カナメが大きな声で叫んだ。あまりに圧倒的で従わざる負えない雰囲気を出すその声に逆らう者はなく、道が開いた。

ガチャガチャ

「ちつ、鍵が掛かってるな」

「退いてくれ」

次は僕の番だ。さあやるぞ。

「フェイズガン!!」

光の弾が扉を木っ端みじんに吹き飛ばした。だけどそれでフェイスガンのエネルギーが完全に切れてしまった。もう使い物にならないな。

「ナイスだ!!」

「レナ!! 何処だ!？」

屋敷の中で呼んでも返事はない。一つ一つ部屋を調べるか。

「いない」

「こつちもだ」

「一体何処に……ん？」

書斎のような場所にレナの三日月を模した髪飾りが落ちていた。これがあるって事は、レナは此処にいたんだ。

「よくやった。後は………これだ!!」

カナメが部屋の隅にあった金像を回すと本棚が動いて地下への隠し通路が出てきた。

「凄いな」

「ラクーンに比べたらしょっぱい仕掛けだよ」

ラクーン? ってそんな事気にしてる場合じゃなかった。早く降りよう。

「！ 人だ」

地下道に入ってすぐ、男性が座り込んでいた。

「あんた、大丈夫か？」

「うう、君達は？ いや、この際君達が誰でもいい。レナちゃんを助けてくれ」

「もとよりそのつもりだ。あんたは？」

「私はアーリアで大工をやっている者だ。二週間ほど前、アレクさんに依頼をされ奇妙な場所を造らされた。思えばその時点で彼はおかしかった」

そんな事があったのか。

「んで怖くなったあんたは逃げ出そうとしたが、やられた」

「ああ」

「……これは傷薬だ」

カナメは大工さんに薬を渡して走り出した。

「君」

「はい？」

「地図だ。持って行きなさい」

「ありがとうございます」

僕もカナメを追って走った。地下は迷路のように入り組んでいたが、地図があつたおかげで問題なく目的地についた。

「レナ!!」

「クロードさん!! カナメさん!!」

レナは奇妙な台座の上で手足を鎖で結ばれて寝かされていた。その後ろには長い髪に整った顔立ち。赤いマントを羽織った男がいた。

「なんだ君達は。僕らはこれから婚礼の儀をして夫婦になるんだ」

「お前がアレンか。しかし婚礼の儀? こんな呪いの儀か生贄の儀をしそうな場所か? 教会に行きな」

「それに夫婦っていうのは愛し合った者同士がなるものだ。一方的な愛では不可能だ!!」

「一方的? 違う、僕らは愛し合って、愛し……合って? ア、イシ……」

? どうしたのか分からないけど、今がチャンスだ。

「レナ、大丈夫かい?」

「ありがとうございます」

僕はレナの鎖を外してやる。その瞬間だった。

「ウオオオオオオオオオオオオ」

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ! ! ! ! ! ! !

「!？」

「アレ！？」

「モンスター化。最悪の推測が当たったな。だがあれを見る――！」

カナメが指差した先、まるでオーガになったアレンの後ろに拳大の石が浮いていた。

「あれを壊せば、おそらく」

「アレンは元に戻る！！」

良かった。モンスター化してるとはいえ人を倒すなんて嫌だからな。

要
S
i
d
e

さて、あまり力を使えないな。でもこれから世話になりそうな奴らに隠すのもな。

「ハアッ！！」

クロードがアレンに剣を振り下ろすが、掴まれて投げられた。

「ガハッ!？」

クロードは壁に叩き付けられ、地面に落ちた。

「ヒール!！」

クロードの体が突然光に包まれ、傷が癒えた。回復魔法だな。やったのはレナか。

「クロードさん、治りましたか？」

「ありがとう、もう大丈夫。しかし近付きにくいな」

「なら遠距離から攻めるんだな」

「遠距離………よし!！」

何か思い付いたようだ。なら見せてもらおうか。

「空破斬!！」

クロードが剣を振ると、蒼い衝撃波がアレンへと向かっていった。アレンは爪で弾こうとしたが、逆に自分の腕が弾かれた。

「そらよ!！」

「■■■■■■!！」

俺は体勢を崩したアレンに足払いをし、転ばせた。その間にクロードは後ろに回り、剣を振りかぶった。

「終わりだあ！！！！」

「■■■■！！！！」

剣が石を斬り裂き、それと同時にアレンが悲鳴を上げて人に戻った。

……

……

……

…

アレンが目覚ましてから事情を説明してやった。本人は何があったのか理解出来ていない様子だった。

「本当に覚えていないの？」

「すまない。さっぱりだ。だけど僕が迷惑を掛けたのは変えようのない事実だ。本当にすまない」

「いや、お前が悪い訳じゃない。それであの石について聞きたいんだが」

「それなんだが、殆ど覚えていないんだ。ただあの石を見つけ出した時、自分は何でも出来る。何をしてもいい、って気持ちが沸き上がってきたんだ」

石自体が何か特別な代物だったか。だが粉々になっちまったからな。

「手掛かりなしか」

「そうがっかりするなクロード。時間はまだある」

「三人共、アリアまでは僕が送ろう。罪滅ぼしにはならないけど、助けてくれたお礼だよ」

「ありがとう、アレン」

この先こんな敵がまだ出てくるんだろうな。仕方ない。自分で首を突っ込んだ事だ。最後までやりきろう。

謎の石（後書き）

もみもみラジオ

桜「どうも皆さん。桜です。今日は早速質問を貰ったので答えましよう」

Q・なのは達は呼べるの？

A・呼べません

桜「これはネタバレになっちゃうんだけど、通信は可能ですよ。そうそう、木乃香さんと刹那さんと千雨さんには子供が一人づついます。」

まだまだ質問は待っています。では次回もお楽しみに」

秘密（前書き）

アリかな雑談室

叶「現在お見合い候補は一人」

アリサ「あら、そうなの」

叶「自分の事だよ!？」

アリサ「生涯独身って格好良くない？」

叶「駄目だよ!!その発想がもう駄目だよ!!」

アリサ「それでお見合いの相手は？日時は？」

叶「相手はライ様の所のユーノさん。日時は次回」

アリサ「そうなの。じゃああらずじね」

叶「もっと気にしてよ」

突如誘拐されたレナ。犯人は昔馴染みの男、アレンだった。

要とクロードはレナを救出したが、モンスターと化したアレンが立ちふさがる。

アレンをモンスターにした石を破壊し、無事に事件は解決したのであった。

アリサ「それでは本編どうぞ」

秘密

クロードside

アレンの事件があつた日の夜の事だ。レナが突然僕の部屋を訪ねてきた。

「どうかしたのかい？」

「クロードさんに話しておきたい事があつて」

「ああ、いいよ」

神妙な感じだったから断る訳にはいかない。何かあるはずだから。

「じゃあ、こっちに来て下さい」

レナに連れられて川の上にある橋に来た。夜空が川に映って綺麗だ。つと、そんな事は問題じゃないな。

「それで？」

「クロードさんって旅に出るんですか？」

「……………そうだね」

元の世界に帰る手掛かりを見つけるためにこの村に留まり続ける事は出来ない。だから行かないといけないだろう。

「私も連れて行って下さい」

「な、何を言ってるんだ!？」

「私だって自分の身を守れますし、回復だって出来ます」

「でも、レナがついて来る理由がない」

「……………実は、お母さんは私の本当のお母さんじゃないんです」

「え？」

本当のお母さんじゃない、って事は養子か何かか？それとも…………

「その日の事ははっきりと覚えています。あれはお父さんが亡くなった日の夜でした」

くくく

「うつ…うつ…お父さん」

その日は私は部屋で一人で泣いていました。そんな時、一階からお

母さんと村長様が話す声が聞こえてきたんです。

「あなた……どうして……」

「ウエスタよ。悲しいのは十分に分かる。しかし、覚悟を決めねば」

「村長様！！あの人がいなくなった今、私はレナに一人で伝えないといけないですよ！！」

「何を話しているんだ」「あの子が本当は私達の娘ではないと！！」
「っ！？」

「これ！！レナに聞こえたらどうする！！」

「あの子なら泣き疲れて寝ていますよ。こんな、こんな事になるならあの子と一緒にペンダントなんて拾わなければよかった！！それなら本当の親の物もなく、私達の本当の娘として育てられたのに！！」

~~~~~

レナにそんな過去があったのか。ウエスタさんとは本当の親子にし

が見えなかったから分からなかった。

「私は、本当の両親を見てみたいです。私をこのペンダントと一緒に神護の森に置いていった両親を」

本当の親を捜すため……

「レナの気持ちはよく分かった。だけど一つお願いを聞いてほしい」

「何ですか？」

「僕に敬語は使わなくてくれるかな？」

「……ふ、ふふふっ」

「笑う事ないじゃないか!!」

「ごめんなさい。じゃあこれからよろしくね、クロード」

「よろしく、レナ」

「俺は置いてきぼりか？」

突然聞こえた声に振り返るとカナメが立っていた。全然気づかなかった。

「レナちゃんも大層な秘密を持ってたもんだ」

「いえ」

「こうなったら俺も俺の秘密を暴露しないとな」

カナメの秘密？確かにカナメには気になる点がいくつかあったけど

……

「ただ言える事は少ないぞ」

「それでもカナメさんは話してくれるのでしょっ？」

「一緒に旅をするからな。まずクロード」

「うん？」

「記憶が一部ないと言ったな。あれは嘘だ」

「ええ！？」

怪しくはあったけど、そんなにはつきりと言われるなんて思っても  
みなかった。

「そして俺は身体の中にバケモノを飼っている。それが何かは秘密  
だ」

化け物って何だろう。そこら辺にいるモンスターみたいなものだろ  
うか。

「他にも秘密はあるんですか？」

「いい質問だレナちゃん。だが今はまだ秘密だ」

「そうですね。でもちょっとカナメさんの事が分かった気がします」  
レナは楽観的だなあ。

要side

今日は旅立ちだ。朝から気合いを入れていたんだが……

《主、奥方様達から通信です》

「あいよ」

周りに気づかれないように神護の森の高い木に登って通信するか。

「はい、もしもし」

『あ、要くん？なのはだけど、今何処にいるの？旅館から到着してないって連絡があつて。転移しようにも通信しか出来ない距離だし』

「厄介事に首を突っ込んだ。キャンセル頼む」

『もう、あんまり暴れないようにね』

「相手による。じゃあな」

《もうよろしいので?》

「ああ」

通信が出来る。それが分かっただけでも十分な収穫だ。これでいつでも話す事が出来る。

「さあ準備しようか」

《皆さん町の門に集まっていますよ》

「何!？」

早いじゃないか。そんなに急ぐ必要ないだろ。とにかく急がないと。

「到着!！」

「カナメ、何処にいたんだ?」

「森に」

「あそこは気持ち良いですからね」

「レナ、無理したら駄目よ。クロードさん、カナメさん、レナをよろしく願います」

「大丈夫よお母さん」

「頑張ります」

「むしろレナちゃんの世話になるかもな」

「三人共、旅の無事を祈っておりますぞ」

「何かあれば帰ってきなさいよ」

「「行つてきます」」

そうして俺らはアーリアを旅立った。そういえば次の目的地を聞いてなかったな。

「レナちゃん、次は何処に行くんだ？」

「クロス王国ですよ。サルバを経由して行きます」

「王国か。どんな所なんだろう」

「行けば分かるさ」

俺達の旅はまだ始まったばかりだ！！

……………打ち切りじゃないぞ。

## 秘密（後書き）

もみもみラジオ

桜「どうも皆さんこんにちは。今日もラジオの時間です。今回も質問を頂いておりますので答えていきましょう」

Q・ネギまの卒業式から何年経過したんですか？

A・7年です。

桜「ちなみに何故7年かというと、ネギま本編から数えると丁度10年になるからです。あの卒業式は高校の卒業式でしたからね。雨季さんが間違えて質問を感想返しで答える場合もありますが、ご了承ください。

では次回もお楽しみに」

## クロス王国（前書き）

### アリかな雑談室

叶「では前回の予告通り、アリサさんとライ様の所のユーノさんのお見合いを始めます」↑マジックミラーの裏

アリサ「よろしく」

ユーノ「う、うん」

アリサ「そんなに緊張しなくても」

ユーノ「そうだよね。緊張し過ぎだよね」

叶「固いなあ」

アリサ「最近プライベートで女の人と話したりはしてる？」

ユーノ「してるけど、やっぱりお見合いとなると……こっつ」

アリサ「もう。なら早く話しましょう」

ユーノ「えっと、じゃあ趣味は？」

叶「無難過ぎる」

アリサ「特に決まった趣味はないわね。沢山のものに手を出してるわ。ユーノは遺跡探索？」

ユーノ「うん」

アリサ「残業とかはやる？」

ユーノ「やるよ」

アリサ「最近の流行りものとか知ってる？」

ユーノ「流行りもの？どんなものがあるかな？よく分からないや」

アリサ「……ごめんなさい」

ユーノ「え？」

アリサ「相手の生活に極力合わせるつもりだけど、やっぱり生活に余裕がある人がいいわ」

ユーノ「そう言われるとな」

叶「仕方ないね。では本編スタート」

## クロス王国

クロードside

アーリアを旅立ってから数時間。辺りはすっかり暗くなってきた。

「あ！見えました！あのお城がクロス城です！！」

闇夜の中、遠方に見えるお城があつた。やっと着いた。慣れない馬で体が疲れているから早く休みたい。

「こんな時間だが、宿屋空いてるか？クロードはお疲れのようだぞ」

「一応知り合いの宿屋があるんでそこを訪ねてみましょう」

クロス王国に入って左手に行った場所にその宿屋はあつた。灯りが点いてるからやってはいるようだ。

「お邪魔します」

「おやレナじゃないかい！！久しぶりだね！！」

「お久しぶりです、おばさん。突然ですけど部屋は空いてますか？」

「一部屋なら空いてるけど、三人で泊まるのかい？」

「そうですけど」

「彼氏はどっちだい？」

「ええっ!？」

うわ、これはレナが可哀想というか。絶対にあの人、どっちも彼氏じゃないって分かってて言ってるよ。

「彼氏なんかじゃありません!!ただの仲間です!!」

「……そんな力強く否定しなくても」

ついそうポツリと呟いてしまった。そりゃ彼氏じゃないけれど、もつとやんわりと否定すればいいじゃないか。ただの仲間って。

「そうそう、この間フラックさんが来たよ」

「ディアスが!？」

ディアス?今のレナの様子からするに何か重要な人か?

「はい、この部屋だよ」

「ありがとうございます。お金は」

「いいよ。久しぶりなんだし甘えなさい」

「じゃあ、甘えさせてもらいますね」

部屋は綺麗だな。まあ宿屋なんだから当然か。ベッドは二つだけどソファがあるから誰かそこに寝ればいいか。

「なあレナちゃん。フラックさんってのは誰だ？」

「僕も気になってたんだ。教えてくれるかい？」

「えっと、本名はディアス・フラックって言って、昔はアーリアに住んでいたんです。今は旅に出てますけど、凄腕の剣士なんですよ」

「……………彼氏か？」

「カナメさん！！」

「おっと失礼」

「……………」

「クロード？どうかした？」

「ん、何でもない」

レナがディアスっていう人の話をしている時、普段と少し違って楽しそうだった。それだけレナの心に入ってる人なんだろう。

「……………嫉妬か？」

「カナメ！！」

「俺怒られてばっか」

今、僕はどうして怒鳴ったんだ？まさか、本当に嫉妬している？そんなはずはない。レナとはまだ会って二日なんだから。

## 要 side

宿屋で一泊して今日はクロス王って王様に謁見する予定らしい。

「ただ早過ぎね?」

「そうですね。ちょっと早起きすぎましたね」

「なら別れて街を見て回らないか?初めての大きな街だし」

「いいな。なら昼に城の前に集合で」

という事になったので俺らはバラバラに別れて街を探索する事にした。

「此処もいい街だ」

アーリアは自然豊かで、サルバは鉱山らしく鉱物が有名だった。クロスはクロスで城下町らしく様々な人や商業が溢れ、活気に満ち溢れている。

ドンッ パリン

「っと」

「お？」

少し狭い道で男とぶつかってしまった。その時に男の持っていた瓶が割れてしまった。

「すまない。前を見ていなかった」

「いや、俺もだ。悪いな」

！ この男、額に目がある。三つ目の人間なんていたんだな。つかさっきの瓶は酒か。ふむ……

「ちょっとお詫びするから来てくれ」

「いや、そんなのは」

「俺のお節介だ。受け取ってくれないか？」

「お節介か。なら遠慮なく受け取ろう」

.....

.....

.....

...

「「あっはっはっは!!」」

俺は三つ目の男を酒場に連れて行って一緒に酒を呑んでいる。なかなかいい呑みっぷりだ。

「そういえば自己紹介がまだだったな。俺はエルネストだ」

「俺は要だ。よろしくな、エルネスト」

「カナメ?もしかして地球人?」

「お、つまりあんたも違う星から?」

「テトラジェネシスという、まあ人工的なものが集まった惑星だ」

へえ、そんな星もあるんだな。宇宙は広いからそんなものもあるか。

「とりあえず呑もう!!」

「ああ!!」

酒を飲み交わしたんだからエルネストはこれから友認定だ。今日は実にいい気分だ。

「あ、もう昼か。残念だが、予定があるんだ」

「そうか。なら俺もそろそろ遺跡探索に行くか」

「またな、エルネスト」

「また会おう、カナメ」

しかし大分吞んでしまったな。臭いで文句言われるかもしれん。

《主、消臭しましょうか》

「おう、サンキュー」

本当にアリストテレスは便利な奴。しかし消臭機能なんていつ付けた？こういうのを想定して誰かが付けてくれたかな？

「二人共、待ったか？」

「いえ、丁度ですよ」

「それは良かった」

「カナメは何をしていたんだ？」

「ちょっと遊んでいた」

酒盛りは大人の遊びだよな。そうだ。絶対にそうだ。

「さあ、クロス王に会おう」

レナ side

受付の兵隊さんに村長様からの推薦文を渡すと、順番を早めてもらえる事になった。

「前の方が終了し次第謁見の間へどうぞ」

「分かりました」

「なあレナちゃん、村長と王様ってどういう関係なんだ？あんな小さな村の村長と一国の王。関係性が見えないんだが」

どうだったかしら？私がうんと小さい頃から村長様と王様は仲が良かったみたいけど。

「クロードさんはどう思います？」

「そこで僕に振る？そうだな、村長が王様の何かの先輩とかつてのはどうか？」

そんな話は聞いた事がないけど、私に話してないだけかもしれないわね。確かにそれなら辻褄が合うし。

「レナ様、クロード様、カナメ様、お時間です」

「はい、分かりました」

兵隊さんに連れられて王様のいる謁見の間に入った。そこには玉座

に座った王様がいた。お髭が立派。

「おお、レナ。久しぶりではないか」

「お久しぶりです、王様」

「そう固くならなくてもいい。昔はこんなに小さかったのに、美しくなったな」

王様は手で昔の私の身長を表すようにしながら言う。昔、私はその治癒能力をお見せするためにお母さんと村長様と一緒に王様にお会いしにきた事がある。

「その二人は？」

「お初お目にかかります、クロス王。私、カナメ・イチジョーと申します。レナ・ランフォードとクロード・C・ケニーと共にソーサリーグループの調査をしている者です」

カナメさんは片膝を付いてそう言った。クロードも真似をして同じような姿勢をとった。

「ソーサリーグループの調査、とな」

「はい、王様。よろしければ現在ソーサリーグループに関して解っている事があれば教えてもらいたいのですが」

「わしらも把握しておる事は少ない。エル大陸とは交信が出来ぬ状態じゃからな」

「あの、エル大陸に兵を派遣したりはしなかったんですか？」

クロードが尋ねた。私も同じ事を考えたから丁度良かった。

「当然派遣した。しかし戻ってこなかった」

「訓練された兵すらも生きて帰れぬ魔物の巣窟。それが今のエル大陸と考えてよろしいですか？クロス王」

「その通りじゃ、カナメ。わしとしては民間人のお主らが調査に行くのは心配でならん」

「ご安心下さい王様。クロードの剣とカナメさんの拳はどんな敵にだって負けません」

クロス王国に来る途中、何度か魔物に襲われたけど、二人が難なく撃退してくれた。この二人と一緒になら大丈夫。

「ほう、それほどの使い手か。……………あれを」

「はっ！！」

王様が兵隊さんに何か指示をすると、兵隊さんは一枚の紙と袋を持つてきた。

「王からの餞別です。お受け取り下さい」

「これはお金に、船の通行証ですか？」

「うむ、エル大陸へ行くならばクリクから船に乗る必要があるから

な。今は猫の手も借りたい状況。お主らならば何かやってくれそう  
な気がするの。金は些細だが、受け取ってくれ」

「「「ありがとうございます」」」

「現在のエル大陸は非常に危険。三人共、生きて帰ってきてくれ」

「「「はい!!」」」

王様からの餞別を有り難く頂き、私達は謁見の間を後にした。

.....

.....

.....

...

「ふう、緊張した」

クロードがお城から出て発した第一声がそれだった。確かに凄く緊張してたものね。

「それに比べてカナメさんは、こういうのは慣れてるんですか？」

「得意ではないがな。違和感バリバリだったろ」

「うんうん」

「いや、否定しようぜ」

だってカナメさんが俺じゃなくて私って言ったりして、無理に丁寧に振る舞おうとしてるのが目に見えて分かったもん。

「次は港町クリク経由でエル大陸か。順調に行くといいな」

「不吉な事言っなよ、カナメ」

「何を言う。旅の醍醐味は意外な出会いとトラブルだぞ」

意外な出会いはともかく、トラブルには会いたくないな。出来れば無事に全てが終わってほしい。

「それじゃあクリクに向かいましょう」

「ああ」

「任せな」

この先も、どうか無事でありますように。

## クロス王国（後書き）

もみもみラジオ

柊「皆さんこんにちは。今回は質問がないんですよ。質問がない時は誰か呼ぶとしましょうか」

シャル「呼ばれた気がして!!」

柊「お帰り下さい。やる事もないのでSO2のあるあるを一つ」

PSP版のアレンの顔グラは爆笑もの

柊「では次回もお楽しみに」

## お宝発掘大作戦（前書き）

アリかな雑談室

叶「今回はユキアン様の所のタカミチさん。原作より見た目若くてタバコも吸わない。髭もちゃんと剃っていると好印象。でもどうなるかな？」↑屋根裏

アリサ「よろしくお願いします」

タカミチ「こちらこそ」

アリサ「事前にプロフィールは貰いましたが、仕事熱心ですね」

タカミチ「そうですね？でも出張も最近は減ったんでそろそろ身を固めるべきかと思ひまして」

アリサ「私みたいなおばさんでもいいのかしら？」

タカミチ「そんなおばさんなんて。謙遜し過ぎですよ」

アリサ「でもエヴァンジェリンとか」

タカミチ「人外と比べたら誰でもボロ負けですよ」

叶「なかなかいい雰囲気。これはもしかして」

タカミチ「お料理とかはなさるんですか？」

アリサ「一通りは。タカミチさんの好きなお料理は？」

タカミチ「やっぱり朝一番に美味しい味噌汁が欲しいですね」

アリサ「それじゃあまるで告白よ」

タカミチ「あ、あはははは」

叶「そろそろ時間だよ。どうなるかな？」

アリサ「タカミチさん、これから予定は？」

タカミチ「今日は特には」

アリサ「なら少し遊びに行きましょう」

タカミチ「構いませんよ」

叶「延長デート、キターーーー（。。）ーーーーッ……とじつと  
ころで茶番は次回へ続く……本編スタート……！」

## お宝発掘大作戦

要side

謁見を終え、俺らはクリクへと向かうため装備やらアイテムやらを揃えていた。

「うゝむ」

「カナメさん、どうかしましたか？」

「いや」

この世界では体力や魔力を回復するのはベリイなんだよな。クラトスの世界はグミだったが、こういうのを見るとやっぱり異世界だなと思ひ知らされる。

「クロード、レナちゃん、装備は揃えたか？」

「僕らは大丈夫だが、カナメはいいのか？」

「いらん」

生身で戦闘してきた俺からすればナツクルですら余分なもの。そういえば最近アリストテレスをセットアップしてなかったな。今度暇があればやってやろう。

「回復アイテムも揃えた。食い物も買った。忘れ物はないな」

「じゃあ行きましょう」

店を出ると、街の出入り口の目の前にある円形の広場に人が集まっているのが見えた。

「なんだあれ」

「何かやっているのかな？」

「気になるなら見に行くか？俺はそこまで急ぐ必要はないと思うからな」

「そうだな。僕も見ぐらいなら」

「大道芸かな。ちょっと楽しみ」

人を掻き分け広場を見ると一組の男女が向かい合っていた。男は口―ブを頭から被り、いかにも魔法使いな格好をしていて、女は薄着で肌が露出した衣装、とんがり帽子を被り杖を持っている。二人の間には地図のようなものがある。

「てめえ！！この地図は俺のもんだぞ！！」

「あら、私はちゃんとお金を出して買いましたよ」

「ちゃんとだあ？あんな詐欺紛いな事しやがって！！クソアマが！！」

喧嘩のようだな。見せ物じゃないが、様子を窺うとしよう。

「許せない」

「レナ！？」

あ、レナちゃんが割り込みしまった。

「貴方！！女性に対してなんて態度なの！？」

「ああ？んだこのガキは」

「謝りなさい！！」

「邪魔すんなら、纏めてぶっ飛ばしてやる！！」

男の手に魔力が集まる。本当に魔法使い、いや、確かこの世界では紋章術師だったか。どっちでもいいが遅いな。

「ファイアボルト！！」

「！ぬわあああああ！？」

ほらな。ちんたらしてるから女の紋章術が発動しちゃった。だがあの詠唱スピードに火球の速さ。かなりの熟練度だな。威力も抑えている。見事な術師だ。見た目はあれだが。

「貴女、出てくるのはいいですが、もう少しお気をつけになられては？」

「す、すみません」

「レナ、怪我はないかい？」

「勝手に行動したら駄目だぞ」

「……貴方達、先程クロス王へ謁見していましたわね」

どうしてそれを知ってるんだ？他人の謁見なんて見れるもんじゃな  
いはずだが。

「私の前に割り込んだ人達がいるというので兵士に文句を言いに行  
きまして」

「あん時揉めてたのはあんたか」

「「？」」

二人は気付いていなかったみたいだが、後ろで何か騒いでいるのが  
いた。詳しくは聞こえなかったが、順番どうこう言ってたんだよな。

「貴方達、ソーサリーグロブの調査をするとか」

「そうですけど」

「実はこの地図、お宝の地図なのですが、ソーサリーグロブに関  
するお宝だから」

「まさか。信じられないな」

クロードの言う通り。普通は信じられたもんじゃない。地図は古い  
ものだ。今回現れたソーサリーグロブについての情報があるはず

もない。だが……

「面白そうじゃない。やりましょう」

「俺も賛成だな。理由はあるが」

「理由ってなんだよ」

「ソーサリーグロブに挑むにおいて宝の一つも見つけられない実力じゃ挑むだけ無駄だ。宝があるなら相応のダンジョンだろうしな」

「でもなあ」

「なんだ？失敗するのが怖いか？」

「むっ、そこまで言うならやってやる」

単純だな。こんなに単純だと扱いやすくて助かる。

「決まりましたわね」

「ああ、決まったぜ。場所は？」

「クロス洞穴ですね。私はセリーヌ・ジュレス。よろしくお願いしますわ」

「私はレナ・ランフォードです」

「カナメ・イチジョーだ」

「クロード・C・ケニー」

クロードside

いいように騙された気がする。というか絶対に騙された。カナメの奴、結局なんなんだ？詳しく訊いても教えてくれないし。つと、敵だ。

「双破斬!!」

下から斬り上げ、剣を振り下ろし敵を斬る。この洞穴で思い付いた技だ。こういうのを考えると訓練にもなってるな。

「そろそろ着きますわ。そういえばレナさん。レナさんは回復の紋章術を使いますわよね？何処で覚えまして？」

「物心付いた時には使えましたけど」

「紋章術に回復の紋章なんてなかったはずなのに」

「ならレナちゃんは回復紋章の始祖だな。おめでとう」

「実感湧きませんね」

何か突然変異的なものかな？でもレナのお陰で僕らは安全に旅を出  
来てるんだ。有り難く思おう。

「あら？」

「どうかしたか？」

「道がありませんわ。地図ではこの先にお宝があるはずなのに」

「まさか、偽物ですかね？」

「高い買い物でしたのに……」

偽物だとしたらとんだ迷惑だな。あるのはぼんやりと緑に光る大き  
な岩だけ。

「セリー又さん、僕にも見せて下さい」

「ええ、どうぞ」

本当だ。地図なら道があるはずなのに。もしこれが本物だとしたら  
道が崩れたとか。いや、そんな様子はない。じゃあやっぱり……  
…ん？

「ここに、小さく何か書いてありませんか？呪文がどうか」

「！ 貸して下さいな………確かに。掠れていて読みにくい  
ですが、これなら」

セリーヌさんがよく分からない呪文を唱えると岩の緑の光が移動し、壁を光らせると道が出来た。その先には星を模した台座の周りに宝箱がいくつか置かれている部屋があった。

「やりましたわ！！クロードさん！貴方のお陰ですわ！！」

「そ、そんなに喜ばなくても」

「トレジャーハンターがお宝を目の前に喜ばないはずがありませんわ！！」

「なら開けてみるか」

カナメを筆頭にみんなが宝箱を開けていく。そして僕が開けた宝箱は空っぽだった。

「クロードのはハズレみたいね」

「残念でしたわね」

「いいや、大当たりだ」

「カナメ？何を言って」

グギヤアアアアアアア

「「「！！？」」」

「構えろ」

周りに置いてあった悪魔のような一体の銅像が動き出し、こっちに向かって飛んできた。

「ガーゴイル!？」

「この、流星掌!!」

僕は手から気を放ったが、ガーゴイルは当たっても全く動じずに向かってくる。

「なら斬ってやる!! 双破斬!!」

ガキン

「っ!!? 硬い!!」

グギイイイイイイイイ

「クロード危ない!! プロテクション!!」

ガーゴイルに剣が弾かれよろめいた僕に、レナが防御紋章術を使ってくれた。お陰でガーゴイルの爪をなんとか防げた。

「銅像の、くせに、意外と、速いな」

カナメもガーゴイルの攻撃を避け続けている。でもこれじゃあギリ貧だ。

「皆さん!! それを一点に集めて下さいな!! 紋章術で倒しますわ!!」

そうか！武器が効かなくても紋章術ならあの硬さを貫けるかもしれない！！

「任せろ！！飛べ！！」

カナメが隙を見てガーゴイルを壁に蹴り飛ばした。あそこに僕の前にいる奴も飛ばさないと。

「うおおおおお！！流星掌！！」

さっきの気を放つのは違い、連続パンチを放つ。これが本来の流星掌だ。流石のガーゴイルもこれには吹っ飛んでくれた。

「今ですわ！！光よ、レイ！！！」

空中から無数の光線が落ちてきて、ガーゴイルのみならず、地面や壁すら抉り、破壊していった。これがセリーヌさんの本気か。

「いがかしら？」

「！セリーヌさん！！後ろです！！」

「え？」

グギヤアアアアアアア

「きゃあ！？」

マズい！！まだガーゴイルが残っていたか！！でもみんなセリーヌ

さんとの距離が離れている。駄目だ、間に合わない！！

グギイイイ……………

「……………あれ？」

ガーゴイルはセリーヌさんを攻撃する事なく倒れた。その胸には大きな穴が開いていた。

「大丈夫か？」

「これは、カナメさんがやりましたの？」

「まあな」

あのガーゴイルを素手で？いやそれ以前にいつの間にセリーヌさんの後ろにいた？

「これが最後の宝箱だな」

カナメは僕らの驚きを無視して宝箱を開けた。そこには古びた紙が入っていた。

「古文書だな。かなり古い。よく原形を留めている」

「見せて下さいませ」

セリーヌさんがカナメから古文書を受け取るが、一目で解らないという顔をした。

「駄目ですわ。こんな文字、見た事がありません」

「僕も少し……うわ、なんだこれ？」

「文字、なの？記号みたい」

今まで見た宇宙の言語、そのどれにも当てはまらない。法則も何もあつたもんじゃない。

「これは私の村のお爺様が、言語学者に聞くしかありませんわね」  
お宝は結局は何か解らない紙か。残念だ。

……

……

……

…

洞穴の出口に着いた。外の明かりが眩しいな。

「それでは皆さん。良い経験になりましたわ」

「……セリーヌさん。私達と一緒に旅をしませんか？」

「レナ？」

「レナさん、よろしくて？」

「ええ。いいよね、クロード？」

正直レナのいきなりの発言には驚いた。でもこれからの旅、セリーヌさんの紋章術があれば心強い。

「僕からもよろしく願います」

「俺も頼む」

「……ではよろしく願いますわ。クロード、レナ、カナメ」

こうして僕らに新たな心強い仲間が増えた。

## お宝発掘大作戦（後書き）

もみもみラジオ

桜「おはよう、こんにちは、こんばんは。今日ももみもみラジオを始めますよ。今回は質問が来ているので答えましょう」

Q・要は魔法やORTを使いますか？

A・使います

桜「魔法は近いうちに使う予定です。敵も強くなりますから生身での手加減が難しいのです。生身での手加減が難しいっておかしいですね。」

では次回もお楽しみに」

## 嫌な事は当たるのさ(前書き)

### アリかな雑談室

叶「アリサさんとタカミチさんのデートをこっそり観察。どうなるかな？」↑ドラム缶の中

タカミチ「お祭りですか」

アリサ「良いものでしょう？ さあ、出店を回るわよ」

タカミチ「ハハハ、そうですね。お祭りは楽しまないと。しかし浴衣が似合いますね」

アリサ「お世辞を言ってもメルアドしか出ないわよ」

タカミチ「メルアドが出るんですか」

アリサ「ふふっ、ほら焼きそば食べましょう」

タカミチ「食べ歩きならたこ焼きでは？」

アリサ「それも悪くないわね。なら私は焼きそばでタカミチさんはたこ焼きね」

タカミチ「分かりました」

アリサ「買ってきたわよ」

タカミチ「早っ!？」

アリサ「はい、あ〜ん」

タカミチ「えっ、ちょっと。こんな人混みの中で」

アリサ「いいから、あ〜ん」

タカミチ「……あ〜ん／／／」

アリサ「美味しい？」

タカミチ「……はい／／／」

叶「照れてちゃ駄目だよ。ガツンといかないと。ベビーカステラうまうま」

アリサ「あ、花火がやるんですって」

タカミチ「折角ですから観ていきましょうか」

アリサ「そうしましょう。タカミチさんのたこ焼きでも食べながらのんびりと」

タカミチ「いいですね」

ヒュ〜 ドーン

アリサ「上がった上がった」

タカミチ「綺麗ですね」

アリサ「私は？」

タカミチ「当然美しいですよ」

アリサ「照れるじゃない」

タカミチ「本音ですけど」

アリサ「ありがとう」

ヒュ〜 ドーン

アリサ「タカミチさん」

タカミチ「何ですか、アリサさん？」

ヒュ〜 ドーン チュッ

タカミチ「……………へっ？」

アリサ「今日は楽しかったわ。良ければ、また会いましょう。はい、メルアド」

タカミチ「……………はい」

叶「そこでキスとは悪くない。しかもしっかりと連絡先も渡す。これはお相手はタカミチさんに決まりかな？」

アリサ「悪くないけど、まだ決めかねるわね」

叶「ひゃあっ！？ いつの間に!？」

アリサ「帰るわよ。では本編どうぞ」

嫌な事は当たるのさ

レナ side

この街がクリクね。港町なんて初めてだから何かあるか楽しみだわ。

「ねえ、少し個人行動してみない？」

「まずは船の時間とかを聞くべきだと思うけど」

「いいじゃありません事。船は逃げませんわよ」

「俺もいいぞ。港町だからいい肴がありそうだしな」

「今何か違わなかったか？」

「クロードは細かいな」

お魚か。今後の旅の食事のレパートリーとしてお魚料理もいいかな。でも生物だから気をつけないと。

「先に行くぞ」

「ではまた後で」

「……僕も行くか」

この街ではどんな事が待っているのかな？初めての街はいつでもワクワクするわね。

……  
……  
……  
……

広場に人が集まってる。最近よくそういう場面に遭遇するわ。

「あ、みんな」

「レナも来たのか」

「何をやってるの？」

「あそこにいる女性が人を集めているのですわ」

綺麗な人。占い師みたいな格好をしてるけど、何をするんだろう。

「皆さん！ 早くこの街から逃げて下さい！！ もうすぐ災厄がこの街に訪れます！！ だから早く！！」

「災厄？」

災厄って言うと、ソーサリーグロブみたいなのかな？でもあの人がどうしてそんな事を知っているんだろう。

「何言ってるのかしら？」

「可哀想に。頭がおかしくなったんだ」

集まっていた人達はみんな離れていってしまった。女性はその様子を見て、一人悲しそうにしていた。

「よく分からない事を言う人ですわね」

「根拠も何もないからね」

「……………」

「カナメさん？」

「さっきのはとんだ笑い話だな」

とても深く考えていたように見えたけど、気のせいだったかしら。あ、さっきの女性がもういなくなってる。

「みんな集まっちゃったんだから、ここからは団体行動をしよう」

カナメさんがそう言うのでみんなで港まで行った。立派な船が沢山あるけど、私達が乗るのはどれだろう。

「そこな船長さんや」

「なんだ、あんたら」

「俺らは訳あってエル大陸へ向かうんだ。だからエル大陸行きの船を探しているんだ。通行証もある」

「ほう、こりゃ立派な通行証だな。エル大陸ならうちの船で行けるが、まだ点検中だな。しばらく待ってくれ」

「お前ら良かったな」

早いよカナメさん。気が付いたら交渉終わってるし。でもお陰で街を見て回る時間が増えたわね。

クロードside

エル大陸行きの船もカナメがゲットしたし、街で何をしようかな。

ドンッ

「っ!？」

後ろから何かが突然ぶつかって、走っていつてしまった。

「子供？」

「いきなりぶつかってきて謝りもしないのかよ。親の顔が見てみたい」

「礼儀がなくなっていますわね」

「手癖もなっていないようだかな。クロード、財布をやられたぞ」

「え？ 本当だ！！」

子供が悪さをするのはよくあるけど、こんな犯罪をするなんて許せない！！ 絶対に捕まえてやる！！

「青髪の坊主だ。探すぞ」

カナメは子供の容姿まで覚えていたようだ。助かる。

「でもどこに行ったのかしら？」

「手掛かりがありませんものね」

「ガキの事はガキに訊くのが一番。港で子供が遊んでいたのを見た。行ってみるぞ」

「大切な旅金だ。返してもらわないとな」

.....

……  
……  
……

「それケティルだよ」

「ケティルだね」

「間違いないよ」

港で遊んでいた子供達が出した名前はケティルというものだった。

「それで、ケティルくんは何処にいるの？」

「ケティルはいつもあっちの路地で一人で遊んでるよ」

「一人？ 皆さんとは遊びませんか？」

「だってお母さんがお金持ちの子と遊んだらダメって」

ケティルって子のお金持ちなのか。ならスリなんてする必要はないのに。それに一緒に遊ばないようについておかしくないか？

「ったく。何となく見えてきたぞ」

「何がですか？」

「どうしてスリなんかしてるかってのだ」

「そうなのか」

僕にはまだ分からないけど、カナメは気付けたようだ。そういえばさつきからレナが子供達と話しているな。

「じゃあお願いね」

「うん」

「いいよ」

「レナ、何を話していたんだい？」

「ケティルさんと遊んであげてって。あんな理由で仲間外れにされたら可哀想じゃない」

「そうだね」

レナは本当に気が利くな。僕も考えてはいたけど先にやられちゃったな。

見つけた。あれがケティルか。確かに一人でいるな。

「レナちゃん、頼む」

「いいですよ」

こういう時は若くて子供慣れしてる女の子が一番だよな。下手に俺みたいなのが出ると警戒させる。

「ねえ、君がケティルくんかな？」

「そうだよ」

「私達ね、君ぐらいの子にお財布盗られちゃったの。何か知らないかな？」

「……知らない」

「本当か？ 隠すといい事ないぞ」

「クロード！！ 怯えてるじゃない！！」

でしゃばるなつての、あの戯けが。

「知らないならいいの。でもお財布には旅のためのお金が入ってるから」

「あれっぼつちで旅してるの！？ ……あ」

見事に吐いたな。別に誘導尋問って訳でもないのに、随分と素直だ

な。

「やっぱりお前か!!」

「クロード？」

「……………黙ってます」

いい威圧感だ。こりや将来はかかあ天下になるな。

「それでどうしてあんな事をしたの？」

「みんなに認めさせたかったんだ。僕は金持ちのただの坊ちゃんじゃない。勇気のある海の男なんだって」

んなこったろうと思った。金持ちって点で気になってはいたんだ。金持ちの子供が持っているのは優越感ではない。周りが坊ちゃんだからと避けてばかりいるせいで仲間外れにされる劣等感だ。もちろん例外もいるがな。

「坊主。お前の目指している海の男ってのは人から物を盗ったりする海賊か？」

「違う!!」

「お前のやってるのはそういう事だ。違うか？」

「……………」

「善い行いをしろ。これまでやってきた悪い行いは洗い流せないが、

それ以上の善い行いを行えばいい。親の手伝いでも、友達に優しくするのもいい。それで、今すべき事は分かるか？」

「……財布盗つてごめんなさい」

返してくれたな。ちゃんと言えば分かってくれるのが子供だ。

「だけど、罪には罰だ」

「カナメ、子供相手にそこまでしなくてもよろしいのでは？」

セリーヌも甘いな。レナちゃんもクロードも心配そうに見てるし。だが俺も鬼じゃない。どうするかを考えくらはあるさ。

「さて……なら俺らに街案内をしてもらおうか」

「……そんなのでいいの？」

「そんなのって、俺らはまだ街に来たばかりなんだぞ」

「それはいい考えね」

「僕もそれには賛成だ」

「そういう考えならいいですわね」

こいつら絶対に俺がなんか体罰的な事するって考えてたろ。

.....

.....

.....

- 
- 
- 

俺らはケティルに街案内してもらっている。小さなところから大きなとこまでいろいろと案内してくれているのだが……

「お兄ちゃん達早く早く!!」

「そんな急ぐなつて」

さっきまでの反省具合が嘘のように元気だな。まあこっちの方がよっぽどいい。

[illegible]

「キヤツ!？」

「じ、地震!？」

「大きいですわ!!」

地震だと！？ しかもこの震度、街の場所、これはかなりヤバイ！！！！

街全体に響くような大声で叫んだ。混乱していた人達も俺の声が聞こえたのか我先にと高台へ向かって行つた。

「カナメはどうするつもりなんだ」

それだけ言って俺は走り出した。アリストテレスに生命反応の探知をさせ、逃げ遅れた人を探す。

「よりもよって港か」

「いた！！ お前ら、早く逃げろ！！」

「痛いよ……助けて」

どうやら一人が落ちてきた瓦礫に足を挟まれているようだ。早く撤去するか。

「こいつは俺が助ける。お前らは早く逃げろ」

「絶対だよ」

「約束してよ」

「ああ、約束だ」

さて、退かすか。

「ほらよ」

俺は子供の足に乗っている瓦礫を素手で投げ飛ばす。足は骨が折れているようだが、潰れていないだけマシか。俺は子供を負ぶってやる。

「行くぞ」

「あ……上!!」

近くの建物が崩れ、大量の瓦礫が降りかかってきた。走り抜けるか？ いや、切り刻もう。

「シールドスライサー」

魔法で創り出したシールドを薄く、鋭くし斬撃能力を付ける。更に遠隔操作タイプに改造をし、瓦礫を一瞬で小さく切り刻んだ。

「今の」

「紋章術だ」

嘘だな。

………

………

………

…

俺が高台に登りきった時、津波が街を飲み込んだ。多少の被害者は出たが、このレベルの災害ではかなり少ない方だろう。

「キュアライト」

今はレナちゃんが俺が助けた子供の治療をしている。近くではこの子の親も心配そうに見ている。

「応急処置は終わりました。しばらくは安静にした方がいいです」

「ありがとうございます!!」

「この子ったら、私達を心配させて」

「あのね、兄ちゃんすごかったよ。振ってきた壁をズババーンって切ったんだ」

「カナメ、そんな事が」

「さあな。それよりもこれじゃあ船は出れないな」

全てが飲み込まれたんだ。船だつて例外ではない。

「別の街を経由して行くしかありませんわ」

「仕方ないか。そうだ、ケティルは？」

「あそこ」

そこには親に抱き締められているケティルがいた。親も無事だったか。良かったな。

「いつまでも沈んではいられない。行くぞ」

しかしあの女の言う通りになったな。あいつはただの占い師だったのか、はたまた全く別の何かか。まあ後者確定だろうな。あくまで経験則だな。

嫌な事は当たるのさ（後書き）

もみもみラジオ

椀「最近めつきり暑くなりましたね。毛がベトベトします。どうも、椀です。ここにもラジオスタートのテーマソング的なものが欲しいな」と思い始めました。では質問が来ているので答えましょう」

Q・要は料理上手になっただんですか？

A・YES

椀「要さんは一通り料理は出来るようになりました。更に要さんは一つの料理に異常なこだわりをみせるようで、昔は野菜炒め、今はカツ丼です。カツ丼は豚や卵、お米や器ですら自家製です。これには奥さん達もドン引きだったそうです。

それと大切な報告。前作からコラボを希望して頂いた方々とのコラボをします。感想にやりたい事を明記して下さい。メッセージでも構いませんが、雨季さんは確認はしますが、見落とす可能性がありますので、ちゃんと教えてくれないと駄目ですよ。それと本編と関わるのも無理です。以上を踏まえた上でよろしく願います。では次回もお楽しみに」

## 番外・美味しい物は空の上（前書き）

アリかな雑談室

叶「今回から番外、コラボ回です」

アリサ「前作から希望してくれていた人限定だから、そんなに多くないわね」

叶「タカミチさんとの進展状況は？」

アリサ「いきなりね。まあそこそこかしら。でももう少し積極的かと思ったのだけど、まだあれじゃあ友人レベルね」

叶「キスしたのに？」

アリサ「あんなの口同士じゃないなら挨拶よ」

叶「そうなんだ」

アリサ「今回は霊亀様とのコラボ」

叶「世界は週間少年ジャンプで絶賛連載中の『トリコ』の世界です。ではどうぞ」

## 番外・美味しい物は空の上

要side

「やつほ、要くん。元気？」

「神様？ 元気ですよ」

宿屋で寝ていたのに気が付いたら神様の部屋にいた。よくある日常風景だな。

「君も大変だね。あの二人に頼み事されるなんて」

「今、向こうを空けて大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ。それより、野菜は好き？」

「好きですよ」

得意料理に野菜炒めがあるんだ。嫌いなはずがない。いや、作れても嫌いな人はいるな。

「じゃあこれからある世界に行ってらっしゃい」

足下に黒い穴が開き、俺は落とされた。何もおかしくない。日常だ。こう思わないとやってけない。

……  
……  
……  
……

落とされた場所は地面ではなく巨大な葉っぱの上。どれくらい巨大かというジャンボ機が滑走路に使っても大丈夫なくらい巨大だ。しかも地面からではなく、雲の上から降りてきている巨大な鳶の末端の葉っぱだ。

「ターゲットはあれか」

確かにあれは美味しい野菜だが、二人以上ないと取れないぞ。

「要〜!〜!」

「ライトじゃないか。それとそっちは新しい彼女か?」

「違う!〜!」

「不倫相手の葵で〜す」

「葵!〜?」

「本当は妹よ」

妹か。全然似てないな。名前もカタカナと漢字だし。

「何でいるんだ？」

「天使にベジタブルスカイでオゾン草を採ってこいって」

ベジタブルスカイってのは雲の上、上空数万メートルにある天然の野菜畑だ。無数の野菜が雲に根を張り巡らせ、さながら空飛ぶ大地だ。オゾン草はそこにある野菜の王様だ。

「俺の仕事はお前らの補佐になるのかな？」

「そうなのか？」

「じゃあお願いね」

「あんま魔法とか使っなよ」

こいつらがこの環境にどう立ち向かうのか楽しみだ。

ライトside

ベジタブルスカイ。まさかこんな所に向かわされるなんて。葵は大丈夫かな？

「うわっ！？」

「どうした葵！！」

「ルバンダもどきにビビっただけだよ」

「びっくりした。何これ、顔怖すぎ」

ルバンダもどきは幻覚などを見せる怪鳥ルバンダの姿に擬態した鳥だ。人っぽい顔にデカい体長、更に群れだから初見ではビビる。

「食うか」

要がそう言うのと近くに寄ってきたルバンダもどきを手刀で貫いた。それでルバンダもどきは絶命した。

「これ食べれるの？」

「この世界じゃ食べれない生物が少ない。この先厳しいからな。栄養補給は忘れずにしろよ」

ルバンダもどきは羽をもがれ、要が取り出した肉焼き機で丸焼きになった。

「味付けは塩胡椒で」

「あ、美味しい」

「ちゃんと料理したらもつと美味いぞ。ライト頑張れ」

「俺かよ」

「お兄ちゃんよろしくね」

好き勝手言ってくれるな。まあ確かにこの中で一番料理が上手いのは俺だろうけど。

葵 side

しばらく鳶に登ったけど頂上が見えずに夜になった。今日は比較的に広くて丈夫な葉っぱの上でテントを張って寝るみたい。

「お前らはしっかり休めよ。俺は見張りをしてる」

それだけ言つと要さんは外に行った。元気な人。

「さて葵、寝るぞ」

「一緒に？」

「別々に決まってるだろ」

「冗談だよ。……ねえ、お兄ちゃん。要さんってどれくらい強いのか？」

「要さんが強いっていうのはお兄ちゃんや鏡さん、他にもいろんなところから聞いている。でも実際にどれくらいの強さかは知らない。」

「そうだな。単純に強い。それが要かな？」

「単純？」

「ああ。武器を使うわけでもなく、特別な技を多様するわけでもなく、ただ力で相手を潰しにかかる。単純だからこそ強く、破られにくいんだ」

「ふーん」

「なんとなくは分かったけど、そこまでお兄ちゃんが評価しているとすると実際に見てみたいな。」

「要もそのうちやる気を見せるさ。じゃ、おやすみ」

「おやすみ」

……  
……  
……  
……

寒い。でも日差しは強いから日焼けが気になる。日焼け止め持ってくれば良かった。

ドンッ

「あたっ！？ 要さん、急に止まらないでよ」

急に止まるから背中にぶつかっちゃったじゃない。

「すまん。猛獣がいたもんで」

「あ、本当だ」

「ゴリラだな」

そこにはかなり巨大なゴリラが蔦の上を歩いていた。

「ここでお勉強タイム。擬態には二種類あるんだが、解るか？」

「何を突然」

「一つは弱い生物が自分の身を守るために強い生物の姿を真似たり、植物等の姿を真似るもの。もう一つは」

次の瞬間、ゴリラの後ろの蔦が捲れ、その捲れた部分に口が出来てゴリラを食べてしまった。

「もう一つは強い生物が他の生物を食すために擬態している例だ。さあこれより先は『邪悪な豆の木』の群生地だ！！ 駆け抜けるぞ！！」

要さんは一人その邪悪な豆の木とかいうのの群生地に突っ込んでいった。

「仕方ない。俺らも行くか」

「そうだね」

一歩足を踏み入れると大量の食獣植物が襲いかかってきた。私とお兄ちゃんも魔力で強化を施し、時に避け、時に迎撃しながら登っていった。

ライトside

ここまで様々なものを乗り越えてきた。だがこいつは反則だよな。

「積乱雲に突っ込むぞ」

「待て待て待て!! これはいかんだろ!？」

「他に方法はないの!？」

「ない!!」

そんなに思いつきり言わなくてもいいだろうに。

「こうなったら自棄だ!!」

俺らは積乱雲の中へと入る。だが中は想像を絶する厳しさで、暴風雨、雷、氷点下の冷氣。自然の脅威が一斉に襲いかかってきた。

「っ!？」

「葵! しっかり掴まれよ!!」

飛びそうになった葵を抱き寄せる。この中じゃ声を出す事すら厳しい。要は一体どうして……!？」

「っ」

嘘だろ……。いくら要でも鼻歌混じりにこの積乱雲の中を登れるの

かよ。

ピシャアアアアン

「！ 落雷！？」

俺は耐えられるだろうが、葵は無理かもしれない。

「ほいつ」

バチィ

だが要が巨大な鳥の羽を使い、それを防いでくれた。

「ほっ、助かった」

「要さん、ありがとう」

「無理すんなよ。自然に逆らったら死ぬぞ。上手く自然の流れに乗れよ」

自然の流れって、そんな簡単に言うけど難しすぎるだろ。

「無理か？」

「正直……この状態でもキツイ」

「私も」

「なら引つ張ってやるよ」

俺らの体にロープが巻かれる。そのロープの端は要が持っている。

「行くぞ。いや、逝くぞか？」

「どつちも嫌だああああー！」

「きゃああああああー！」

………

………

………

…

つ、着いた。死ぬかと思った。要は相変わらず鬼畜だ。

「ハア…ハア…」

「二人共大丈夫か？」

「大丈夫じゃないー！」

「悪かったな」

悪いなんて思っただろ。しかし此処がベジタブルスカイか。新鮮な野菜で溢れてるな。

「此処の野菜、食べてもいいかな？」

「トイレがないから止めとけ」

「トイレ？」

「野菜が新鮮過ぎてすぐに消化しちゃうんだ。まずはオゾン草。その後野菜はお持ち帰りだ」

詳しいな。さっきの積乱雲にも慣れてる様子だったし、何度か来た事があるのか？

「あつた。オゾン草だ」

「うわあ」

「凄いな」

そこには宙に浮く蕾のような植物が群生していた。これがオゾン草か。

「オゾン草は無数にある葉っぱを二枚同時に、順序良く引つ剥がしていかないと腐るからな。順番は俺が指示するからお前から剥がせよ」

よし、やってやるか。

俺と葵はオゾン草に飛び乗った。

「臭っ！？ 何この臭い！？」

「葵、どうし、うわっ！？」

オゾン草から発せられる鼻が曲がりそうな臭い。殺虫剤を数千倍濃く感じた。

「太陽からの有害物質も吸ってるからな。臭くて当然だ。ティッシュでも詰めとけ」

「うう」

「と、とにかく、指示を」

「おう。これと……これだな」

要が葉っぱにペンで印を付ける。その葉っぱを俺と葵が同時に剥がした。

バリバリバリバリ ジュ

「！！ 腐ったわよ！？」

「どつちかが早かったんだ。同時だぞ」

難しいな。いくら兄妹でもこれを上手く同時には厳しい。だけどやらないとな。

葵 side

いくつか腐らせちゃったけど、要さんの指示もあって葉っぱは最後の一組になった。

「葵」

「任せて……せーの!!」

バリッ

一組の葉っぱの中に戻るまっていたけして大きいとは言えないが、肉厚の葉っぱ出てきた。それが広がると水分が弾けた。

「気持ち良い!!」

「葉っぱから飛んだ水分でこれか」

「おめでとうさん。オゾン草ゲットだ」

「ソシテ俺ラニクレヨ」

「「!!!?」」

この機械的なム力つく声。振り返るとG Tロボとかいうのが二台もいた。

「横取りか？ まだいっぱいあるだろ。鳥人口ボ」

鳥人口ボって。確かに鳥っぽい顔に人みたいな体だけど。

「目ノ前ニアルンダ。貰ワナイ手ハナイ」

「ム力つく。変し「待て、葵」何よお兄ちゃん」

折角ディエンドに変身してやつつけてやろうと思ったのに。

「要、葵にお前の力を見せてやってくれ」

「必要ない気もするが、まあいい。これだけだからな」

要さんは指を三本立てた。三秒で倒すって意味かな？

「三秒デ俺ヲヲ何ト力出来ルと思ッテンノ力？」

「ナラ俺ヲが三秒デ殺シテヤルヨ」

「三秒？ 違うな。限界突破、身体能力300%解放」

Bannon

何が起こったか解らなかった。気が付いたらG Tロボは二台とも爆散していた。

「さあオゾン草の実食だ。って二人共、どうした？」

「いや……300%って意味だったんだなって」

「それ以上が良かったか？」

「滅相もない」

さて、オゾン草は二カ所同時に食べないと腐るのよね。お兄ちゃんと顔が近い。これだけ近いといつもなら遊びたくなるけど、今は目の前にあるオゾン草を食べたいという食欲が大きすぎるのよね。

「「せーの」」

カリユッ

「……うめえ……！！！！！！」

「もっと、もっと食べよ……！！」

肉厚の葉っぱは程良い歯ごたえで、噛めば旨味たっぷりの水分が溢れ、どの野菜とも似ても似つかない新鮮な味は今までの野菜が腐っていたのではないかと思わせるようだった。これが野菜の王様、オゾン草なのね。

「食ったら後数枚貰ってってから帰るぞ」

「ああ!!」

「いっぱい採るわよ!!」

結局10枚くらい採って半分は私達、4枚は天使とかゼウスさんに、そして1枚だけ要さんがその場で食べてしまった。

「って一人で食べれるの!？」

「一瞬で二カ所同時に食べばな。時止めとか使えれば楽かも」

今回の事でよく分かった。要さんは私が思っていた以上の存在だった。

## 番外・美味しい物は空の上（後書き）

もみもみラジオ

桜「子育てって大変ですね。どうも、犬走桜です。今回は質問がなかったので本編に出ていた二人に来てもらいました」

ライト「こんにちは」

葵「子育てって？」

桜「私は子供がいますよ。今年で2歳です。とっても賢い良い娘ですよ。フサフサのプニプニです」

葵「いいな。子供か」

ライト「まだ葵には早いだろ」

葵「そんな事ないと思うけど」

桜「さて、今回はもう終わりです。二人共、お疲れ様です」

ライト・葵「「お疲れ様」」

桜「もみもみラジオでは質問をいつでも受け付けています。雨季さんの作品に関する質問ならなんでも受け付けます。では次回もお楽しみに」

## 番外・模擬戦（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「こんにちは」

叶「チー済まの時間だよ」

アリサ「今回は十六夜アミナ様とのコラボよ。どうぞ」

叶「早っ!？」

アリサ「しょうがないわ。大半の読者様は本編を望んでいるもの」

叶「それを言われると」

アリサ「私達が大それた事をしようとしたら駄目なの」

叶「分かったよ。じゃあ本編をご覧あれ」

## 番外・模擬戦

要side

また違う世界に飛ばされた。誰かと会うようだが、神様曰く、今いる世界に影響を出さないためにはこうするのが一番らしい。ちなみに今回飛ばされた世界はただの荒野だ。

「来たね、要くん」

「セレナか。また酒くれんのか？」

「酒って、本当に好きだね」

「酒は百薬の長、命の水だぞ」

「程良い量だとね」

俺はいくら呑んでも大丈夫なんだがな。さて、セレナは俺に何の用かな？

「ORTの力を使うために手合わせをしてほしいんだけど」

「……………はあ？」

「そんな顔しなくても」

どんな顔してたのかは知らないが、セレナがORTを使う？ よくそんな事言えるもんだ。



「G i i i i i ! ! !」

「っ！？ どうしてO R Tが瞬動を！？」

運良く避けれたけど、驚きが大きい。普通、こんな巨大な生物が瞬動なんて出来るはずがない。

「そいつがどれだけ俺と一緒にだったと思ってんだ。俺が使える技能は大体使えるぞ」

何その反則生物。 って元から反則生物だったわね。

「G y u i i i i i ! ! ! ! !」

「極氷『コキユートス』！！」

目の前にO R Tよりも巨大な氷塊を造り出し、O R Tの攻撃を一瞬止める。もちろん氷塊は砕けたけど、その間に空間を繋げ、O R Tの上に移動した。

「双魔『ツインファイナルマスタースパーク』！！！！！！」

極太な二本の魔砲をほぼゼロ距離でO R Tに叩き込む。これで多少はダメージが……

「G i i i i ?」

何その『何かした？』的な反応は。 やめてよ。 私頑張ったんだよ。

「G i i i」

ORTはクイクイツと脚を動かし、掛かってこいと言わんばかりに挑発してくる。やってやろうじゃない。

「夜桜、闇桜、キャリバーモード!!」

二本の刀になっていたデバイスを一本の大剣にする。この最強モードで脚の一本くらい斬ってやる。

「ハアツ！」

Gii!

ガキン

それでも弾かれるの！？　ORTは私に余裕が出来ないように一瞬たりとも隙間なく攻撃をしてくるから、キャリバーモードを使い続けるしかない。余裕があれば何か道具やスペルカードが使えたのに。

「ハアアアアアアアアアア！！！！！！」

ORTの様々な部位を斬っていく。少しでも刃が通りそうな部位を  
探すけど、関節も顔面も、どれも斬れそうにない。

「G y u a a a a a a a a a ! ! ! ! !」

「ぐう!？」

ORTの咆哮で吹き飛ばされて地面に着地する。ただその地面はさっきのような荒野ではなく水晶の地面だった。

「水晶……溪谷」

ORTの持つ侵食固有結界。話には聞いてたけど、いるだけで体が重い。

「水晶溪谷はそこにいるもの全ての能力をワンランク下げる。気を付けな」

「要くん。そういうのは先に言ってほしいな」

積んだ。さつきですら避けるのが精一杯だったのに、これじゃあ避けられない。しかも武器とか魔法もワンランク下がるんだろっから、私の攻撃でORTに通じるのがあるのだろうか。

「Gi」

ORTの巨大な脚が私の胸に突きつけられる。私なんていつでも殺せる。そういう事ね。この状況からORTを認めさせるには……

「ねえORT。話を聞いて」

話すしかない。ORTは要くんとずっと一緒にいた。なら人語だっ  
て理解しているはず。それに要くんだって倒す必要はないって言っ  
てたし。

「私は護りたいものがあるの。この先どんな敵が出るか解らない。  
だからあなたの力を貸して欲しい」

「……………」

ORTの脚が少し私に触り、皮膚が裂け、血が流れる。

「これだけの力があるあなたの力なら確実に私は強くなれるだから」

「……………それで？」

えっ？　今の女性の声は？

「……………私には関係ない。」

まさか、ORTの声！？　こんな声をしてたんだ。

「私には重要なもの。だからお願い」

「……………もし、貴女の大切なものが私のような化け物に襲われたとする。その時失えるものが一つだけ。貴女は何を失う？　自分の命？　それとも大切なものの命？」

「……………化け物の命よ！！」

ドスッ

「ガッ！！？」

ORTの脚が私の胸を貫いた。ああ、これは失敗したかな。血がどんどん流れて……………血？

「流れてない？」

――よく吠えた。それに免じて私の力を少々使えるようにしてやるう。

「ひゃっ!？」

胸を貫かれた状態から投げたままて地面に落とされた。貫かれた部分は怪我どころか服も破れていない。

「良かったな。認められたぞ」

「あ、要くん」

もう元の姿に戻ってる。早いなあ。

「これでもうORTは使えるの？」

「ああ。今までORTの素材を使った奴は大体が力技だったからな。お前と弟子くらいだぞ。ORTの素材がちゃんと使える奴は」

「弟子？」

「つと、今のは気にするな」

弟子なんていたんだ。でも私みたいに来る人もいるだろうからおかしくないのかな。

「さて」

「その手は何？」

「授業料」

「お金なんて」

「酒。王の財宝から酒の百や二百あるだろ」

ああ、やっぱりそれなんだ。っていうか単位が二つほどおかしいよね。まあ要くんだからいつか。

## 番外・模擬戦（後書き）

もみもみラジオ

柊「暑いですね。無理して熱中症にならないように気をつけて下さい。さて今回も質問があります」

Q・要の限界突破は何%まで？

A・500まで

柊「補足として、これは通常時での限界です。完全武装や星の枷を外すなど特別な事をした場合は常に500以上の力を使えます」

？「マ〜マ」

柊「あら？ どうして薊あさみが。あ、紹介しますね。私の娘の犬走薊です。ほら薊、挨拶」

薊「はい、あーちゃんです」

柊「良く出来ました」

薊「えへ〜」

柊「では次回もお楽しみに」

## 番外・贈り物（前書き）

### アリかな雑談室

叶「ヤッホ。実はアリサさんはまだ恋人募集中なんだよ」

アリサ「タカミチさんとはまだまだそこまで行っていないからね。まあタカミチさん決定でしょうけど」

叶「でも私は最高のパートナーを探してあげます。なんだかタカミチさんは頼りない」

アリサ「まずは自分の恋を優先しなさいな。若いんだから」

叶「舞人さんと週一でチヨメチヨメしてるからいいんだよ」

アリサ「はいはい。今回は秋代様とのコラボ。どうぞ」

## 番外・贈り物

要side

トントン

宿屋でだらけていた時、突然誰かが窓を叩いてきた。此処は二階だぞ。

「誰だ」

「久しぶり、要」

「……帰れ」

「酷いな。お邪魔するよ」

窓から乗り込んできたのはアキラ・シュヴァイアー。これまで俺が一度も勝った事のない化け物だ。

「神様は何してんだか。こんなのをこの世界に突っ込ませるなんて」

「いけなかった？」

「ああ」

「そう。それで頼みがあるんだけど」

聞いてないな。こないだ手に入れた新しい力で潰すか？

「実はs i xとアルトに装飾品をあげたいんだけど、何をあげたらいいか」

s i xとアルトってのは、まあこいつの女だ。しかし力がある奴はどうしてこうも恋愛関係が苦手なのか。彼女にやるプレゼントくらいは自分で選べ。

「アリストテレス」

俺はデバイスのアリストテレスを人化させる。

「何でしょう」

「何でしょう、じゃない。話は聞いていたはずだ」

「分かっています。アキラ様、今回は私がお手伝いしましょう」

「ありがとう」

これからこの世界に誰か来た時はアリストテレスに任せよう。突然俺がいなくなったりしたらクロード達が不審に思うだろうからな。

アキラ side

要のデバイスとかいうののアリステレスさんに連れられてとある町に来た。

「この町はサルバ。鉾山の町と呼ばれて、良質な鉄鉾石や宝石が採れる事から装飾業等も盛んに行われております」

「へえ。なら今回のにはピッタリな訳だ」

「ではあちらのお店へ」

入ったのは小さなお店だったけど、かなりの宝石が置いてあった。

「いらっしやい」

「少し覗いても？」

「ええ、どうぞ」

ダイヤモンドとかルビーとかいろいろあるな。宝石なんてよく知らないけど。

「お二人の誕生石はご存知で？」

「……えつと」

「そう悩まなくても、こちらは期待などしていませんでした」

何という毒舌。要とは大違いだ。

「どのような装飾品にするかはお決めで？」

「それはね。s i xはピアス。アルトはネックレスにするよ」

「そうですか。誕生石が決まっていらないなら、お二人のイメージカラーは？」

イメージカラー……単純に考えると二人共黒、だよな。でも同じだとあれだし、s i xは紫寄りって感じもするからな。

「s i xは紫、アルトは黒で」

「了解しました。店主、紫と黒の宝石を見せて下さい」

「はい」

ショーウィンドだけでなく、店の奥からも宝石が出てきた。二色なのに種類が多い。

「どれか気になる物は？」

「これかな？」

手に取ったのは黒いダイヤモンド。結構な力を感じる。

「ブラックダイヤモンド。最上級のパワーストーンとしても使われる代物ですね。その力に押される人もいますが、アルトルージュ様なら問題ないでしょう」

詳しいな。とにかくアルトはこれで決定として、sixは……………

「これかな？」

「アメジストですね。ふふふ、成る程、了解です」

何、その笑いは。アメジストは俺でも知ってるけど、そんなおかしな石じゃないと思うんだけど。

「アメジストはピアスに。ブラックダイヤモンドはネックレスに」

「はい。先に代金を頂いても？」

「いくらで？」

「16万8000フォルになります」

これって高いのかな？ それ以前にこっちのお金持ってないや。

「これで」

「あ……………」

「気にしないで下さい。また主と遊んでもらえれば結構ですから」

遊ぶって、殺し合いをやってるのを分かって言ってるよね。いい性格してるよ。

.....

.....

.....

...

「一応お世話になったからアリストテレスさんを要の所に送っている。」

「主、ただいま戻りました。クロード様達は」

「今はいない」

「要、助かったよ」

「どうなっただんだ？」

「これを買っただけだ」

買った装飾品を見せると要は納得したような顔をした。

「アメジストはsixにか？」

「よく分かったね」



## 番外・贈り物（後書き）

もみもみラジオ

柊「皆さんお元気ですか？ 梅雨でも元気にしないといけませんよ。今回は質問が特になかったのですが、こちらに來たいという人がいました」

百合姫「かゝわゝいゝいゝ」

鈴「ほゝれ、コチヨコチヨ」

薊「キャツキャツ」

柊「紹介します。娘と遊んでくれているのは香崎 真琴様のキャラである百合姫さんと鈴さんです。後書き常連さんです」

薊「ギュッ」

百合姫「ほら見て！ 私に抱きついてきた！！」

鈴「こっちにも、な」

薊「あゝい！！ ギュッ」

鈴「これはお持ち帰り出来ますか？」

柊「狂犬病にしましょうか？」

百合姫・鈴「サーセンwww」

椀「コラボは後二回ほど残っています。それとどんな質問もいつでも受け付けています。では次回もお楽しみに」

## 番外・観光（前書き）

アリかな雑談室

叶「こーんにちわー」

アリサ「最近作者はマインクラフト動画にハマっているようです」

叶「前川ピユター!!」

アリサ「今回のコラボはなっぺ様。ではどうぞ」

叶「後書きに質問があるから見てね」

## 番外・観光

### 要side

これはクロス王国でエルネストと酒を飲み交わす前。クロード達と解散してすぐにあつた事だ。

「……………あれは」

何であいつがいるんだ。俺がいるだけで俺の世界にはいろいろ集まってくるのか？

「あ、要！！ やつと見つけた」

「どうした吼太。俺はこれから王様に会わないといけないんだが」

「お前が王様に？」

「文句あつか」

こいつは吉谷吼太。見た目はガキで女みたいだが、もう二十歳近い男だ。一度ずすが解剖したいと言ってたな。いつの間に機械だけじゃなく生物にも手を出すようになったのか。

「な、なんか悪寒がしたんだけど」

「気のせいだろ。で、吼太はどうしてこの世界にいるんだ？」

これが重要だ。わざわざ俺に用があつて来たならそれでいいんだが、

そういう感じじゃなかったからな。

「トウードに追い出された」

「お前のデバイスだろ。また詩音優先か？」

「そうなんだよな」

こいつのデバイス、フォーティトウードはアリストテレスと同じように人化可能で、こいつの女性体である詩音に対して異常に過保護なのだ。

「アリストテレス、適当に吼太の相手をしてやれ」

「了解致しました。では吼太様、参りましょう」

「悪いな」

さて、俺も俺で観光をしますかね。まずは酒場を探さないと。

吼太  
s i d e

アリストテレスと一緒に行動か。初めてだから何を話していいやら。

「いい天気だな」

「それじゃあまるでデート慣れしていない人ですよ」

「でもな。何か話にくいからさ」

アリストテレスは特に真面目な雰囲気のあるデバイスだからな。要のデバイスとはとてもじゃないが思えないくらいに。

「最近の要はどうなんだ？」

「そうですね。比較的大人しかつたですね。幻想郷はゆったり出来ますし、お子さんも生まれましたから」

「また子供が増えたのか？」

「ええ。可愛らしいですよ。吼太様も」

「それは喧嘩を売ってるんだな？ そうなんだな？」

「どうでしょう」

前言撤回。こいつは真面目じゃない。嫌な執事だ。

「あ、そこに洋服屋がありますよ」

「女物じゃねえか！！」

「私はプレゼントにどうかと思ったのですが」

「紛らわしいわー!」

………

………

………

…

此処は城じゃないか。要達が王様に会ってるんじゃないのか？

「気にしたら負けです。これから王様に会うわけじゃありませんし」

「じゃあ何するんだ？」

「観光ですよ。すみません」

「何でしょうか」

受付にいた兵にアリストテレスが話し掛ける。観光ってどうするんだ？

「城の見学が出来ると聞いたのですが」

「ええ、出来ますよ。謁見の間以外ならどこでも見学可能です。王様は国民に隠し事をしない方針ですから」

「立派な王様じゃないか」

隠し事をしないってのはそれだけ不正をしていない自信があるって事だからな。好感が持てるいい王様だ。

「それでは吼太様」

「おう」

どんな内装なんだろう。城の見学なんて殆どした事ないから楽しみかも。

.....  
.....  
.....  
.....

思ったよりずっと狭かったような感じがする。こんなもんなんかな？

「あ、食堂ですよ。見て行きます？」

「さっきあった武器庫といい、本当にオープンな城だよな」

「そういう方針ですからね」

方針にしたって限界があるだろ。こついう場所は衛生的にも一般人を入れるべきではないだろう。

「嬢ちゃん達見学かい？ よし、このクッキーをやろう」

……嬢ちゃん。否定しても無駄なんだろうな。クッキーは美味いけど。

「ドンマイ、ですよ」

「うつせえ」

アリストテレス side

予想はついていましたが、吼太様は相変わらずですね。

「お嬢ちゃん、これから一緒にお食事でもどうだい？」

「誰がお嬢ちゃんだ！！ アリストテレス、助けるよ！！」

「はいはい」

この人はどう見ても容姿が幼女だからロリコンを引き寄せるのですよね。

「てりゃ」

「ぐふっ！？」

とりあえずロリコンは殴り倒しておきましょう。

「しかし吼太様でも倒せるでしょう」

「こつというのが相手だと手加減がな」

生理的に受け付けられないんですね。分かりますけどね。私もあんな気持ち悪いのが近付いてきたらオーバーキルしそうです。

『アリストテレス、聞こえるか？』

『主、念話とはどうしました？ 謁見が終わりましたか？』

『もうとつくに終わってる。これからクロス洞穴って場所行くから来い』

『……了解』

主も唐突ですね。まあ今更あの人に普通を求めてもどうしようもないです。私普通でないですから主も普通では困るのですがね。

「申し訳ありません、吼太様。主から呼び出しが掛かりまして」

「そうなのか？ まあ俺もそろそろ帰るつもりだったし」

「そうですか。では」

「要によろしくな」

吼太様が帰りくらい襲われないように祈っておきますか。

## 番外・観光（後書き）

もみもみラジオ

椛「皆さんは人生で一度は言いたいアニメ、漫画の名言がありますか？ 私は『弾幕はパワーだぜ』。パワーがない私には羨ましいです。どうも、犬走椛です。  
今回も質問がありませんでした」

文「椛、いいかしら？」

椛「おや文さん。とりあえず自己紹介をお願いします」

文「射命丸文しゃめいまるあやです」

椛「さて、どうしました？」

文「第二話、『光の勇者』の後書きの要さんのハーレムに私がいなのだけねど」

椛「雨季さんが忘れました」

文「即答！？」

椛「なので文さんにはお詫びの後付け設定があります。どうぞ」

射命丸文：鴉天狗の少女。ネギま後、天魔に大天狗に任命される。大天狗としての忙しく、ネギまから星海の間、ともに要とイチャつけていない。

文「何この残念設定」

椋「では皆さんに質問です。スターオーシャンにはP Aプライベート・アクションというものがあります。本編とは関係ないイベントですね。まあ中にはキャラクターを仲間にするのに必要なP Aやエンディングに關与するP Aがありますが、ここで質問です」

Q・P Aをやる？ やらない？

椋「中には数話に渡るものもあるかもしれませんが、それでもいいなら『やる』を。嫌なら『やらない』を選んで下さい。期限はコラボ終わりの次回まで。では次回もお楽しみに」

## 番外・鍛えてやろう（前書き）

アリかな雑談室

叶「今回でコラボ終了」

アリサ「次回から本編ね」

叶「質問結果だけど、満場一致でPAをやる事になったから」

アリサ「SOシリーズの醍醐味だもの。今回はバルディッシュ様とのコラボ。ではどうぞ」

## 番外・鍛えてやろう

### 要side

今回は神様に言われてヒスイが鍛えてほしいとか何とか。ヒスイってのはフルネームはヒスイ・ハーツ。テイルズのハーツに出てきたあいつだ。知らないなら調べてみるといい。

「メタ発言を考えてたろ」

「よう、ヒスイ。地の文を読むな」

「読んでいない。何となく分かったただけだ」

「奏者、早く始めないか？」

今回はシルフじゃなくてウンディーネが一緒か。ウンディーネは剣だから遠距離系のシルフに比べてやりやすくなった。

「鍛えるんだろ？ どうして欲しい？」

「どうして欲しいとか、そういうのは要が決めるんじゃないのか？」

「面倒だ」

「余は如何なるものでもやるぞ。実践形式などいいのではないか？」

「ウンディーネ、甘く考えすぎだぞ」

「…………鬼ごっこにしようか」

「「鬼ごっこ？」」

今、頭の中にピーンときたんだよな。これはいける。面白い事になりそうだ。

「ルールは俺に体を触られたら負け。但し武器等でガードするのはOKだ」

「シールド系も良いのか？」

「もちろん。時間は三時間で」

これから三時間、こいつらはどう逃げ回ってくれるかな。今から楽しみでならない。

ヒスィside

まずは三分間だけ逃げる時間を貰った。まあそうでもしないと逃げきれないけどな。

「ウンディーネ、ユニゾンだ」

「了解した」

「「ユニゾン・イン！！」」

ウンディーネとユニゾンをする。これで能力が上がったし、ウンディーネの剣技も使える。要の様子だと多分攻撃してくるから、ちゃんと接近戦でも防げるようにしないと。

『奏者、三分経ったぞ』

「そうか」

どこから仕掛けてくる。場所は草原。隠れるとしたら背の高い草の中を進むしかないが、そんな事をするような要じゃない。

「……ん？」

『どうした、奏者よ』

「今、地面、が！！？」

「外れたか」

あ、危なかった。まさか地面から飛び出してくるなんて。此処まで掘ってきたっていうのか？ 心臓がまだバクバクしてる。

「ぶちまける水念！ セイントバブル！！」

「シャボン玉か？」

要を中心に強力な爆発を起こす泡を大量に出したが、足止めにもなりそうにない。

「ゲイルアーク、2ndモード！！」

両手についていたデバイスのボウガンから短い刃が出る。

「魔神剣・竜牙！！」

水属性の地を走る斬撃を撃つも、要は蹴り飛ばして掻き消した。

「そろそろ行くぞ」

要はシールドを細長く丸めて棒状にした。先端はかなり鋭い。

「シールドランス、受けきれるか？」

「やってられるか！ ウィンドムーブ！！」

風を使った高速移動魔法で逃げる。戦う必要はない。三時間逃げればこっちの勝ちなんだ。

「逃げるなよ」

「！？ 生身で回り込むなよ！！」

『奏者よ。戦うほかないぞ』

出来れば逃げきって終わりたかったが、やっぱり無理か。

「そらそらそらっ!!」

要は単純にシールドランスを突いては引き、突いては引きを繰り返す。そこには技術なんてなく、力任せな感じしかない。だがその力任せでも圧倒的なまでの槍の速さで俺は追い詰められていく。

「どうした!! まだ十分も経っていないぞ!!」

「規格外め!! 奔れ光念! フォトン!!」

「おっ」

光の爆発で要の槍を破壊した。

「デーパーミスト!!」

ウンディーネの力を借り、辺り一面を霧に包ませた。要ならこの中でも気配とかで俺の場所を把握するだろうが、関係ない。今は逃げる。

……

……

……

…

おかしい。あれから全く追ってこない。

「ゲイルアーク、時間は？」

《残り三分です》

『奏者程度三分でいいという意味ではないか？』

「かもな」

だけでも残り三分しのげばこっちの勝ちだ。集中力を切らすな。知覚範囲を広げる。今までの時間それが出来たんだ。最後まで……！！

「シッ！！」

気配を感じ、刃を振るう。だが斬れたのは一匹の蛾だった。

『少し気を張りすぎではないのか？ たかだか虫一匹程度まで気配を配る事はなかるう』

「嫌な感じがしたんだけどな」

「残念。失敗か」

「！ 要、ようやく来たか」

いつの間にか近くまで来ていた要。だけでも失敗とは？

《先程の蛾は毒蛾だったようです》

「毒蛾？」

「そう、俺が適当にバラまいたんだよ」

そんな物騒なのをバラまくなよ。どうせ要の事だから強力な毒蛾なんだろう。

「じゃあ修行終わり」

「まだ時間じゃないぞ」

「十分に効果は出たからな。今回の目的は集中力の持続、気配察知の強化が主なものだ」

「そうだったのか」

「接近戦をなんか教えてやろうかと思ったが、型が崩れられても困るからな。こつちにしたわけだ。愉快だったぞ、キヨロキヨロしているお前の姿は」

「くっ」

確かにどこから来るか分からなくて警戒しまくってたけど、しつかり見られてたんだな。そんな要に気付けなかった自分が情けない。

「シルフとユニゾンしてたらもつと別の課題にしてたかもな」

「どうしてだ？」

「シルフは風とか空気で分かるじゃないか」

確かにそうだな。シルフとユニゾンすれば気配察知とかは強化されるけど、ウンディーネはそういうのはないしな。

『それでは余がいらないうちではないか』

「そんな事ないって。ウンディーネがいなけりゃ接近戦がまともに出来ないからな」

「まともには出来るだろ」

『みんな、そろそろ時間だよ』

この声は要のときの神様だな。

「じゃあな、ヒスイ」

「じゃあな、要」

今回は比較的楽な修行だったな。いつもこれくらいだと有り難いんだけど、無理だよな。

## 番外・鍛えてやろう（後書き）

もみもみラジオ

桜「どうも、犬走桜です。学生の皆さんはもう少し頑張れば夏休み宿題をしっかりとやらないと通知表に影響しますよ。雨季さんなんて溜まってた宿題をやったら平均1以上上がったそうです。もっとしっかりとやれば良かったのに。」

次回からようやく本編。お待たせしてすみません。今回はPAの予告をワードで出しましょう。こちらです」

クロス王国 セリーヌ

桜「知ってる人にはバレバレですね。主にPAは有名なものをやりますよ。このコーナーへの質問をお待ちしています。では次回もお楽しみに」

## クロス恋愛物語 前編（前書き）

アリかな雑談室

叶「遅れて申し訳ありません」

アリサ「まあ一週間経ってないから許してね」

叶「今回はPAだっけ？」

アリサ「本編でも言われるけど、時間軸はクロス洞穴のすぐ後辺りです」

叶「では本編どうぞ」

## クロス恋愛物語 前編

セリーヌ side

これはクロス洞穴とクリクまでの間にあった出来事。私とレナさんがクロスの城下町を歩いていた時の出来事でした。

.....

.....

.....

...

今日は快晴。レナと二人で楽しくショッピングですわ。クロスの城下町は様々なお店があって飽きがきませんわね。

「少しクロードに悪かったかな」

「レナ、クロードは望んで一緒に来なかったのよ」

「だけどカナメさんと一緒だからきつと……」

「きつと？」

「二日酔いにされちゃうわー!!」

ズコーツ

くっ、なんという天然ボケですの。だけど否定出来ない。カナメさんの飲酒量はもはや人を超えてますもの。さながら竜、いえそれ以上。

「でもカナメさんって食材の目利きが凄いですよね」

「主に野菜とお酒のおつまみになるもの限定ですが、確かに素晴らしい目利きですわね」

「そうですよね。特にこの間の枝豆なんて」

こうやって食べ物のお話ばかりしていると小腹が空いてしまいますわね。ちよつとくらい軽食取る程度なら太りはしませんわよね。

「ねえレナ、あそこのお店でお茶でもいかがかしら？」

「いいですね。行きましょっか」

街中にあつたお洒落なお店に入ろうとすると怒号が聞こえてきた。

「ふざけんじゃねえぞ!! 盗み食いとはいい度胸じゃねえか!!」

「お金が必要なんて知らなかったんだ」

「んな言い訳ガキでもするか!!」

店長とおぼしき男性と金髪の男性がなにやら言い争っているような感じだった。

あの様子だと無銭飲食かしら?

「お客様お二人様でよろしいでしょうか?」

「は、はい」

「失礼ですけども、あれは?」

「えっと、彼がお金を払わずにお店を出て行こうとしたので私が店長を呼んだら」

まあお店にとって無銭飲食なんて言語道断ですし、怒られてもしようがないですわよね。

「よし、お前をクロス王の前に引っ張り出してやる」

「えっ!?!」

「温厚なクロス王だ。大した罪にはならないだろうが、反省には十分だろう」

「お、お願いだ。それだけはやめてくれ」

「盗人の分際で何ほざきやがる」

「頼む。城にだけは……」

彼、一体どうしたのかしら？ クロス王と聞いた途端にあの怯えよう。流石にあんな様子を見てしまうと可哀想に見えてきましたわ。助けて差し上げましょうか。

「店長さん。少しよろしくて？」

「ん？ 何でしょう、お客様。今は取り込み中にして」

「その彼が少し可哀想に見えたものでして」

「可哀想って……こいつは店から見れば害虫ですよ。金も払わずに  
「お金があればよろしいのでしょうか？」はい？」

「これで足りまして？」

私が店長に投げ渡したのは一枚の金貨。価値は見れば分かるはず。

「ちよつ！？」

「少なかったかしら？」

「多すぎますよー！」

「では全て受け取って下さいな。彼が迷惑を掛けた分も含んでいま  
すから」

「はあ……おい、このお客様に感謝するんだな」

お茶は中止ですわね。なかなか良さげなお店でしたのに。

レナ side

「格好良かったですよ、セリーヌさん!!」

「そんな事ありませんわ」

お店を出てすぐ、私達はさつき事を話し始めた。とは言っても私が一方的に言ってるようなものだけど。

「そういえばさっきの金貨は」

「カナメさんから頂いたものですわ。まだ十数枚はありますらご安心を」

十数枚………カナメさんは一体どれだけのお金を持っていて、それをどこから手に入れてきたんだろう。

「あの」

「あら？ 貴方はさっきの」

「助けてくれてありがとう。名前を覚えてほしい」

「私はレナ・ランフォードです」

「私はセリーヌ・ジュレスですわ。貴方は？」

「僕？ 僕は、クリス……クリスだよ」

「なんだか一瞬つかえたけど、どうかしたのかしら？」

「次からはあんな目に遭わないように気をつけなさいな」

「あんな事になるなんて思わなかったから」

「私達も二度も助けてあげるほどお人好しではなくてよ」

「うん……ありがとう」

お礼を言うとクリスはどこかへ行ってしまった。それにしてもクリスってどこかで見た事あるような。誰だったかしら？ 身近にいた気がするのだけれど……

「そうか、クロードね」

「クロード？」

「クリスとクロードってどこか似てませんか？」

「そうかしら？ 見た目はまあまあ似てますけど、雰囲気は別物ではありませんか。クリスの方がもっと高貴ですわよ」

「そうかなあ？」

結構似てると思ったんだけどな。

## 要side

夜になってみんな宿屋に帰ってきてから、レナちゃんに面白い話を聞いた。そんな事があったのか。

「どうであれ無銭飲食はいかな」

「知らなかった、で済ませようとするのが凄いですよね」

確かにな。そんな事知らないはずが……いや、以前にそういうのを聞いた事があるな。確か、どこぞの貴族の箱入り息子だったか。

「セリー又は高貴とか言ってたんだよな」

「そうですよ」

セリー又はそこら辺は目が肥えている。しかもクリスってのは城を

嫌がった。もしかすると本当に……

「つまらん推測だな」

「？ 何がです？」

「何でもない。それよりクロードの看病頼むよ」

「もう。本当に酔い潰しちゃうんだから」

まさかここまで下戸だったとは知らなかったんだよ。もうちっと呑めないようにならないと将来の人付き合いが大変だぞ。

……

……

……

…

朝からセリーヌが見当たらないのでレナに聞くと買い出しに行っらしい。女性に荷物を持たせては男が廃る。手伝いに行くか。

「私も行きますよ」

「レナちゃんも女の子なんだから」

「買いたい物がありますから。カナメさんは荷物持ちをお願いしますね」

ちゃっかりしてるよ。でも女の子はこんくらいでいい。

「おっ、セリーヌ……………と誰だ？」

「えっ、嘘。クリス？」

広場でセリーヌを見つけたんだが、隣に噂のクリスってのが歩いていた。仲良さそうな雰囲気だ。

「ど、ど、どうします!？」

「まだ慌てるような時間じゃない。とりあえず俺が見ておこう。この手の事は得意だ」

ただ尾行するだけなんだけどな。それにしてもクリスってのは随分いい格好してるな。羽織っているマントも高そうだ。こりゃ昨晚の予想は当たったかな。しかし様子がおかしいな。

「クリス……………」

「セリーヌ、僕はあんな事を言われたのは初めてだった。それで気付いたんだ。僕には君のような女性が必要だって」

「……………ごめんなさい」

「僕の思いを受け取ってくれないのかい？」

「私もう行かないと!!」

「僕は待つてるから!! 君をずっと!!」

セリーヌが走って行ってしまったが、これはどうするか。セリーヌはどうしていいか分からないといった感じだったからな。お節介になっってしまうが、もしかたクロスに寄る事があればセリーヌとクリスの仲を取り持ってやるか。

## クロス恋愛物語 前編（後書き）

もみもみラジオ

桜「皆さんこんにちは。犬走桜です。暑いからって扇風機を付けっぱなしのまま寝ていると体に悪いですよ。さて今回は前後編に別れていますね。じっくり楽しんで下さい。そういえば皆さんに質問があるそうです」

Q・前書きで何かやってほしい事がありますか？

桜「やる事がないんですね。まあ基本的には何でもやるそうです。では今回はこれぐらいで。ここへの質問もお待ちしております。バイ」

## クロス恋愛物語 後編（前書き）

### アリかな雑談室

叶「今回は前回の続きで後編だね。結構長くて作者も何を書いてるか途中で不明になったけど、ゆっくり見てね。じゃあここからは茶番だよ。アリサさんと秋代様のリイゾさんのお出掛け」

~~~~~

アリサ「今日はよろしくお願いします」

リイゾ「ああ。しかし私でいいのか？ 他に相手がいるとも聞いたが」

アリサ「大丈夫です。いいお友達ですよ」

リイゾ「そうか」

アリサ「リイゾさん、どこか目的地は？」

リイゾ「食事でもするか」

アリサ「いいですね。あっ」

リイゾ「どうした？」

アリサ「いいお店を知ってたんで予約しようと思ったんですが携帯忘れまして。貸してもらえます？」

リイゾ「……………」

アリサ「リイゾさん？」

リイゾ「持っていないのだ」

アリサ「このご時世！？ 買いましょう！…」

リイゾ「いや、無くとも」

アリサ「さあ買いますよ！…」

リイゾ「ひ、引っ張るな」

くくく

アリサ「どんな携帯にしましょうか？」

リイゾ「最低限のもので」

アリサ「リイゾさんはアプリとか使わなさそうですね。とりあえず通話し放題は必要ですよ。メールとかは使いますか？」

リイゾ「いや」

アリサ「でも最近はメールとかも使えないと大変ですよ。迷惑メールとかの対処とか」

リイゾ「なら携帯を持たなければ」

アリサ「それはいけません」

リイゾ「むっ」

アリサ「色は黒で確定ですね。黒騎士ですものね」

リイゾ「安直だが、構わない」

〃
〃
〃

アリサ「今日はいいい買い物しましたね」

リイゾ「疑問だが、これは私の世界でも使えるのか？」

アリサ「……あ」

クロス恋愛物語 後編

要side

津波で逆戻りさせられるとはな。違う港町に行かなければ。

「一旦クロスで休まないか？ みんな疲れてるだろうし」

「いいな。俺はクロードに賛成だ」

「私もいいですよ」

「私は……」

つと、セリーヌはまだあの問題があったな。ちょうどいい。解決してやるか。

「セリーヌさん？」

「あ、行きましようか」

上の空だな。こんな調子で上手く行くだろうか。不安になってきた。だがここは俺が頑張ってやらないとな。

.....

.....

.....

...

クロスの中は活気に溢れていた。だがこの前までとは違う、お祭りの活気だ。

「王子様とラクルの姫様、綺麗なんだろうなあ」

「早く見たいわね」

街でそんな会話が聞こえてきた。王族同士の結婚か。これは確かにお祭りだが、こっちには都合が悪いかもしれないな。あくまで俺の予想が当たっていた場合だが。

「なあ、経過報告をクロス王にしないか？ 次に何処へ向かえばいいか助言してくれるだろうし」

「いいですね」

「僕も構わないよ」

「そうですね」

これでいい。これで確かめられる。

「しかし凄いな。王族の結婚のスケールのデカさを思い知らされる」

「結婚？」

「レナちゃん気付いてなかったのか？ まあ俺も偶々耳に入っただけかな」

クロス城への道も出店があつたりして、そりゃもう大騒ぎだ。クロス城に入ってから兵やら侍女やらが走り回っていた。

「おや皆さん。こんにちは」

「受付の兵隊さん。こんにちは」

「いきなりで悪いが、クロス王に会わせてもらえないか？ トラブルが起こってな」

「クリクの津波ですか？」

「知っていたのか」

「ええ。王も心配しておられました。さあ、こちらへ」

偶然にも前回受付をやっていた兵がいたのですんなりとクロス王の御前まで行く事が出来た。

「おお！！ そなたは無事であつたか！！」

「はい。なんとか」

「クロス王、ご存知の通り旅路が断たれてしまいました。次は何処へ向かえばいいか助言を頂きたいのですが」

「ふむ。ならば遠回りになってしまいがハーリーからラクールに向かうと良い。前回渡した通行証で行けるよう手配しておこう」

「感謝致します」

ラクール……確かこの世界でトップクラスの繁栄をしている王国だったか。そして今回のクロス王子の結婚相手がいる場所。

「おい。この者達に選別を」

「王様、そんないつもいつも頂けません」

「気にするなレナよ。わしが出来る事などこのような事しかないからの。それにレナは孫娘のようなものじゃ」

いや、だからってそうそう渡すものではないだろ。甘やかしは良くないぞ。……………今、お前が言うなって思った奴は後で体育館裏な

「お前ら、先に言ってくれないか？ クロス王と話したい事があるってな」

「何を？」

「いいからいいから。自由にやってくれ」

三人は渋々ながらも謁見の間を出て行ってくれた。

「一体どうしたのかな？」

「この度王子が結婚されると聞きました」

「うむ、そうなのじゃが……」

「何か問題が？」

「政略結婚故にあやつが嫌がっておるようです。隠してはおるが見れば分かる」

「それもそうだよな。政略結婚なんてもんは自分の意思がない。それを嫌がるのは当然だ。」

「その理由が思い人がいるとすれば？」

「それは難しい。王としては今回の結婚を優先すべきじゃが、親としてはな」

「ですね。そうそう、うちのクロードと王子が似ていると聞いたのですが」

「これは嘘だ。実際にはそんな話聞いた事がない。」

「そうじゃな。見た目はなかなか似ておるのじゃが、中身が全く」

「当たったか。ならやはりクリスは……」

レナ side

私達はカナメさんがああ言うから解散してそれぞれ街を歩いていた。

「あれ？」

大聖堂がある近くの路地裏でウロウロとしているセリー又さんを見つけた。どことなくいつもの余裕と落ち着きがない。こんなセリー又さん初めて見た。

「邪魔したら悪いかな」

何があるか知らないけど、ここで話し掛けたら悪そうな感じがするし。買い物をしてこよう。

.....

……
……
……

夕方頃まで買い物をしていたけども、セリーヌさんの様子が気になつて戻つてきてしまった。流石にもういないだろう。そう思つていた。

「あ……」

まだいた。一体どれだけ待っているのだろう。それだけ大切な用事なんだろうか。しかしようやく諦めたのか、セリーヌさんは去つていった。

「ハアハア、間に合わなかったか」

「クリスさん！？ まさかセリーヌさんが待っていたのって。どうしてこんな遅くまで来なかったんですか！！」

「すまない。抜け出すのに時間が掛かってしまったんだ」

「抜け出す？」

どういう事だろう。抜け出さなければいけない状況なんて、クリスさんは何者なんだろうか。

「クリスさん、正直に答えて下さい。貴方は一体、何者なんですか？」

「……クリスはその場限りの名だ。僕は「クロス王国第一王子、ク

ロウザー・Ｔ・クロス」誰だ！？」

「カナメさん！？」

「よう」

カナメさんがなんでそんな事を。それよりもクリスマスさんが王子様！？

「どうしてそれをセリーヌさんに言わないんですか」

「そんな事言えない！！ 言ってしまったら彼女に拒絶されるかもしれない」

「随分弱気だねえ。明日は結婚式だっけか？ お前が言えないなら俺がセリーヌに言ってやろうか？ クリスくんは結婚式があるのでもう逢えません、ってな」

「貴様！！」

クリスさんがカナメさんに掴みかかる。そんなクリスさんをカナメさんは冷ややかな目で見ていた。正直、少し怖い。

「人に掴みかかる威勢があるくせに好きになつた女には何も言えないのか？ 身分を隠し、真実を告げずに別れるつもりか？」

「……くっ」

「何か言えよ。それでも男か！！！」

「でも僕は、彼女とは住む世界が違いすぎる。それに君が言った通

り、明日は許嫁との結婚式だ。王子である僕では王である父には逆らえない」

王子様っていうのがどういうのかは知らないけど、きつと凄く大変なんだろう。じゃないとクリスさんがあんな落ち込んだような顔をするはずがない。

「ああそうだった。お前は王子だったな。だが王子がそんなのでいいのか？ 次代の国を背負うべきものがたかだか女一人を選ぶ決断も下せず、それで国の方針を選択出来るのか？」

「カナメさん！！ 流石に言い過ぎよ！！」

「言い過ぎじゃないさ、レナちゃん。こいつはこれから王となるべき人間だ。下手をすれば国民からこれ以上の罵詈雑言を浴びせられる事だってあるだろうさ。だというのにこの調子じゃ国の未来をどうこうするなんて無理だ」

「悔しいが、彼の言う通りだ。今の僕ではセリーヌを選ぶ以前の問題だ」

クリスさん……私はどうしたらいいだろう。彼を助けてあげられないだろうか。

「……時間をやるのか？」

「えっ？」

「明日の結婚式。影武者を用意してやる」

影武者？　なんだか嫌な、というか一人しか予想出来ないんだけど。

「時間としては口付けの直前が限界だな。それまでにセリーヌと決着を着けてこい」

「可能なのか？」

「無理なら言わん。レナちゃん、帰って準備だ」

「あ、はい」

.....

.....

.....

...

宿屋に着いてすぐにカナメさんは服を用意するために出掛けていった。私はセリーヌさんに話をしてクロードを上手く説得しないと。

「セリーヌさん。いますか？」

「レナ？　ええ、いますわよ」

「失礼します」

部屋に入ると、セリーヌさんはいつもより暗くみえた。

「どうなさいました？」

「『今日はごめんなさい。明日朝9時に大聖堂裏で待っています』
ってクリスさんから伝言です」

「クリスに会いましたの!？」

「突然の用事でセリーヌさんが待っていた時間にはこれなかったみたいです。街で偶然会った私に伝言を頼んでいきました」

「そうですの」

ちよっぴり元気が出たように見える。次はクロードね。クロードは部屋にいるかしら？

「クロード、入るわよ」

「うん」

「こんばんは。少しいいかしら？」

「どうしたんだい？ 何か僕に用事？」

「あのね、お願いがあるの」

顔を近付けて言う。こうすれば簡単にOKが出るってカナメさんが
言ってたけど……

「ぼ、僕に出来る事なら何でもするよ!」

「本当! 良かった」

カナメさんの言う通りね。次からこうやってお願いしましょう。

クロードside

どうしてこうなった。昨晚レナのお願いを聞いてからトントン拍子
に事は進んでいき……

「王子」

「かっこいい」

群集のど真ん中を王子として歩かされている。しかも隣には王女様
までいる。

「クロウザー様。緊張なされているのですか?」

「あ、す、少し」

「ふふっ、実は私もです」

ああ、どうしよう。いや、どうしてくれたんだ。僕はどつなる。王子じゃないと知られたらきつと……………誰か助けて。

セリーヌ side

昨日は無理でしたけど、やっとクリスと会える。だといつのに緊張してしまつて体が重い。

「セリーヌ!!」

「クリス」

「昨日はごめん」

「いえ、急用なら仕方ありませんわ」

何を話しましょう。久しぶりにあつたのだから話す事なんていくら

でもありますのに。言葉が口から出てこない。

「セリーヌ。君に言いたい、いや、伝えないといけない事があるんだ」

「伝えないといけない事？」

「ああ。これを聞いて君がどう思うか分からない。でも大切な事なんだ。覚悟を持って聞いてもらいたい」

「……分かりましたわ」

怖い……何を言われるか分からないというのはここまで怖い事なのだろうか。しかしクリスがここまで言うなら私も覚悟を持たないと。

「僕の本当の名前はクロウザー・Ｔ・クロス。クロス王国の王子なんだ」

「……えっ？」

クリスが、王子？ でも王子は今結婚式の真っ最中のはず。

「今はクロードくんに影武者をしてもらっている」

「クロードが？ どうしてそんな事を」

「君と話さないといけないからだ。僕をあんなに真っ直ぐな目で見てくれた人は初めてだった。もちろん王子というのを知らなかったからかもしれない。でも、それでも僕は君を好きになった。心から愛している」

「ま、待って!!」

クリスの突然の告白に私は気が動転していた。そして心の中にあるモヤモヤに混乱していた。クリクに行く前にクリスを見て感じていた気持ち。それ以上に大きなモヤモヤを感じていた。

「セリーヌ。君の答えを聞かせて欲しい」

「分からない。分からないの!! こんな気持ちは初めてで、どうすればいいのか私には分からない!!」

「僕だって同じだったさ。だけどその分からないものが恋と気付いた。そして昨日、王子、クロウザー・T・クロスとしてではなく、クリスという一人の男として君を愛する事を決心したんだ」

「クリス……私はトレジャーハンターですし、クロード達と危険な旅に出ますわ。いつも貴方の側にいるのは無理かもしれませんが、もしかしたら帰ってこない可能性だってありますわ」

「構うもんか。愛した女性の全てを受け入れられずに何が男だ」

「クリス、ありがとう」

こんな自由奔放な私でも愛してくれる。その真っ直ぐな言葉だけで心は晴れた。そして理解した。これが恋なのだと。

「じゃあ行こう」

「何処へ？」

「彼女が出来たら親に紹介するのが当然だろう」

親って、クロス王に！？ それはつまり結婚式会場に乗り込むという事ですよ！？

要Side

遅い。早くしろよ。指輪の受け渡しまでしちゃった。このままだとラクルのロザリア王女と偽クロウザーのクロードが口付けするぞ。仕方ない。クロードの退却の合図を出すか。

「失礼。ここは禁煙ですか？」

「申し訳ありませんが喫煙は外で」「ごめんなさい！！」「」

俺が近くの兵に話し掛けたらクロードは逃げ出した。俺が兵に話す事がクロードの退却の合図だったのだ。

「殿下！？ 追え！！」

「打ち首はごめんだよ！！」

クロードは一体どんな罰を想像していたんだか。クロードが大聖堂の扉を開けようとした時、クロードが触れる前に扉は開いた。

「遅い」

扉の先にはクリスとセリーヌがいた。どうやら決心が着いたようだな。

「クロウザー王子が二人？」

「僕が本物だ。彼には影武者をやってもらっていた」

会場がざわめきだす。まあ今までいたのが影武者って告げられたらな。

「クロウザー、何がしたい」

「陛下。私は今回の婚約を破棄します」

「それがどういう事か分かっているのか？ この婚約はお遊びではない。国の未来に関わる事だ」

「ええ、しかし私は国の傀儡ではありません。私には私の意志がある。それがここにいるセリーヌを愛するという事だったので」

「戯け！！ たかだか一人の女のために国を捨てるか！！」

王の気迫に周りが圧倒される中、クリスは一步前に出て言い放った。

「国なんて捨ててやる!!」

「!?!」

「国が僕の意志を阻むなら国なんていらない!! 立場が阻むなら立場なんていらない!! クロウザーと名もいらない!! 全てを捨てて、クリスとして僕はセリーヌを選ぶ!!」

よく言うな、若造。だがやはりまだまだ若い。そんな理屈が通るはずがない。だが時には例外が存在する。

「ロザリア王女。今回の婚約はなかった事にしてくれんかの?」

「クロス王様?」

「これよりクロウザーの王位継承権を三年間わしが預かる。それまでに国を背負える人間にならなければお主は国を出て行ってもらう」

「陛下……」

ウワアアアアアアアアアアアアア

あまりに突然すぎる出来事だったが、大聖堂は大盛り上がりになった。そんな中、王女は自分の兵を連れて出て行き、クリスもセリーヌと一緒に外へ出て行った。それを追うように客人や街人達も外へ行った。

「お主ら、少しわしを一人にしてくれ」

「ハッ!!」

王は兵達を追い出し、一人椅子にもたれかかった。

クロス王 s i d e

クロウザーがわしに楯突くようになるとはな。

「わしが見ていない所で成長しおって」

「ガキつてのはそういうもんさ。出来ないくせに親を超えようと躍起になる」

わしの独り言に対して返事がくる。後ろを見るとカナメ殿が座っていた。

「生意気じゃの」

「生意気なのは誰でもだ。誰にだってそんな時期はあった」

「確かに」

「ガキはああやって成長する。失敗して、馬鹿やって、立派になっていく」

「わしは間違っていたのかの？ あやつを無理に縛ってしまっただったのかの？」

「あんたは何も間違ってない。今回は親としても王としてもベストだったんじゃないか？」

「そうか」

カナメ殿と話しておると、何か父と話しておるような感覚に陥る。
歳は明らかにわしが上じゃというのに。

「じゃあな」

「うむ。しかし随分口調が乱暴になつとるの」

「これが普段の俺だ。ガキ相手に敬語使うかよ」

ガキ……わしはもういい歳なんじゃがの。

レナ s i d e

街の出口。今此処にセリーヌさんはいない。

「遅いな。酒呑むか」

「いけません」

「でも本当に遅いよ。セリーヌさん何をしてるんだろ」

確かにあれから結構な時間が経っている。これじゃあ出発出来ないよ。

「お、お待たせしましたわ」

「遅いです……よ」

「何だその荷物」

「王家に、入る者の嗜みとかいう、理由で……」

セリーヌさんが持っていた荷物を見ると、凄く難しそうな作法の本とか、高そうなお化粧品とか。

「セリーヌ、ちゃんとしてきますは言ってきたか？」

「カナメさん、私は子供じゃなくてよ」

「そんなのいいじゃないか。早く行こう。なんか僕は疲れたよ」

クロードは大変な役割をやってもらったものね。今晚は豪勢なお食事にしてあげましょう。

「次はハーリーか」

「その前に、私の故郷のマーズという村がありますの。いろいろ報告したい事もありますし、寄ってもよろしいかしら？」

「もちろんですよ」

「セリーヌの故郷ね。楽しめそうだ」

「じゃあ行こう、マーズへ!」

クロス恋愛物語 後編（後書き）

もみもみラジオ

桜「どうも、犬走桜です。雨季さんは大学生なのでまだ夏休みではありません。夏休みの人は存分に楽しんで下さいね。しかしこの後書きもマンネリ化してきましたね。何か新しい事を考えないと」

文「質問が来ないからしょうがないわよ」

桜「文さんは黙っていて下さい。では次回もお楽しみに」

マーズ村 懐かしき出会いと衝突（前書き）

アリかな雑談室

叶「皆さんこんにちは」

アリサ「元気かしら？ 今日ゲスト付きよ」

舞人「お邪魔します」

叶「舞人さん！？」

アリサ「彼は牧原舞人。叶ちゃんの彼氏ね」

叶「旦那さんです」

舞人「それはまだ早いよ」

アリサ「二人はイチヤイチヤしてらっしゃい。では本編スタート」

マーズ村 懐かしき出会いと衝突

クロードside

セリーヌさんの故郷、マーズに着いたんだけど、今までの街や村と違って静かだ。

「おかしいですね。普段はもっと活気がありますのに」

「そうなのか。術師ってのは研究体質で引きこもりが多いと思ったが」

「カナメさん、セリーヌさんはトレジャーハンターやってるじゃないですか」

「レナ、ツツコミ所が違うんじゃないかな？」

「とにかく村長、お爺様の家に行きましょう。古文書の解説もお願いしたいですし」

そうそう、古文書があったな。最近忙しくてすっかり忘れてた。

「この家ですね。お爺様、いらっしゃいますか？」

「おお、セリーヌではないか」

「お父様？ それにお母様まで」

村長の家には何人かの人が集まっていた。重苦しい雰囲気だけど、

何があっただろうか。

「セリーヌ、そちらの方々は？」

「私の仲間ですわ。頼りになりますわよ」

「ふむ、とにかく入ってきなさい。何があったのか話そう」

家の中に上がらせてもらう。セリーヌさんの両親や村長を含め魔法使いみたいな格好をしている人ばかりの中に一人だけ剣士がいた。レナやカナメとは違った青い色の長髪をしている。

「ちょっといいか？　まずは名前くらい名乗らせてくれ。俺はカナメだ」

確かに名前は教えておかないといけないよな。

「僕はクロードです」

「レナ・ランフォードです」

「レナ？」

レナの名前に剣士が反応して振り返る。剣士の顔を見てレナは驚いた。

「ディアス！？」

「レナ殿はディアス殿をご存知か」

「知っているというか」

「レナ、彼を紹介してくれませんか？」

「そうですね。彼はディアス・フラック。私と同じアーリア出身で私の幼なじみの剣士です。凄く強いんですよ」

レナがそう評価するならそうかもしれない。それにしてもあんなに嬉しそうなレナは初めて見たかもしれない。

「さて、話をさせてもらう。村の活気のなさには気がついたかの？」

「そうですわね」

「実は村の子供達が山賊にさらわれてしまったのじゃ」

「なんですって!？」

「紋章の森に立て籠もって身の代金を要求してきとる」

なんて外道な奴らだ。子供達を盾にして身の代金を要求するなんて

「この者が山賊の要求を聞いてきたんじゃ」

「私は紋章の森で修行をしていたのですが、そんな時に山賊が突然やってきて子供を返してほしくば50万フォルと密印の書を用意しろと」

密印の書？ お金は分かるが、その書は一体何なんだ？

「密印の書とはマーズに伝わる紋章の秘伝書ですじゃ。お金も急には集められないし、密印の書も渡せない。そこでたまたま近くを通りかかった凄腕剣士と有名なディアス殿に助けを求めたのじゃ」

「私は余所者を入れるべきではないと言っているのですが」

「ディアスの腕前は私が保証します!!」

「お嬢さんに保証されましても」

村の問題だから村で解決したいんだろうな。でも僕らも放っておくわけにはいかない。

「お爺様、私達も手伝いますわ」

「セリーヌ?」

「大丈夫ですわ。みんな実力は確かですもの」

「ならば俺はいらないな」

ディアスが突然そんな事を言う。こんな緊急事態に何を言っているんだ。

「何を言っていますの!?!」

「実力は確かなのだろう? 俺がいる必要はない」

「失礼な人ですわね! 貴方のような協調性がない人はいない方がいいですわ!!」

「失礼なのは貴様だろう。突如入り込んできて作戦を掻き回して、俺一人で充分だったというのに邪魔でしかない」

偉そうな奴だ。一人で充分だなんて、凄腕なんて言われて調子に乗ってるんじゃないか？

「俺は宿屋に戻る」

「あ、ディアス!!」

「レナ、追う必要はありませんわよ」

「……………ごめんなさい」

あ……………行っちゃった。レナはあんなのどこがいいんだ。いくら幼なじみだからって引く付きすぎだろ。

ディアス side

大層偉そうな女だったな。だがそんな事よりも力ナメという男。あれは何者だ？ あんな男がいれば本当に俺がいる必要はない。あの

男一人でもどうにかなる。

「ディアス!!」

「レナ、わざわざ宿屋まで何の用だ？」

「村長さんから伝言よ。子供達を助けて下さいって」

「そうか。レナの本音はどうだ？」

「……一緒に戦って」

やはりそれか。レナも甘いものだ。

「あいつらが泣いて頼んだのか？」

「そうじゃないけど、貴方は強いし」

「ならば俺がわざわざ共に戦う必要はない。俺一人で出来るのだから」

「どうしてそんなに拒むの？ 独りで戦い続けるのが本当の強さではないわ!!」

「今度は説教か？ しばらく会わないうちに生意気になったな」

「たった二年よ」

しかし本当の強さ、それは一体何なのだろうな。それがあれば俺は

……

「……仕方ない。もう一人の『妹』の頼みだ。ただし、足手まといになれば置いていくぞ」

「ありがとう！！ セシルもありがとうって言ってるわ」

そう言ってレナは宿屋を出て行った。そうか、セシルがそんな事なのか。

「天国は遠いな。俺には聞こえなかった」

カナメside

しばらく村長の家の前で待っているとレナちゃんが帰ってきた。説得には成功したかな？

「みんな、ディアスを仲間にしてほしいの」

「あんな無愛想男を仲間になんて、本気ですよ！？」

セリーヌ、無愛想男って。確かに無愛想だったが、実力は確かだった。仲間になればかなり心強いだろう。

「クロードはどう思ってるの？ いいでしょ？」

「……彼は自分一人で充分だと言った。なら手を貸す必要はないよ」
こいつらは……………よし。

「どうしてそんな事言うのよ！！ カナメさん、何か言ってあげて
！！」

「何も言う事なんてないな」

「えっ？」

「お前らのくだらないお友達ごっこに飽き飽きしてきたよ。好きに
やってな。俺も俺で好きにやる」

「みんな、酷いよ…………」

レナちゃんは宿屋へ走っていき、俺は俺で適当な場所へ向かった。

《主、よろしかったので？》

「いい薬だ。俺らも俺らでやれる事を探すぞ」

《了解》

俺無しでどれだけ頑張るか。見届けさせてもらおうか。

マーズ村 懐かしき出会いと衝突（後書き）

もみもみラジオ

椋「どうも、犬走椋です。最近突然のゲリラ豪雨が多いですね。カバンには常に折り畳み傘を入れておくと心に余裕が出来ますよ」

雨季「それでも首から上以外全て濡れたんだけど」

椋「どうしようもありません。天気予報で雨雲の様子をしっかりと確認するのが一番ですかね」

雨季「今回、俺が出たのはネタがないからだよ。誰か前書きと後書きにネタを」

椋「本編は要さんが離脱して二つのグループに別れてしまいました。どうなるかは次回をお楽しみに」

山賊退治（前書き）

アリかな雑談室

叶「こんにちは」

アリサ「今回も始めました」

叶「でもやる事がないよね。実家に帰ろうかな」

アリサ「なら私も帰るわよ。えっ？ 帰ったら駄目なの？」

叶「相変わらずこの局はケチだね」

アリサ「まあいいわ。突然だけどどうでもいい話。作者は今回のサブタイトルが一瞬人名に見えたらしい」

叶「では本編どうぞ」

山賊退治

レナ side

まだ日も登って間もない時間にディアスは出発すると言った。それの方が確かに山賊も油断しているから安全かもしれない。

「泥靴は持ったか？」

「ええ」

紋章の森には沼地がいくつかあって、その沼地を越えるのに必要なのが泥靴らしい。ちよつと不格好だけどしょうがないわよね。

「もう行かれるのですか？」

「ああ」

紋章の森の前で立っていた人が声を掛けてくる。それもそうよね。こんなに早いもの。

「行くぞ、レナ」

「そうね」

森は薄暗く、どこかに何かが隠れていても分からないかも。

「むっ」

「これが沼地ね。普通の靴じゃ無理ね」

「そのための泥靴だ」

これがあってもあんまり入りたくないな。ぐちゃぐちゃしてる。

「急ぐぞ。山賊は待たん」

「待ってよディアス」

「な、なんだてめえらは!?!」

「早速雑魚がお出ましか」

「雑魚だとお!?! ぶつ殺してやる!?!」

「ディアス!?!」

挑発されて怒った山賊がディアスに斬り掛かってきた。

「遅いな。ケイオスソード!?!」

「ぐあっ!?!」

だけどディアスは山賊の剣が当たる前に剣を振って、剣から出た波動で山賊を倒した。前よりずっと強くなってる。

「ディアス、怪我はない?」

「今のが怪我をしたように見えたか?」

「念のためよ」

「フッ」

せつかく心配したのに鼻で笑われた。こうなったら私だって成長してるってのを見せて見返してやるんだから。

クロードside

レナもカナメも結局帰ってこなかった。こうなったら僕とセリーヌさんだけで山賊を倒してやる。

「セリーヌさん、行きましょう」

「ええ。つとその前にこの泥靴を」

「これは？」

「紋章の森にある沼地を越えるのに必要な靴ですわ。不細工なのが気に入りませんけど」

こんな長靴で大丈夫なのか。だけど使わなきゃならないならしょうがない。動きにくそうだから沼地を渡る時だけ使おう。

「あ、お二人も行かれるのですか？」

「も？ 私達の前に誰か？」

「ええ。ディアスさんとレナさんが」

二人はもう先に行ったのか。それにレナは向こう側だったなんて。これはのんびりしていられない。

「セリーヌさん、急ぎましょう」

「子供達を救出するのは私達ですわ」

勢い良く紋章の森に入っただけども、しばらくするとセリー又さんがキヨロキヨロし始めた。

「どうしました？ 敵でもいましたか？」

「い、いえ。ただ……」

ポトリ

「キャアアアアアアアアアアアアア！！！！！！」

「な、何が」

「虫、虫いいいい！！！！早く取ってえええええ！！！！」

セリー又さんは虫嫌いだったのか。こんな光があんまり届かないほど木々の生い茂った森だ。それはもう沢山の虫がいるだろう。とりあえずセリー又さんの肩にいる芋虫を取って捨てよう。

「大丈夫ですか？」

「ありがとう。どうも、虫は苦手で」

「誰にだって苦手なものはありますよ」

しかしあんなに大きな声でセリー又さんが叫んだのに山賊が全く来ない。気付かれなかったのか？

「早く子供達を救出してしましましょう。こんな森抜けてしまいいい」

「紋章術師ってこの森で鍛えるんじゃないですか？」

「私はお父様に鍛えてもらいましたの」

そうなのか。それにしだって虫が駄目でよくトレジャーハンターやってきたよな。

……

……

……

…

進めど進めど山賊の姿は見当たらない。

「ディアス達が全て倒してしまったのかしら？」

「かもしれません」

だとしたら悔しいけど良かった。これは競争じゃないんだ。誰でもいいから早く子供達を助けるのが先決だから。

「！ てめえらか。俺らの縄張りを荒らしてんのは！！」

「あら、私達は荒らすなんて事はしていませんわ」

「なら仲間か！ 殺してやる！！ 野郎共、行くぞ！！」

山賊達が剣を抜いて向かってくる。

「やってやる」

僕も剣を構えてセリーヌさんは呪文を唱え始めた。僕はセリーヌさんに敵を近付けさせないようにしながら山賊達を倒していった。

「エナジーアロー！！」

セリー又さんの放った紋章術は無数の紫の矢となって山賊のリーダーと思われる男を貫いた。それに動揺した山賊達はバラバラに逃げていった。

「よし、勝った」

「ですが今は小さなグループですわ。先にはもっと沢山いるはず
です」

「大丈夫ですよ」

油断はしてられない。今回は回復をしてくれるレナもフォローをしてくれるカナメもいないんだから。

「ハア……ハア……！！」

「貴方は、村長の家にいた紋章術師の」

「貴様ら……そうか、貴様らを入質にすればあの男も手を出せまい」

「何を言ってますの？」

「計画は破綻した。教えてやろう。俺が山賊のボスだ。貴様らがいなくなつてから村を襲つて紋章術師共の宝を奪うはずだったが、あの男のせいで全てが終わつた。せめて貴様らを人質としてあの男を殺してやる！！　オオオオオオ ■■■■■■！！」

「！！」

「な、怪物になつた!？」

「これは、アレンと同じ!!」

紋章術師の男の身体は肥大化し、ローブを破るほど巨大になった。爪も鋭くなり、その顔は人のものとは思えないほど狂気に包まれていた。しかしあの男って、もしかしくなくてもカナメだよな。

「クロード! 来ますわよ!!」

「■■■■■■■■■■!!!!!!」

「危ねっ!! この野郎!!」

ガキン

「硬い!?!」

怪物となった男の身体はとても硬く、刃が通らなかった。以前のガイルの時はセリー又さんの紋章術とカナメで何とかだったが、こんな森じゃあ規模の大きい紋章術は無理だし、カナメはいない。僕が何とかしないと。

「兜割しかないか」

兜割は僕の技でも威力の高い技だが、高くジャンプしないとイケないし、命中率も悪い。……………そうだ!!

「セリー又さん。さっきの紋章術は一点を狙うのは可能ですか?」

「本来は難しいですが、相手が大きいのと私の腕があればいけます

僕らだけでも何とか勝てた。レナ達はどうしてるかな？

ディアス side

「それでクロードったらね」

先程からレナは仲間の話ばかりしている。

「心配なら戻ったらどうだ？」

「し、心配なんて」

「心配だから話をして誤魔化すのだろう？」

「……」

分かりやすいのは変わらないな。クロードという男が気になってい
るのも手に取るように分かる。もしクロードがレナの言うような剣
士ならば手合わせを試みたいものだ。

「いやあああああ！ー！」

「待てクソガキ!!」

一人の少女がこちらに向かって走ってくる。

「お兄ちゃん、お姉ちゃん、助けて!!」

逃げ出してきた子供か。仕事だから助けてやるのは当然だ。

「失せろ」

「ヒッ!?!」

山賊の男に剣を突き付け、殺気をぶつけると怯えて逃げていった。

「ありがとう!!」

「仕事だ」

「それでもセシルは嬉しいよ」

セシル……

「貴女セシルって言うの？ マーズの子よね？」

「そうだよ」

「名前が同じだけだ。妹とは、違う」

それにセシルはもういない。この娘に重ねてもしょうがない。

「ディアス、この子どうする？」

「あ、私一人で帰れるよ」

心配ではあるが近くにいられたら邪魔だ。帰す方がいいだろう。

「セシルちゃん、みんなは向こうかな？」

「そうだよ。早く助けてあげて」

「お姉ちゃん達に任せなさい」

「もういいか？」

「大丈夫よ。行きましょう」

少し歩いただけで小屋があつた。まさにこの中に人質がいるという
雰囲気だな。中から騒がしい気配もする。

「入りましょう」

「待て。人質がいるのは確かだが、見張りがいないのはおかしい」

「さっき追いかけてたのは？」

「一人に任せるとは思えんな。……………人質は餌か！！」

「御名答。噂の剣士様は頭の回りもよろしいらしいな。今頃村は大

変な事になってるぜ」

茂みから重装備の男が出てきて木々から山賊が降りてきた。

「お前が山賊のボスか」

「俺はボスじゃねえが、ボスの手を煩わせるまでもねえ！！ アザルギム様が殺してやらあ！！」

「10秒だ」

他の雑魚に比べればマシだが、雑魚である事に違いない。だがあの重装備が邪魔だな。

「ケイオスソード！！」

「ぐおっ！？」

アザルギムとやらの剣を吹き飛ばし一気に近付く。

「終わりだ。臍！！」

「ぬあああああ！！！？」

剣をアザルギムの足元から上に向かって振ると、上空に巻き上がるような衝撃波が起こり、アザルギムを鎧ごと引き裂いていった。

「ひ、ひえええええ！！」

「化け物だあああ！！」

残りの山賊共は逃げていった。あの様子だと戻ってくる事はないだろう。

「俺はこの死体を片付けておく。子供達はレナが頼む」

「え、ええ」

「どうした？」

「本当に強くなったわね」

「今更だな」

………

………

………

………

子供を逃がし俺らも帰る途中にクロードと、セリーヌだったか？
それと怪物の死体を見つけた。

「クロード！ セリーヌさん！ これは！？」

「山賊のボスの成れの果てだよ」

「お二人共、子供はどうなさいました？」

「助けましたよ」

「そう、良かったですわ」

この死体、頭を一撃か。まだまだ荒いがこれは……

「クロードといったな。これを行ったのはお前か？」

「そうだよ。セリーヌさんの助けもあったけどな」

「レナの言った通りか」

「えっ？」

「お前と剣を交える日を楽しみにしている」

さっさと村に帰るとするか。山賊の残党がいなくても限らんからな。

クロードside

村に戻ると大量の山賊が捕まっていた。

「お帰り」

「カナメ、これは」

「俺と村の皆さんでな」

「いやいや、カナメ殿が殆どでしょう」

やっぱり山賊のボスが言ってたあの男っていうのはカナメだったのか。納得だ。

「皆さん、本日はありがとうございました。お陰様で子供は無事で密印の書も盗られませんでした。出来る事は少ないですが、本日は精一杯のお持て成しをさせていただきます」

「いや、俺はもう行く」

「ディアス、行っちゃうの？」

「ああ」

第一印象からそうだったけどディアスって騒がしいの苦手そうだしな。それに仕事が終わったら帰るって感じだし。

「ではな」

ディアスは振り返る事もなく村を後にした。僕らは一晩村にお世話になってから次の目的地へ向かう事になった。

山賊退治（後書き）

もみもみラジオ

桜「皆さんこんにちは、犬走桜です。東日本は冷える日が続いているみたいです。急激な温度変化で風邪をひかないように気をつけて下さい。さて企画をいろいろ応募したのですが、意外と集まりました。ありがとうございます。ただ、私の子育てってやる必要がありますか？」

薊「ん〜？」

桜「薊、出て来たら駄目って言うてるでしょう」

薊「あ〜い」

桜「分かってないわね。とりあえず次回からは要さんが何かしてくれるはず。そして次回の本編は雨季さんが好きなキャラナンバー12。某幻想殺しより絶対不幸な彼の登場です。では次回もお楽しみに」

彼の不幸は世界一（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「だるい」

叶「眠い」

アリサ「昨晚遅くまでゲームしてたのが今になってきたわね」

叶「……………うん」

アリサ「今回は新キャラ登場です」

叶「……………zzz」

アリサ「では本編どうぞ」

彼の不幸は世界一

要side

現在俺らはマーズで一泊し、ラクール大陸へ渡るためハーリーへ向かっている。

「まさかお爺様でも読めないなんて。この古文書は一体いつに作られたのでしょうか？」

「案外昔の子供も落書き帳だったりしてな」

「カナメさんは面白い事言うわね」

「それはそれで価値があるかもしれないね。僕は知らないけど」

そんなの考古学者だって知らないだろ。確かマーズの村長の情報だとラクール大陸にあるリングって街には有名な言語学者がいるようだからそれが最後の頼みか。まあ俺らの旅に必要ないけどここまでくると知りたくなるよな。

「あ、船が見えるわ！！」

「街の入り口がすぐ港みたいだな」

「早くラクールに渡ってしましましょう。私、楽しみで楽しみで」

「そんなにラクールっていい場所なんですか？」

「当然ですわ。この世の中心地と言っても過言ではないような国ですもの」

セリーヌも好きだな。どうせ目当てにしてるのはその最新ファッションとかだろ。

「なあ、爺さん聞いたか？」

「うむ、サルバも大変じゃの」

道で話していた若者と老人の会話が耳に入ってきた。サルバがどうして大変なんだ？

「少しいいか？ サルバで何かあったのか？」

「ん？ サルバでか。なんでも坑道で双頭の竜が出たんだと」

「わしが後15年若ければそんな竜ちょいと倒してやったのに」

「爺さんは15年若くても全盛期じゃないだろ」

坑道に竜か。坑道つつと以前レナちゃんが捕まったあの坑道だろうな。いくつか分かれ道があったからそのどこかに潜んでいたのだろう。

「カナメさん、今のって」

「レナちゃんは気になるか？」

「はい。アレンもいますし」

「アレン？ どちら様ですか？」

「セリーヌさんは知らなかったですね。レナの幼なじみですよ」

竜か。この先どんな敵が出るか分からん。竜といえどどんな世界においても高位に位置する生物だ。見ておいて損はないだろう。

「行くか、サルバ」

「カナメ！？ 私達はラクールに向かわなければならぬのですわよ！ー！」

「セリーヌ、目的地エル大陸だぞ。完全にラクールの最新の流行を目的にしているか？」

「そ、そんな事はありませんわ」

「別に俺らが早く着いたからってソーサリーグローブがどうにかなるとは限らん。ならちよつとくらい寄り道しても大丈夫だろう」

「セリーヌさん、私はサルバに行きたいのですけど。駄目ですか？」

「構わなくてよ。サルバで宝石を見るのも悪くありませんし」

そうか。サルバはセリーヌの大好きな宝石がある鉱山の町だったな。それに何気に仲間意識も強いから黙ってでもついて来ただろう。

「じゃあちよつくら戻りますか」

クロードside

サルバに戻ってきたけど、兵士とかが沢山いた。ここにいる全員が
竜退治に来たんだろうか。

「凄い量の人ね」

「レナ！ クロードにカナメも来てくれたのか！！」

「アレン！！」

「久しぶりだな」

そんなに時間が経ってないのにかなり前に感じるのはそれだけ濃い
時間を過ごしたからだろうか。

「坑道に竜がいると聞いたが、大丈夫か？」

「大丈夫、とは言い難いかな。もう何人も挑んではやられている。
幸い町に被害はないんだけど。君達ならきつと大丈夫だよ」

僕ら信頼されてるな。こつも期待されると恥ずかしい感じがあるな。

「そういえばさっき一人の剣士が入っていったから協力して頑張ってくれ」

「分かったわ」

「無事に帰ってくる事を願ってるよ」

竜なんてみんなの力があればきつとなんとかなるぞ。

……

……

……

…

以前レナを救出したのとは違う方向に向かって坑道を歩いていく。

「おつ、看板だ」

「竜に注意。分かりやすい看板ですわね」

でもこの先に竜がいるっていうのがはつきりしているからいいと思う。

「ん？」

「今、人が走っていったわね。先に行ったっていう剣士かしら？」

「だろうね。僕らも行くぞ」

普通のモンスターとも何度か遭遇したけど、強いのはいなかった。強いのは竜に挑んだ兵士達に倒され尽くしたのだろうか。

「ちよっとお腹空いたな」

「ならステーキがあるわよ」

「ステーキ！！ 本当かい？」

「ええ」

「ステーキなんてお腹にもたれる物を今食べますの？」

「大丈夫ですよ」

ステーキか。僕の好物なんだよな。やっぱり男はがつつり肉を食べたいよね。

「はい、『ゼラチン』ステーキ」

「……………何これ？」

「ああ、ゼラチンステーキでしたか。それならいいですね」

プルプルしてる。こんなのがステーキなのか？ いや、確かに塩胡椒を付けて焼けば大抵ステーキと言えるけど。

「カナメエ」

「こっちに振るな。俺だってスライムのステーキは初めてだ」

カナメでも初めてな事なんてあるんだな。しかしセリーヌさんの反応からするとこれは一般的な料理なのか？ 覚悟を決めよう。

「……美味しい。ただやっぱり食感がなんとも言えないな」

「クロード達は初めてだったのね。私も初めての時はあんまり食べる気がしなかったわ。料理するのは難しいし」

「ふーん」

腹ごしらえも終わったし、早く竜退治をしまおう。

レナ side

進んでいると誰かが戦っている音が聞こえてきた。

「いたわー!!」

「あれが竜か」

竜は蛇のようで手足や翼はなく、二匹の蛇が絡み合っているようだった。竜は片方が赤く、片方が青かった。

「あの剣士、なかなか強いな。下手に手を出すと邪魔になるかもしれん」

「ならどうします?」

「……応援しようか」

「そうしましょう」

もし負けそうになったら参戦すればいいしね。

「頑張れー!!」

「そこだー!!」

「ああ! 危ないですわー!!」

「一歩引いて斬り込めー!!」

私達が応援していると剣士の人がこっちに振り向いた。応援が嬉しかったのかしら？

「悪いけど静かにしてもらえないかなあ？ 気が散るんだよ」

……ただ迷惑だったみたいね。
そんな中、竜が後ろから近付いてきていた。

「後ろ！！」

「へっ？」

カッ

暗い洞窟内で光が溢れ出す。その光でみんな目が眩んで動けなくなってしまった。

「うう、一体何が」

「チカチカする」

「竜はどこだ！？」

剣士の人は逆光になる位置にいたので大丈夫だったみたい。そして彼は竜を探しているようだけど……

「君達、竜を知らない？」

「……知ってる」

彼は気付いてないみたいだけど私達のはつきりと分かっている。だ
って『見える』もの。

「何処にいるの!？」

「」「」「背中」「」「」

「……………背中？」

「ギャフフ！」

「フギヤフギヤ！」

「な、なんだこれー!？」

彼の背中には二匹の竜が引っ付いていた。

「よ、良かったですね。命は無事で」

「良くないよ!!　ってか『は』って何!!　『も』じゃないと駄
目なんだよ!!　こうなったら君達に責任を取ってもらっよ」

「何故私達が責任を取らなければいけませんの？」

「君達が騒いだからだろう!!　もう少しで勝てたのに」

そうは見えなかったけどなあ。

「僕をキズモノにした責任をちゃんと取ってよ」

「どうすればいいのさ」

「この竜を払い落とす方法を一緒に探してもらおうよ」

ええ、よく見ると可愛いのに払い落としちゃうんだ。

「どうする？ 僕は正直やる気しないな」

「私も別にやらなくてもいいかと」

「だがあいつの意見にも一理ある。勝敗はともかく俺らの応援が邪魔だったのは確かだ。レナちゃんはどうする？」

「そうですね。迷惑だったのに間違いはないですし、手伝ってあげてもいいと思います」

「レナもカナメも甘いですわね。分かりました。やりますわ」

「みんながそう言うなら僕も賛成だよ」

「ねえ、責任取ってくれるの？ くれないの？」

「ちゃんと責任を取ります」

「本当に？ 良かったあ。このままでずっといるなんて嫌だからね。僕はアシュトン・アンカース」

「ギャフッ」

「フギヤッ」

「お前らはいいよ」

やっぱりあの竜達可愛いなあ。

彼の不幸は世界一（後書き）

もみもみラジオ

椀「こんにちは、犬走椀です。土用の丑の日に鰻を食べるのには夏バテ解消という立派な理由があるのですよ。アシュトンに引っ付いた竜を剥がすために西へ東へ。竜は本当に落とせるのか。前回は要さんが後書きで何かすると言いましたね。あれはなかった事になりました。では次回もお楽しみに」

魔物払い 前編（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「みんな、お盆はどうだったかしら？」

叶「お盆が終わって忙しい人もそうじゃない人も適当に見ていってね」

アリサ「今回も前後編よ」

叶「S O 2はイベントが多いからね。この調子だと終わるのがいつになるやら」

アリサ「では本編どうぞ」

魔物払い 前編

要side

前回、双剣士アシュトンに竜が取り憑いた責任を俺らは取る事になった。しかし竜を払い落とす、つまり魔物払いをする方法を知らない俺らはとりあえずサルバの町の入り口で話し合いを始めた。

「こいつらを落とすのか」

「ギャフン!!」

「フギヤ!!」

「怒るな怒るな」

「カナメはこいつらの言ってる事が解るのか？」

「雰囲気だな。まあ取り憑かれてるアシュトンが一番解るんじゃないか？」

「僕だって雰囲気程度でしか解らないよ」

そうなのか。だが確かに俺も最初はORTとの意志疎通なんて出来なかったからな。それと同じか。

「ねえみんな、この子達に名前付けない？　いつまでもこいつとかだと可哀想でしょ？」

「ええ、結局払い落とすんだよ」

「いいじゃない、アシュトン」

「ならレナちゃんに命名権をやるっ」

「勝手に決めるなよ」

「なら、この赤い子は目がギョロツとしてるからギョロね。こっちの青い子は目がウルウルしてるからウルルンよ」

「……」

「ギャ、ギャフ？」

「フギャ」

俺らは固まって二匹は困惑していた。なんというか、俺もネーミングセンスの無さは大概だがこれはどうなんだ？

「……払い落とす方法はどうする？」

「マーズなんてどうでしょう？ お爺様の家なら何かあるかもしれませんか」

「いい考えだね。そうしよう」

「みんな、どうしたの？ 何か悪かったかしら？」

「……全然大丈夫」

否定出来ない。否定したら悪い気がしてならない。

……

……

……

…

マーズの村の村長の家に着いた。家の中にある書庫には魔導書やら文学書やらが沢山あった。これだけあれば魔物払いの本くらいあるだろう。

「お、これ面白いな」

「カナメさん、真面目に探して下さいよ」

「ちょっとくらい許してくれよ」

使えないとはいえ魔導書とかには面白い事が書いてあったりするんだよ。

「あつた!!!」

そんな中クロードが目的の物を見つけたようだ。アシュトンがすぐに近付いて覗き込む。

「被い落としの書、きつとこれだよ！！　なんて書いてあるの？」

「異形のものに取り憑かれし者、この書物を紐解かん。取り憑かれし魔物の種によりて、慎重に選ぶべし」

「種類？」

「人の霊とか、馬の霊とか……そういうことじゃないかな」

「僕は竜だよ！！」

アシュトンの奴慌ててるな。そんなに慌ててもすぐに落とせるわけがないのに。

「『魔物竜』に取り憑かれし者、空を舞う王者の涙を聖なる『銀の杯』に受けよ。『銀の杯』が眠るは静かなる水面に抱かれし母なる体内。『王者の涙』を持ちし者は険しき山頂に立ち、誇らかに勝負を挑む。空の王者より勝利を得し時、汝は涙を受けん。魔物竜が生まれし場所に戻りて、『銀の杯』に注がれし『王者の涙』を口に含み、我が書物の示す誓いの言葉を唱えよ……だつて」

成る程、それをすれば竜は払い落とせるわけか。だが問題は銀の杯と王者の涙の在り方だな。

「水面に抱かれし母なる体内、湖か何かかな？」

「ならクロス王国の近くに湖がありますわ。そこには山岳宮殿という遺跡もありますから、そこが母なる体内かと」

「確か地図で見た限り近くに山脈もあったな。王者の泣つてのを持ってるのは山頂にいるって書いてあるし、多分そこだろう」

「なら早く行こうよ！！　これで僕の背中が軽くなる日も近くなっただって事だね」

にしても俺らってクロス王国には何かと縁があるな。

「そういえばギョロとウルルンはどうなっちゃうの？」

レナちゃんが突然そんな事を言う。確かにどうなるとは聞いてなかったな。

「どれどれ……あゝ、やっぱりな」

「カナメさん、どうなるって？」

「消滅するそうだ」

「そんな……」

俺は払い落とすという時点で予想は出来ていたが、みんなはそうじゃなかったみたいだな。

「ギョロとウルルン可哀想」

「そこまですなくてもいいのでは？」

「流石にそれを聞くとやる気がな」

「なんだよみんな、酷いじゃないか」

「お前らそう言つな。まずはやってみない事には始まらんぞ」

もしかしたら消滅とか言っても残るかもしれないからな。

アシユトン side

せっかく手掛かりがある遺跡に行ったのに許可がないと駄目だつて
兵士の人に追い出されてしまった。許可ってクロス王に貰うんでし
よ？ そんな簡単に貰えるのかな。

「アシユトン、何突つ立ってるんだ。早く城に入るぞ」

「あ、うん」

みんな王様に会えるかどうか分からないのに普通だな。アポ無しで
会えるはずないよ。

「ちょっとクロス王に会いたいんだが、時間はあるか？」

「おや皆さん、こんにちは。すぐに聞いて参ります」

「なんだか悪いなあ」

「クロード、向こうの好意だ。有り難く頂いとけ」

「少しクリスと会ってこようかしら」

「後にして下さいよ、セリーヌさん」

「お待ちせ致しました。すぐに大丈夫だそうです」

ええ、謁見ってそんな簡単に出来るものだけ？ と、とにかく王様に許可を貰わないと。

「王様、いきなりすみません」

「ははは、お主ならいつでも歓迎じゃ。して、今回は？」

「彼の背中を見て下さい」

「……………竜、か？」

「はい。彼の魔物払いのために山岳宮殿を開放してもらいたいのです」

「あそこか。あそこには強力な魔物がいるらしいが、お主らならば問題あるまい」

「そんな、信頼しすぎですよ」

「そうかの？ あの遺跡くらい攻略出来んとソーサリーグロブの調査などままならんぞ」

「それもそうですね」

……今、ソーサリーグロブって言葉が出たよね。ソーサリーグロブってあの空から降ってきた災厄の塊だね。みんなそんなの調査してたの！？

「聞いてないよー！！」

「彼はどうかしたのかな？」

「竜に取り憑かれてるのが不安でしょうがないのでは？」

全然違うからね！！

レナ side

王様に許可は貰ったから早速遺跡の探索よ。あんまり気乗りしないけど、アシュトンとの約束だもの。

「また行き止まりだ」

「流石に入り組んでるな。ちょっと待ってろ」

カナメさんが辺りを見回してじっとする。そしてしばらくしてから歩き始めた。

「こつちだな」

「どうして分かるの？」

「企業秘密だ」

カナメさんが歩いていくのについていくと、行き止まりにぶつかる事もなく遺跡を進めた。

「あー!!」

突然アシュトンが大声を出して走り出す。そこには台座に置かれた銀色の杯があった。

「やったあ!! ようやく見つけたぞ!!」

「喜ぶのはいいが、下がれ」

「ぐえっ!?!」

カナメさんがアシュトンのマントを引っ張ってアシュトンを後ろに下げる。するとさっきまでアシュトンがいた場所に魔物が飛びかかってきた。女性型の魔物、ナイトメアだ。

「簡単には取らせてくれませんわよね」

「そうですね」

「やってやる！ バーストナックル！！」

「僕の邪魔をしないでよ！ ツインスタッフ！！」

クロードが炎を纏った拳を放ち、アシュトンは双剣で突いたけど敵には効いていなかった。

「ええ！？ どうして！？」

「慌てる前に避ける！！」

敵がアシュトンを襲おうとした時にカナメさんが敵を蹴り飛ばした。二人の攻撃は効かなかったのに。

「そら！！」

だけでも壁にぶつかった敵に追撃したカナメさんの攻撃は効かなかった。

「そついつ事か」

「どついつ事ですか？」

「こいつは動いている時にしか攻撃が効かない。だが紋章術は効くかもな」

「なら私の出番ですわね。サンダーボルト!!」

小さな雷球が敵の真上に出来てそこから雷が降った。カナメさんの予想通りそれは敵に当たり、敵を怯ませた。

「それなら僕だってやってやる!! ノーザンクロス!!」

アシュトンが剣を十字に振ると、氷の十字架が出来てそれが氷の槍になって飛んでいった。アシュトンの剣技は紋章剣って言う特別な剣技だったわね。

「効いてるみたいだ!!」

「やるじゃないか。なら俺も少し面白いもんを見せてやるよ」

青っぽい光の針がいくつもカナメさんの周りに現れた。それを見た敵が逃げ出そうとした。

「逃がさない! デイレイ!!」

私が動きを遅くする紋章術を敵にかける。これでもう逃げられないわ。

「じゃあな。ニードルマシンガン」

遅くなった敵に向かってカナメさんが無数の針を撃つ。針は敵だけではなく後ろの壁ごと決り貫いていった。

「カナメ！！　今のはなんですか！？　あんな紋章術知りませんわ！！」

「レナの回復紋章だって知らなかったら？　世の中知ってる事ばかりじゃないんだよ。それより杯ゲットだな」

「そうだね。次は魔鳥の涙を手に入れるだけだ！」

みんなで喜んでいる中、クロードがポツリと呟いた。

「これでいいのかな？」

「えっ？」

「僕らは自分の都合で勝手に魔物達の住処を荒らしている。そしてその命を奪っている。これってどうなんだろう。ギョロとウルルンはどう思ってるんだ？」

「ギャフフーン」

「フギャフギャ」

「解らない、って。自分達を取り憑いたのはどうしようもなく不幸な人間だし。ってこら！！」

「ノリツツコミとはなかなかだな、アシユトン。さてクロード、それを言ったら魔物だって同じだ。この遺跡だって元々は宮殿。しかし今は魔物の住処となっている。それは人の住処を魔物が侵略したという事じゃないか？」

「そうかもしれないけど」

「難しく考えるな。答えのない問題なんて世の中いくらでもある。お前が言いたい事もよく分かるが」

確かにクロードの主張も分かる。ギョロとウルルンだって私達の都合で消滅してしまうかもしれない。でも私達は魔物退治を止める訳にはいかない。ソーサリーグロープによって凶暴化した魔物達を倒さなければ被害が出てしまうから。

魔物払い 前編（後書き）

もみもみラジオ

椛「こんにちは、犬走椛です。前書きでも言っていましたがお盆が終わりました。ちゃんとお墓参りはしましたか？ してない人は今からでもした方が良いでしょう。さて今回は魔物払い編の後編。アシウトンは無事に双頭竜を剥がせるのか。では次回もお楽しみに」

文々。ニュース

文「どうも皆さん、文々。ニュースの時間ですよ」

椛「ちょっと、勝手にこんな事しないで下さい」

文「いいじゃないの。ここでは要さんの家族がいる幻想郷で起こった些細なニュースを取り上げてくわよ」

椛「地方ニュースみたいですね」

文「実際そんなものだからね。今回は幻想郷にも夏到来。しかし例年に比べ冷夏になっており作物の出来も心配になっております。そこで今年はいち早く豊穰を司る神様、秋穰子さんが活動を始めた模様です」

柊「普段は秋から活動なのにご苦労様ですね」

文「冷夏だから本人も活動しやすい模様。ではさようなら」

魔物払い 後編（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「今回でアシュトン編が終了になるわね」

叶「それと更新が遅れてごめんね」

アリサ「更新は作者のモチベーションによるからね。しょうがないという事にしてくれると嬉しいわ」

叶「では本編どうぞ」

魔物払い 後編

アシユトンside

銀の杯は手に入れた。次は王者の涙だけだ。だけなんだけど……

「この山に登るの？」

「しょうがないだろ。あの本が正しいならこのラスガス山脈が目的地だろうからな」

「うえゝ」

だって岩山だよ。道が少しあるだけで殆どロッククライミングじゃないか。

「汚れてしまいますわね」

「セリーヌさんはトレジャーハントでこういう場所行ったりしないんですか？」

「嫌ですわ、クロード。私だって場所は選びますわ」

「それってどうなんですか？」

このマントは脱いでおこうかな。でもこれがないと僕のイメージが更に薄くなるし。

「お前ら行くぞ」

「そうよ。早くしましよっよ」

「カナメもレナも準備万端だな」

クロードの言う通り、二人は何故か山登りスタイルになっていた。いつの間にそんな格好用意したのさ。

「一応全員分あるぞ」

「カナメは本当に準備がいいな。どこで買ったんだ？」

「手作りだが」

「「「ええっ!?!」」」

「冗談だ。クロスで買ったんだよ」

「私もさっきカナメさんに騙されたわ」

流石にこんなのを作ったりはしないか。でもカナメって意外と何でも出来るから信じそうになっちゃうんだよな。素性がよく知れないってのもあるかも。

「山登りは面倒だぞ。登れば登る程に冷えるからな。それに酸素も薄くなる。モンスターと戦う時はいつも以上に無駄のない動きをしないとすぐに体力が切れるぞ」

普段と違う環境だから大変だな。それでもこれはやらないといけな
いんだ。そうだ、やらないと……

.....
.....
.....
.....

登り始めてどれくらい経つたろう。慣れない経験で時間の感覚もない。

「ちょっと休憩するか」

「やつとですよ?」

「やっと、って。まだ三時間ちょっとしか経ってないぞ」

「十分な気がする」

「そうか? あ、クロード」

「なんだい?」

「お前に持たせたりユックに鍋とか入ってるから出してくれ」

「そんなものが。通りで重いと思った」

「男なんだから我慢しろ」

……僕が背負わされたリュックには何が入ってるんだろう。これも結構重たいけど。覗いてみよう。

「何これ？」

リュックには食材が沢山入ってたけど、それ以外に黒い箱が入っていた。

「それは秘密だ」

「秘密？」

「どういう事なの？」

みんなも集まってきた。僕も知りたいから教えてほしいな。

「正確に言えば分からない」

「分からない？」

「なんか玉手箱って言うらしいんだが、開けたらアイテムが三つ出るらしい。ただ中身はランダムなんだと」

「それなら開けないのか？」

「アイテムが三つも増えたら邪魔だろ。これが終わったら開けよう」

それもそうか。何が出るかは凄く気になるけど、邪魔になったら嫌だもんね。

「じゃあ飯にしよう。レナちゃん、頼むよ」

「分かりました」

「僕も手伝うよ」

「そう？　ならよろしくね、アシュトン」

クロードside

山登りも終盤。僕達は岩壁を登っている。だけど頂上はもうすぐだ。

「……着いたあ」

「こりゃ降りも大変だな」

「今からそんな事言わないで下さる？」

でも確かにこれを降りるんだよな。絶対に疲れる。今はそれを想像しないでいよう。」

「ここに王者の涙を持ってるのがいるんだよね」

「あそこにあるのは何かしら？」

「これは、鳥の巣か」

そこには巨大な鳥の巣があった。この巨大さだと鳥自体もかなりの大きさだぞ。

「……………」

「カナメ？」

「お出ました」

何の事か分からずにカナメが見ている方を向くと、何やら黒い影が見えた。それは凄まじい速さでこちらに向かってきて、僕らの真上に着いた。

「お、大きい」

僕らの真上に来たのは輝く羽を持つ巨大な鳥。こいつが王者の涙を持っているのか。

「久しぶりだな、ジーネ」

「アシュトン？」

「違うな。ギョロとウルルンか」

確かに普段のアシュトンと雰囲気は全く違うけど、だとしたらギョロとウルルンはあの怪鳥の事を知っているのか。

「そのような人間に取り憑くとはな。魔族としての誇りを無くしたか」

「時代は変わったのだ。魔物は我らに従わぬようになり、我らに逆らう始末。更に世界の至る所で異変が起きている。このままではいかなのだ」

「だから人間と協力しろと？ そのような必要はないな」

「人間を舐めていると痛い目を見るぞ」

「ならば試してみるか？ もとより私と貴様では私の方が強かった。更に貴様は人間に取り憑いているせいで弱体化している。負ける要素がないな」

「ほざけ鳥頭。行くぞ！！」

ギョロとウルルン、じゃあ分かりにくいから、アシュトンが怪鳥に向かって跳ぶ。だが怪鳥は翼を羽ばたかせ、アシュトンを吹き飛ばす。怪鳥は飛ばされたアシュトンの身体に巨大で鋭利な爪を突き立てようとした。

「させるか！！」

ガキイン

「ぐう！？　いったゝ」

僕は剣で爪を弾いたけど、重い一撃は腕を痺れさせた。

「人間。何故邪魔をする」

「アシュトンも、ギョロもウルルンも僕らの仲間だ！！　仲間だつたら守るのは当然だ」

「そうね。みんな仲間だもの」

「私達の力で貴方を倒しますわ」

「全く。お前らギョロとウルルンが払い落とされるのを忘れてないか？」

「気にするなカナメ。我らを一時とはいえ仲間と認めてくれた。それだけで十分だ」

「ギョロとウルルンは甘いな。嫌いじゃないけどな」

「邪魔をするなら、全員打ち破るのみ！！」

怪鳥が翼を羽ばたかせると羽が弾丸のように飛んできた。それが狙っていたのはカナメだった。

「当たるかよ！！」

「当たらずともよい。貴様が浮けばな」

羽を避けているカナメに怪鳥は先程アシウトンを吹き飛ばした暴風を叩き込んだ。避けるためにバックステップしていたカナメは踏ん張りが効かずに吹き飛ばされてしまった。

「落ちるがいい」

「崖か。落ちるしかないか」

「カナメ!!」

カナメが吹き飛ばされた先は何もない崖。そこからカナメは地へと落ちてしまった。

「貴様らの中では最も強き者と思ったが、勘違いだったか」

「よくもカナメを!! 空破斬!!」

「受け取りなさい!! スターライト!!」

「許さない!! レイ!!」

「ノーザンクロス!!」

僕は斬撃を飛ばし、セリーヌさんとレナは紋章術で攻撃。アシウトンは氷の十字架を氷片にして飛ばした。しかしその全てを怪鳥は翼で防いだ。

「所詮人間などこの程度だ。貴様らもあの男と同じように落ちろ」

「来るぞ!!」

怪鳥の身体が赤く光り出すと、翼を広げて凄まじい速さで突進をしてきた。

「くくくワアアアアアアアア（キヤアアアアアアアアアアアアアア）
!!?」

避けるなんて事は出来ず、防ぐしかなかった僕らを怪鳥を軽々と突き飛ばした。幸い後ろに壁があったので落ちずに済んだが、とても立てるような状態じゃない。

「残念だったな。これが結末だ」

「くっ……」

このまま負けるのか？ 僕らは死んでしまうのか？ そんなの……
……嫌だ!!

「！ これ、は」

さっきので一緒に飛ばされてきた荷物の中に玉手箱を見つけた。最後の賭けだ。

そして僕は玉手箱を開けた。すると箱は消え、三つのアイテムが出てきた。薬品と爆弾と双剣。効果は分からないけど使うしかない。

「それっ!!」

薬品の蓋を開けて辺りに振り撒いた。すると僕らの身体の傷は癒え、完全とは言わないものの、十分戦えるくらいに回復した。

「ホーリーミスト！？ クロード、いつの間に！？」

「いや、玉手箱を開けたら」

「何やら知らんが、苦しむ時間が延びただけだ」

「そんな事はないわ！！ 貴方を倒してアシュトンとの約束を果たす！！ そしてカナメさんの仇を取るわ！！」

「勝手に殺すな」

「「「「「！？」」「」「」」

全員が、怪鳥すらも驚いた。山頂から落ちたカナメが怪鳥の後ろにいたのだ。しかも浮いてる円盤のような物に乗って。

「貴様、なんだそれは！！」

「俺の魔法。残念だったな。俺は落としても殺せないよ。しかし、よくもやってくれたな」

そう言ったカナメの目が赤く輝いた。それを見た怪鳥は一気に下がり、アシュトンも汗をダラダラと流し、歯をガチガチと鳴らしながら震えていた。

「ば、馬鹿な！！ 何故あなたのような高位存在が人間に従うのだ！！ 何故だ！！ 究極の（アルティメット）一よ！！」

「博識だな。その様子だとギョロとウルルンも知ってたか」

「我らも知りたいな。到底、人が内包出来る存在ではないぞ」

「それはまた今度な。さあ、そろそろ再開しようか。俺は手出しせんよ」

「そうしてもらいたいものだ」

なら僕らだけでやらないといけないのか。でもやらないと。

「クロード、その爆弾を使って。その後は私とセリー又さんが攻撃するわ。最後はギョロとウルルンに任せましょう」

「分かった」

「行くぞ、人間達!!」

また突進をしてくる怪鳥に火を付けた爆弾を投げつける。爆弾が爆発すると怪鳥が炎に包まれた。

「又ウツ!? 小癪な!!」

「セリー又さん!! 合わせて下さい!!」

「任せなさい!! !!」

「「レイ!!!」」

二人が同時に紋章術を撃つとそれが合わさり、より強力な光の雨となって降り注いだ。

「グオオオオオオ！！？」

「クロード、その双剣を貸せ」

アシュトンが玉手箱から出た双剣を手に取ると怪鳥に向かっていった。そしてアシュトンが消えたと思うと、アシュトンは三人に分身をして怪鳥を中心に三角形になるように立っていた。

「「「終わりにしよう。デッドトライアングル！！！！」」」

「アアアアアアア……………！！？」

三人のアシュトンが地面に剣を突き刺すと結界が創られ、それに閉じ込められた怪鳥は紋章の力によって攻撃され地に落ちた。

「私の負けか。魔物竜が人と共にある。私は羨ましかったのかもしれんな」

「ジーネ……………」

「だがそれは不可能だ。さらばだ」

怪鳥は空高く飛んでいってしまった。そして空から一つの光が落ちてきた。

「銀の杯を」

「あ、はい」

カナメは銀の杯をレナから貰い、空から降ってきた光を受け止めた。

「これが王者の涙だろうな」

「さあみんな！！ あの怪鳥をやっつけ……………あれ？」

「アシュトン、もう終わったよ」

「え、ええ！？」

これでギョロとウルルンを払い落とす準備が整ってしまったわけか。

要side

俺らはギョロとウルルンが生まれた場所。サルバの坑道にやってきた。

「アシュトン、本当にいいのか？」

「ギョロとウルルンが可哀想よ」

「一緒に旅してきましたのに」

「やるって言ったらやるんだー!!」

「そこまで決めてるならしょうがないだろ。ほらアシュトン、呪文が書かれた紙だ。これをやれば後戻りは出来んぞ」

「……うん」

アシュトンは少し戸惑いながらも紙を受け取った。迷ってるなら止めればいいのによ。

「わ、我、今ここに呪われし我が身を前にして、浄化の儀式を執り行う」

「ギャフフ!?」

「ギョロ!!」

アシュトンが杯から涙を口に含み、呪文を唱えるとギョロとウルルンが苦しそうに呻いた。

「我が身に受けし、悪しき呪いを清浄な光の中にさらさん」

「フギヤフ!?」

「ウルルン!!」

「浄化の神に誓わん、呪われし我が身を………」

突如アシュトンが呪文を唱えるのを止め、杯を落とした。

「僕だつて分かつてたさ！！　こんな事やったらいけないって！！
みんなと一緒にいるための口実だったんだ……………」

「素直じゃないな。お前も、ギョロも、ウルルンも。もうとっくに仲間だよ」

「カナメ……………」

「そうだよアシュトン。これまで旅をしてきたじゃないか。もう立派な仲間だよ」

「そうよ。ギョロとウルルンだつて仲間よ」

「私達は貴方の事を歓迎しますわ」

「クロード、レナ、セリーヌ……………僕、僕……………」

「泣くな。泣くより先に言う事があるだろ」

「うん！」

アシュトンは袖で涙を拭い、しっかりとこっちを見て言った。

「これからギョロ、ウルルン共々お世話になります」

魔物払い 後編（後書き）

もみもみラジオ

椀「皆さんこんにちは、犬走椀です。もうすぐ8月も終わりですね。早いものです。そういえば最近は大候が不安定で前にも言ったゲリラ豪雨があったりしましたね。雨季さんが住んでる地域は直撃を受けました。皆さんもそういう時は慌てず騒がず、洗濯物を取り込んで雨戸を閉めて家で大人しくしていきましょう。では次は文さんのニュースです」

文々。ニュース

文「どうも皆さん。清く正しい射命丸こと射命丸文です。それでは幻想郷で起こった些細なニュースを取り上げましょう。」

先日、白玉楼の主である西行寺幽幽子さんが庭師の魂魄妖夢さんに食事を一日五食から三食に減らされた事に腹を立て暴走を始めました。幸いにも八雲紫さんと博麗霊夢さんの活躍により被害は最小限に抑えられましたが、白玉楼の大半の食料が失われたそうです。食べ物への恨みは恐ろしいですね。では次回もお楽しみに」

幕間：究極の一（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「今回は幕間だから短いわよ」

叶「題名通り究極の（アルティメット）^{ワン}—についてだね」

アリサ「クロード達に説明は必要よね。読者様にも知らない人がいるだろうし」

叶「作者さんの持論とかが混ざってるけど気にしないでね」

アリサ「では本編どうぞ」

幕間：究極の一

要side

アシュトンも仲間になり、サルバから次の街へと向かおうとするとクロードが言い出した。

「究極の（アルティメット）一^ツって何だ？」

「それ私も知りたかったわ」

「あのジーネが怯えてましたものね」

「ギャフギャフー！」

「フギャツー！」

「ギョロとウルルンも知りたいって。僕は何か知らないけど」

ジーネめ。あそこであの名前を出すから大変な事になったろうが。大変というか面倒なんだが。

「全部は話せないからな。そこらへんは分かってくれ」

全員が首を縦に振る。こんな道端で話すのもあれだし、宿屋に行くでしょう。

……

……

……

…

何から話そうか。まずは最初の最初から話すかな。転生者とか違う星から来たとかは隠しながらな。

「クロードとレナには話したが、俺の中にはバケモノがいる。これは比喻でも何でもない」

「それが究極の（アルティメット）一ツてやつかい？」

「ああ」

「てつきりあの場を和ませる冗談か何かと思ったわ」

あの状況だとそう思われても仕方ないか。レナちゃんの重い話の場面だったからな。

「カナメが使った円盤や針の紋章術はその究極の（アルティメット）一ツとやらの力ですか？」

「あゝ、そうとでも思ってくれ」

魔法関連は話すと余計に面倒になる。ここはORTの力という事にしておこう。

「さて、次は究極の（アルティメット）^{ワッ}一の説明だ。究極の（アルティメット）^{ワッ}一は普通の生物じゃない。かと言ってモンスターとかの類とも違う」

「ギョロとウルルンは納得してるけど、僕はよく分らないんだけど」

「ガイア理論って知ってるか？」

「」「ガイア理論？」「」

「僕は知ってるよ。確か一つの星を一つの生命体として考えるのだけ？」

「まあそんなもんだ。星も生きてるって事だな」

「それでガイア理論と究極の（アルティメット）^{ワッ}一とはどういう関係があるの？」

「急かすな急かすな。星が生きてる。つまり人と変わらないんだ。人が怪我をしたり病気になるって治そうという力が働くだろう？ 星も同じだ。病気を治そうという力が働く」

「だから、それと究極の（アルティメット）^{ワッ}一の関係は何ですか？」

「極論を言うと、星なんだよ。究極の（アルティメット）^{ワッ}一は星の

病気を治そうとする力なんだ」

「……えっ?」「」

こういう反応は当然だよな。正確に言うともっと違うんだが、これの説明は更に面倒だし時間が掛かるからやめよう。

「つまりカナメは、星と一緒にいるの?」

「ああ。理由は分らんが、相性がいいのか懷かれているのか、生まれた時から一緒だった」

本当は転生した時だが、転生も生まれるだよな。

「僕より不幸?」

「アシントンよりマシだ。俺は運は人並み。それは譲れない」

「そこまで言わなくても……」

こいつ普通に歩いてても鳥の糞が降ってきたり、戦闘で魔物に集中狙いされたりすんだぞ。一緒にしてほしくないな。

「でもこれでカナメの強さが分かった気がするよ」

「一応努力もあるけど、それがデカいのは確かだ」

努力しなけりゃO R Tの力だけで現状維持って感じだったろうな。

「そっいえば目が赤くなっただけど、あれは何か関係あるの?」

「あれか。俺の中にいるのが昔にとあるのを取り込んでな。その影響かな」

「とあるのって？」

「吸血鬼だ。ほら、吸血鬼になると目が赤くなるだろ？」

「確かにそういう話は聞きますわね」

「ならカナメさんは血を吸ったりするの？」

「それはないから安心しろ」

忘れられがちだがO R Tは死徒二十七祖に数えられる存在。吸血鬼としての特徴を持ち合わせているので、必要ないが俺も血を吸う事で回復したりも可能だ。

「最後にいいかな？」

「なんだ、アシュトン」

「カナメの中にいる究極の（アルティメット）^{ゴッ}一つて見れる？ ギョロとウルルンみたいに」

「無理だな。ただ見た目は説明出来るぞ」

「どんなの？」

「40mの蜘蛛っぽい」

「40!？」

「ジーネでも30mくらいだったのに」

「それでも究極の（アルティメット）^{ワッ}一では小さい方だぞ。だから
といって弱くはないがな」

「それで小さいなんて」

「話はこれで終了。出発するぞ」

次は船旅があるんだよな。この世界の船だからきつと帆船だろう。
のんびりと出来そうだな。

幕間：究極の一（後書き）

もみもみラジオ

椀「皆さんこんにちは、犬走椀です。今回は究極の（アルティメット）一の説明回でしたね。そのため短いんですけど。そういえば最近ブラックサンダーというお菓子にハマりました。美味しいですね、あれ。次回は要さんは船旅と言っていました、その前に一悶着ありそうな予感。では文さん、よろしくお願いします」

文々。ニュース

文「お願いされました。射命丸文です。先日事件が起きました。内容は蓬萊山輝夜さんが就活を始めました。これには永遠亭の面々も驚愕。八意永琳さんに至っては大号泣。三日坊主でしたけどね。では次回もお楽しみに」

ユールとザンド（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「今回から二回はP Aメインの話よ」

叶「まずはレナさんのだね」

アリサ「正直やらなくてもいいんだけど」

叶「なら何故やったし」

アリサ「ノリじゃない？」

叶「ノリなら仕方ないか。ではどうぞ」

ユールとザンド

レナ side

サルバからヒルトンまではかなりの距離がある。馬車を雇うにはお金も掛かるし、モンスターに襲われたら大変。だから私達はある動物に頼む事にした。

「カモン、バーニィ♪」

私が大声でそう呼ぶと、ピンクの丸い大きなウサギのような生物がやってきた。それがバーニィ。人を数人乗せても素早く移動する事ができ、更に人に懐きやすいから移動手段にはぴったりの生物だ。もふもふして可愛いし。

「……………」

「クロード、カナメ、どうかしたの？」

「どうかしたの、って言われても」

「なかなかユニークな生物だな」

「二人はバーニィは初めてですか？ 安定感はありませんけど、速くて便利ですよ」

「そ、そうですね」

「レナちゃんはよくこんなの呼べるな」

「旅の途中で見つけて餌付けしちゃいました。バーニイ、よろしくね」

私達はバーニイに乗り、バーニイはそれを確認すると走り出した。

「速いな。これならすぐだ」

「で、でも、この揺れには、慣れません、わ」

「セリーヌさん、大丈夫ですか？」

「うぶっ、だ、大丈夫」

「どう見ても大丈夫じゃないよね」

セリーヌさんには少し我慢してもらわないといけないな。

.....

.....

.....

…

ヒルトン、なんだかとても久しぶりな気がする。

「船は四日後だよ」

「い、急ぎ過ぎたのでは、なくて？ うぶっ」

「セリー又は無理しないでホテルに行こう」

「アシュトン、セリー又さんをお願いね」

「分かったよ」

アシュトンはセリー又さんを連れてホテルへ行った。私達はどうしようかしら。

「俺は酒場にも行くかね」

「カナメは相変わらずだな。でも僕も少し見て回ろうかな。レナはどうする？」

「そうね。私もそうするわ」

結局こうするのが一番なのよね。いつも仲間といるとたまには一人のプライベートな時間が欲しくなるのよね。誰だってそういうものよね？

「……！」

「？」

今、何か怒鳴り声が聞こえてきた気がする。あの倉庫かしら。

「！ 貴方達、何やってるのよ！！」

「なんだ女。邪魔するなよ」

そこには一人の男性が無数の男達に囲まれて殴られていた。喧嘩だとしてもこんなの許せない。

「俺らに楯突くなら容赦しねえぞ」

「容赦しないならなんですか。その人を離しなさい！！」

「調子に乗るなよアマア！！」

「やあっ！！」

ドカツ

「ぐえっ！？」

剣を抜いて向かってきた男の一人を蹴り飛ばす。このくらいなら私一人でもどうにかなる。

「こいつ！！」

「たあっ！！」

ズドッ

「うぐっ!？」

「分がわりい。逃げるぞ！」

逃げたわね。倒れてる男性を治さないと。

「大丈夫？」

「……余計な事を」

「そんな事言わないの！ ヒール」

「!？ 傷が」

「これでいいわ」

「あんた、何者だ。こんな力見た事ないぞ」

「そうね。私も私以外にこの力を使う人は見た事ないもの」

以前まではこの力を使う事に不安もあった。でも今では仲間を守れる大切な力だ。

「あんた、名前は？」

「レナ・ランフォードよ」

「レナか。礼は言っとくぜ」

「ちょっと待ちなさいよ。貴方の名前を聞いてないわ」

「……ユールだ」

それだけ言つと行つてしまった。何だったのかしら。

……

……

……

…

次の日、足りなくなつてきた雑貨を買うために雑貨屋へとやってきた。

「ユールじゃない」

「レナ……」

「なんだユール、彼女か？」

「ちげえよ!!! / / / /」

雑貨屋のおじさんの発言に怒ったのかユールは出て行ってしまった。

「嬢ちゃん、わりいな。あいつも悪い奴じゃないんだよ」

「おじさん、ユールの事知ってるの？」

「知ってるともさ。この街であいつとザンドを知らないのはいないだろうさ」

「ザンド？」

「ザンドってのはこの街でギャングをやってる奴だ。街の高台にデカイ屋敷があるだろ？ あれがザンドの屋敷さ」

最も特に害はないんだがな、っておじさんは笑って言ってたけど次の瞬間には真面目な顔をしていた。

「だけどユールはザンドを毛嫌いして、ザンドもそんなユールが気に入らないんだ」

「だから昨日も」

「昨日？ 昨日何があつたんだ？」

「昨日ユールが沢山の人に囲まれて殴られていたんです。それを助けたんですけど」

「ちょっと待て嬢ちゃん。嬢ちゃんがユールを助けたって、ザンドの手下を倒したのか？」

「はい」

「はっはっは、大した嬢ちゃんだ！！　だが気を付けろよ。もしかしたらそれで狙われるかもしれないからな」

「大丈夫ですよ。私も強いですから」

「でも無理すんなよ。護身用の短剣だ。持ってけ」

「ありがとうございます」

ちゃんと買い物もしてホテルに帰ろうとお店を出てすぐに男達に囲まれた。

「何よ、貴方達」

「お前がユールの女だな」

「女？　違うわよ。変な事言わないで！！」

「お前の事情は知らん。来てもらっ」

「放しな　ガッ　あ……」

腕を掴まれたところに後ろから頭を殴られ、私は気絶してしまった。

ユールside

いきなりザンドの遣いが来て俺を屋敷に呼びやがった。遂に決着でも着ける気になったか。

「ユール、相変わらずふてぶてしい顔だな」

「てめえよか幾分マシだ」

俺の前に立つ金髪の男、こいつがザンドだ。はっきり言ってウザい。だが紋章術や剣を操る実力は確かだ。

「ユール、お前に好きな女が出来たそうじゃないか」

「何？」

「昨晚酒場で話していたそうだな。いい女に会った、と」

「！ てめえ、まさか」

「どんなのか気になってな。まあお前の選ぶ女など大した事ないと思っただが、なかなかどうして、まだ幼くはあるが、いい女じゃないか」

こいつ、レナを人質に取ったのか！！ どこまでも腐った野郎だ。

だが俺も迂闊にレナの話之余所ですべきじゃなかったな。クソが！！

「レナはどうしている」

「縛られておねんねしてるさ。さあ、助けたいか？ それなら相應の態度を見せてもらいたいな」

「くっ……………レナを、放してくれ」

「まだその生意気な面は下がるだろう？」

「レナを……………放してくれ」

俺は床に顔が付くくらいに土下座をした。ザンドはそんな俺の頭を踏みつけた。

「ああ、いい気分だ。最高だよ。俺に逆らい続けた馬鹿が遂に土下座をした。こんなに素晴らしい事はない」

「……………返事は？」

「返事？ 女の事か。そうだな……………ついだ。お前には屈辱と同時に絶望も味わってもらおう。好きになった女が俺の物になる絶望を、な」

「！！ 約束が違うぞ！！」

「約束う？ 俺はお前が土下座したからと言って女をお前に渡すとは言っていないぞ。今縛られている女を縛りから助けるだけだ」

クソクソクソクソツ！！！　こんなゲス野郎に、レナは……

「ちく、しょう」

レナ side

…………… 此処は？

「そうだ！ 私捕まって」

腕が縛られてる。これを外して逃げ出さないと。

「！ これ」

私のベルトにおじさんから貰った短剣が刺さったままになっていた。
これを使えば……

ブチッ

やったわ！！　これで逃げる事が出来る。

「それにしても広い屋敷ね。出口は何処にあるかしら？」

「げっ、女！ 逃げ出したのか！？ ザンド様に伝えないと！！」

「待ちなさい！！」

それは私が最初に蹴り飛ばした男だった。いい機会だからこの屋敷の持ち主に文句を言ってやるわ。そのためにあの男を追わないと。

「付いて来るな！！」

「嫌よ！！」

「ザンド様あ！！」

男に続いて部屋に入ると、金髪の男に頭を踏みつけられているユー
ルがいた。

「なんだ騒々しい、っと女、抜け出せたのか」

「レナ！ 逃げろ！！」

「ユール！？ 貴方！ その足を退けなさい！！」

「ちょうどいいが、元気すぎるのも困りものだな。ここで痛めつけ
てやるう」

ザンドって人はレイピアを抜いて構える。

「ハッ！ ハッ！ セイツ！！」

「遅いわよ!!」

「小癩な!!」

この程度の突きならアシウトンの双剣よりよっぽど遅いし、クロードの技より威力がない。

「たかだが小娘と思って手加減するつもりだったが、その必要はないようだ」

「ならどうするのかしら？」

「こうするのさ。ハアアア……………ディープフリーズ!!」

周りに冷気が漂い始める。氷属性の紋章術なんて、避けないと。

「キャアツ!？」

「チツ」

やっぱり紋章術は簡単に避けるなんて出来ずに、服の左袖が凍って砕けた。

「残念。次は身包みを剥いでやろう」

「最低ね」

「この野郎が!!」

ザンドの気がこっちに向いている時、ユールがザンドに飛びかかっ

た。

「邪魔をするな!!」

「ぐあつ!？」

ユールはザンドに蹴られたけど、そのお陰で好きが出来た。私はザンドを後ろから抱きかかえるように捕まえる。

「!」

「終わりよ!!」

剣士や紋章術師は近距離や遠距離、中距離でも戦える。でも一つだけ無防備になる間合いがある。それがゼロ距離!!

「やああああ!!」

ドゴオ

「な……に……!!？」

カナメさん直伝のジャーマン・スープレックスって技が上手く決まってザンドは気絶した。

「すげえな……」

「そんな事ないわ。それにしてもザンドはどうするの?」

「とりあえず縛っておこう。処分は街の人と一緒に考えるさ」

「それがいいわね」

もう行こうかという時、ユールが呼び止めてきた。

「なあ、レナ」

「なあに？」

「す、す……」

「す？」

「す、スパゲティの美味しい店知ってるんだが行かないか？」

「いいわね！　ちょうどお腹が減ってたのよ」

どんなお店かしら。楽しみだわ。それにしてもユールが何かしょんぼりしてるけどどうしたのかしら。

ユールとザンド（後書き）

もみもみラジオ

椋「皆さんこんにちは、犬走椋です。夏休みが終わった人が多いのではないのでしょうか？ そんな中の台風、大変ですね。直撃を受けた県の人は大変じゃ済まないでしょうけど。」

今回はアシュトンさんメインです。S O 2でアシュトンさんのカップリングといえば、そのうち出るプリシスさんが定番ですが、次回出る娘さんもいいですよ。ちなみにユールさんとレナさんのカップリングエンドはありません。では文さん、お願いします」

文々。ニュース

文「どうも、清く正しい射命丸こと射命丸文です。外では自然の台風が起こっているようですが、幻想郷では弾幕の台風が起こりました。内容はフランドールちゃんの弾幕ごっこの相手をしていた一条なのは（旧姓：高町）さんがやりすぎました。山が挟れました。自重は大切ですね。では次回もお楽しみに」

小さな命（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「今回はアシュトンメインのPA」

叶「そして次回からはラクール大陸」

アリサ「それは後書きで言う事よ」

叶「そっか。失敗失敗」

アリサ「今回はすらすら書けたみたいだけど、その分ミスがあるかもしれないわ。何かミスがあつたら遠慮なく指摘してね」

叶「では本編どうぞ」

小さな命

アシユト n s i d e

この街での滞在も三日目になった。いろいろ歩き回ったし、もう見る所もなくなってきたな。

「あれ？ ハンカチだ」

周りに人は誰もいないし、この家の前に落ちてたからこの家の人のかな？

「すみません」

「はい、どちら様ですか？」

ドアを叩くと女性が出てきた。

「このハンカチが落ちてたんですけど」

「あらこれは、ありがとうございます」

「いえいえ」

「あの、見たところ冒険者の方のようですが」

「そうですよ」

「二階にいる娘にハンカチを届けるついでに冒険の話をしてもらえ

「ませんか？ 娘は身体が弱くて外に出た事がないので」

「そうなんだ。僕も時間がないというわけでもないし、そのくらいなら全然構わないかな。」

「分かりました。それじゃあお邪魔します」

「お願いします」

二階まで上がって部屋のドアを開けると、小さな少女がベッドに寝転がっていた。

「お兄ちゃん誰？」

「これを届けに来たんだよ」

「私のハンカチだ！ なくしちゃったと思ってたのに」

「良かったね。僕はアシントン、よろしくね」

「私エラノール。ねえお兄ちゃん、私病気でこの窓からの風景しか見た事ないの。外ってどんな世界なの？」

「じゃあ話をしてあげるよ。じゃあまずは……………」

話をしようとした時、誰かがやってきた。

「レナじゃないか。あ、そうだ。頼みがあるんだけど」

「分かってるわ。悪いと思ったけど聞かせてもらったから」

そうなんだ。でもそれなら都合が良かった。早くエラノールの病気を治してもらおう。レナの力なら出来るかもしれない。

「お姉ちゃん、何するの？」

「怖がらなくても大丈夫よ」

レナの手から光が出る。でもそれをレナは途中で止めてしまった。

「駄目だわ。私では治せない」

「そうか。でも無理なら仕方ないよ」

誰にだって出来ない事があるさ。僕なんて役に立たない事がいっぱいあるし。

「治そうとしてくれたんだね。お姉ちゃん、ありがとう」

「ううん。出来なかったのだからお礼なんて言わないで」

「受け取っておきなよ。さあ、冒険の話をしよう」

……

……

……

…

「エラノール、いい子だったな」

『そうだな。惜しい命だ』

エラノールに話をしてホテルに帰る途中、ギョロとウルルンがそんな事を言ってきた。

「どついう事だよ」

『どついう事も何も、あの娘はもうすぐ死ぬぞ』

「馬鹿言つな！！ あんな元気な子が死ぬ訳ないだろ！！」

『事実だ。あの病の進行具合、長くはない。早ければ明日「ふざけるな！！」それが現実だ。認めたくはないだろうがな』

そんなの信じられるもんか。僕はそんなもの認めるか。なら明日にも会いに行けばいい。船が出るのは明日だけど、元気なエラノールを確かめる時間くらいあるはずだ。

要side

朝っぱらからアシュトンがホテルを出て行った。随分急いでたな。そして数分もしないうちに戻ってきて、レナちゃんを連れてまた出て行った。これは普通じゃないな。

「行くか」

《主、追い掛けるのですか?》

「気になるだろ?」

《そうですね》

走るアシュトン達の後をこっそりついて行くと、民家に辿り着いた。

「入るか」

《勝手に入ってよろしいのですか?》

「そこは家主に謝罪する」

仲間がいるとはいえ不法侵入だからな。本当はやったらいけないが、今回だけは許してもらいたい。

「どうにかならないんですか!?!」

二階からアシュトンの悲痛な叫びが聞こえた。

「どうした？」

「えっ、貴方は？」

「ああ失礼。あそこにいる二人の仲間です」

「カナメ……」

「アシュトン、レナちゃん、その子はどうした？」

「不治の病なんです。伝承にしかないメトークスという薬草が必要なのです」

近くにいた医者答える。伝承に伝わる薬草メトークスね。伝承つてのは伝説と違って根拠があるものが多い。

「その伝承は？」

「不死鳥の息吹が吹きすさぶ山にメトークスは生えるとしか」

「不死鳥、もしかしてジーネかしら？」

「ならラスガス山脈だね。急がないと」

「アシュトン、お兄ちゃん？」

「エラノール！？目が覚めたのかい！？」

「何処に、いるの？ 見えないよ」

「此処だよ。此処にいるから」

アシュトンは少女の手をしっかりと握り締めると少女は安心したような顔をした。

「あのね、怖い夢を見たの。お母さんも、お兄ちゃんも、いなくなっちゃう夢」

「大丈夫、大丈夫。僕は、ちゃんといるから」

「泣いてるみたいだよ」

「嬢ちゃん、聞こえるか？」

「だれ？」

「アシュトンの仲間だ。嬢ちゃん、30分我慢出来るな？ これまで病気に耐えてきたんだ。楽勝だろ？」

「30分？」

「そう。30分我慢したら薬を持ってきてやる」

「なっ！？ 不可能です！！ あるかどうか分からないメトークス、しかも貴方達が言っていたラスガス山脈は早馬でも半日は」

医者が言う事は最もだろう。だがそれは一般的な考え。チートには

通用しないな。

「アシュトン、その子とずっと一緒にいる。レナちゃんは下手に手を出すなよ」

「何ですか？」

「何でも」

回復系の術は細胞を活性化させる類が多い。だがそれは病氣すら活性化させる場合もある。レナちゃんがもし少女に回復術をやっているのを知った場合、ショックを受けかねないから教えないが。

「カナメ、頼むよ」

「カナメさん、頑張ってください」

「どうか娘を救ってください」

「期待されると、どうも期待以上の事をやりたくなるな！！」

俺は民家を出て、街の外へは一般人よりは速めに走る。そして街を出て人が全く無くなった時……

「武装・O R T」

脚にO R Tの外殻を纏わせ強化する。戦闘以外で使うなんて初めてか？ そんなのどうでもいい。どうせただ速く走るためだからな。

「地面は決らず、一気に行くぞ。アリストテレス、ナビは頼む」

《了解》

俺はただ走る。地面を挟らないのは単なる自然への配慮ではなく、俺の痕跡を極力残さないようにするためだ。つと、そんな事考えてる間に着いたな。

「いよつ、と!!!」

俺は山頂へ二、三回跳んで到着する。此処なら確實だな。

「ジイイイーネ「騒がしい」速いな」

俺が大声で叫ぶ途中でジーネが来た。俺の気配だけで気付いたのか。

「そのような脚で来られては気付かないはずがない」

「それもそうか。んで頼みだが、メトークスを知らないか？」

「メトークス？ あれは劇薬だぞ」

「その劇薬が必要なほど重症な娘がいる」

「そうか。メトークスは山頂ではなく、低い位置の日が射す岩の窪みに生える。煎じて水で溶いて与えればいい」

「助かった」

わざわざ人間への処方の仕方まで教えてくれるとはな。全くもって有り難い。

「こつちか？」

ジーネに与えられた情報を元に、メトークスを探す。

《主、それらしき薬草を発見しました》

「何処だ？」

《あれです》

アリストテレスがポイントを照射した場所を見ると、確かにジーネの情報通りの場所にそれはあった。

「ジーネに確かめるか」

「それだ」

「何だ、着いてきてたのか。まあ確かめる手間が省けて良かった。じゃあな」

俺はヒルトンへと向かって走り出す。ついでだ。着くまでにメトークスを煎じておこう。

「アリストテレス、乳棒と乳鉢ってあったっけ？」

《サバイバルセットの中に。出しましょうか？》

「頼む」

走りながら煎じるってのはなかなか難しいな。上半身を固定しないと零れる。

《そんな横着しなくても》

「時間は有限だ。おつ、ヒルトンが見えたな。武装解除」

脚を普通に戻し、街に入る。そしてあの家まで普通な速さで猛ダッシュ。

「見つけたぞ」

「まだ15分も経ってませんよ!!」

「見つけたからいいんだよ。水あるか？」

「ここに」

「どうも」

少女の母親から水を貰い、煎じたメトックスを溶かす。息が少々荒く、気を失っている少女に少しずつ、少しずつ薬を飲ませていくと呼吸もゆつたりとしてきた。

「これは……治り始めている!? なんといい効き目だ!!」

「伝承の薬草なだけあるな。だがこれだけ効果が高いと劇薬というものも頷ける。もう飲ませない方がいいだろう」

「ああ、良かった」

「エラノール、良かったね。もう……大丈夫だ」

母親は分かるが、アシュトンもまるで家族みたいだな。僅かな間に
それだけ親しくなったのか。

「感傷に浸るのはいいが、船の時間も近いぞ」

「カナメさん、そういう事言う？」

「言います。時は金なり、だぞ」

「面白くないわよ」

酷いな。そこまではつきり言わなくてもいいのにな。おじさん凹む
ぞ。

アシュトン side

もう出航か。結局エラノールにはお別れの挨拶が出来なかったな。

「アシュトン、落ち込んでんのか？」

「カナメ」

「また来ればいいさ。彼女の病気は治った。もういつでも会える」

「そうよ、アシュトン。元気出して」

「そうだね。元気出さないと」おゝい!!」! この声は!!」

船から身を乗り出し港を見る。そこにはお母さんに背負われたエラノールがいた。

「アシュトンお兄ちゃん!! レナお姉ちゃん!! カナメおじさん!! ありがとう!! またね!!」

「エラノール………また、また会おうね!!」

僕らは互いに姿が見えなくなるまで手を振った。最後にエラノールの元気な顔が見れて本当に良かった。

「一人だけおじさんでしたね」

「気にしてないさ。子供からすれば俺はおじさんなんだろ。しかし良かったな、アシュトン」

「うん!!」

もうこれで思い残す事はない。ラクール大陸でも頑張るぞ!!

小さな命（後書き）

もみもみラジオ

椛「皆さんこんにちは、犬走椛です」

薊「あざみです！！」

椛「何でいるの。ほら、スタッフさんと遊んでなさい」

薊「やーっ！！」

椛「ならお母さんのお膝の上で静かにしてなさい」

薊「はい」

椛「最近いろいろな話題がありますが、私が気になるのは女子サッカー。同じ女性として頑張ってもらいたいですね。」

本編はエラノールちゃんが助かって良かったですね。ギョロとウルルンが病についてアシントンに伝えるだの、メトックスが劇薬だの、ジーネがメトックスを知ってるだのはオリジナルですのであしからず。では文さん、お願いします」

薊「しまーす！！」

文々。ニユース

文「子供がいるって羨ましいですね。早く私も要さんとの子供が欲しい。おお、妬ましい妬ましい。どうも、射命丸文です。幻想郷のニユースですが、ミスコンが開かれました。幻想郷の様々な美女や美少女が集まりましたが、賞金や賞品目当ての一部が暴走。結局は弾幕バトルとなってしまいました。おお、怖い怖い。では次回もお楽しみに」

言語学者を求めて（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「今回は少し短めね」

叶「作者の実力を考えると妥当だよ」

アリサ「それもそうよね」

叶「では本編をどうぞ」

言語学者を求めて

クロードside

船に乗って半日、これまで帆船なんて乗った事がなかった僕は少し興奮したけど、しばらくするとその興奮も収まった。人間は慣れる生き物だからしょうがない。

「陸が見えるぞ」

「あれがラクール大陸ね。何があるのかしら？」

「ラクール王国、世界の中心地、ああ、楽しみですわ」

「そういえばセリーヌさんってラクールとクロスの政略結婚を」

「クロード？」

「ごめんなさい」

迂闊な事を言うもんじゃないな。今の目は完全に殺す目つきだった。

「しかし暗いね。半日も乗ってたからしょうがないけど」

「港に着いたら宿屋に行こう」

そういえば通信機は通じるだろうか。みんなが寝静まってから少し確かめてみよう。

……
……
……
……

街の灯りも消え、人もいなくなった深夜、僕は宿屋の外に出て通信機の電源を入れた。

ザーッ ザーッ

しかし聞こえるのはノイズだけ。僕はどれだけ遠くに飛ばされたのだろう。

「何してんだ？」

「！ なんだ、カナメか」

他の人なら言い訳する必要があったけど、カナメならその必要もないか。

「宇宙船に連絡してたのか？」

「まあ、ね。でも駄目だったよ」

「そう情けない顔をするな。絶対に帰れないなんて決まってるじゃないし、この星も住めば都だぞ」

「それって帰れないって言ってるようなもんじゃないか」

「それは失礼」

でも少し気が紛れた。もしそういうつもりでやってくれたならカナメには感謝だな。

「明日は早い。寝るぞ」

「そうだな」

しかし本当に帰れるのだろうか。もし帰れなかった時、僕は……

要side

次の日、俺らはまずラクール王国よりも先に古文書解析のために学問の街と言われるリングアへ向かう事になった。

「ラクール、行きたかったですわ」

「セリーヌさん、それ何度目ですか」

「何度でも言いますわよ」

大都市ってのはいつの時代も、どの世界でも憧れの存在だな。だが実際は住むとがっかり、ってのは何処でもあるか。

「あの街かな？」

「ばいな。そこまで遠く wasn't たな」

「距離感が狂ってるよ。かなり遠かったって」

その気になれば距離なんてあつてないようなもんだしな。

「あの大きな建物が大学かしら」

「立派なもんだな」

街中には学者や学生みたいなのが沢山歩いている。街の入り口はそこまで整備されていないが、大学近くはしっかり整備されている。

「言語学者さんは何処にいるのかな？」

「地元民に聞くのが「待てー！ー！！」なんだ？」

そこには丸い手足の付いた球体を追いかけて回す少女がいた。ってお

「おい、あれは……」

「機械!?!」

「その分野がこっちにもちゃんとあったのか」

クロードは大袈裟なくらい驚いていたが、俺も正直驚いた。紋章術を主として発展してきた世界で少女が機械を追いかけて回してるんだからな。

「行ってみよう!」

クロードが走るのにつられて全員で見に行ってみる。少女は機械を捕まえようと飛びかかったが逃げられ、機械は俺らの間を走り抜けていった。

「もー、作ったのは私なのに。あ、その人達、無人くん知らない?」

「ムジ、ンくん?」

「あのラジコンなら向こうに行っただよ」

「ありがとう!」

行っただな。元気なのはいいんだがな。落ち着きがないな。子供だからしょうがないか。

「嵐のような子でしたわね」

「でも可愛かったね」

「アシュトン、お前……」

「エラノールもそういつ目で見てたのね」

「カナメもレナも何言ってるのさ!」

だってな。あの少女もエラノールよりかは年上みただが、アシュトンと比べなくともまだまだ子供。ロリコンと思われるかもしれない。

「それより言語学者だな」

一番有名な言語学者ならこの街の誰かが知ってるだろ。

「その綺麗なお嬢さん、少しよろしいですか?」

「えっ、私ですか?」

「はい」

「な、何ですか?」

「この街で一番有名な言語学者を捜しているのですが、ご存知ありませんか?」

「それならキース先生ですよ。あの家に住んでいますよ」

「ありがとうございます」

情報入手完了。意外に近くにいたな。早速会いに行ってみるか。

「……」

「お前ら、その目はなんだ」

「以前も見たけど、やっぱり違いすぎるな」

「あそこまでしなくても教えて貰えるんじゃないですか？」

「知ってる人間から見ると鳥肌が出ますわ」

「あれは酷いね」

「へいへい」

相手のご機嫌を取るのにあんな風に言っただっていいだろ。そんなに俺が敬語使ったりするのが駄目かよ。

「失礼します」

言われたのっぽな二階建ての家に入るとぐるぐる眼鏡を掛けた男子学生がいた。ここはクロードにでも任せるか。

「どちら様でしょう？」

「キース先生に会いに来たのですが」

「アポイントは取っておりますか？」

「あ、アポイント？」

おいおい、アポが必要な学者ってどんだけ忙しいんだよ。

「取ってないんですが、今からだといつになりますか？」

「3ヶ月待ちです」

「そんなに待てないよ」

「なら諦めて下さい」

「少しくらい良いだろう」

「クロード、もういい。行くぞ」

俺達は家を出て行った。作戦会議にするか。

「何ですのあれは！！」

「ちょっと酷いわよね」

「でも3ヶ月なんて待てないよね」

「ならアポイント取らずに会えばいい」

「カナメ、それが出来れば苦労しないんだろ」

「あるさ。どんな人間にも特別な相手はいる」

それが親友か恋人か、はたまた家族かは人それぞれだが、そういう人間を邪険にするなんて人情としては出来んだろう。

「つまり此処にいるキースという学者の特別な人を捜せと？」

「それが一番早いだろう。まずはこの街を捜してみようか」

ただ学者がこの街出身じゃなかったらもつと時間が掛かるだろうか
ら、この街出身である事を祈ろう。

言語学者を求めて（後書き）

もみもみラジオ

椀「皆さんこんにちは、犬走椀です。この前ブラックサンダーが美味しいと言いましたが、ブラックサンダーのアイスがあるのを知りました。まだ暑くなる日もあるでしょうからそんな時に味わいたいですね。」

アシュトンさんをロリコンだと思った人は素直に手を上げて下さい。今回は無事に学者さんの知り合いを捜せるのか。では文さん、お願いします」

文々。ニユース

文「皆さん大好き射命丸文ですよ。今回は幻想郷でペットブームが来ている事を報告します。かく言う私も猫を飼ってみました。そしてたら白狼天狗に嫌われる事が多くなってしまいました。何故でしょう？ では時間もお楽しみに」

メカニック少女と難題（前書き）

アリかな雑談室

叶「長い!!」

アリサ「今回はいつもに比べて本編が本当に長いから気を付けて、と叶ちゃんは言いたいみたいよ」

叶「無理して一つに纏めるからだよ」

アリサ「そうよね。でもやっちゃったからしょうがないわ」

叶「誤字とかあったら報告して下さい」

アリサ「ではどうぞ」

メカニック少女と難題

レナ side

あの学者さんの知り合いを捜すためにみんなで手分けして街を探索する事にした。

「あの、すみません」

「何かな？」

「キース先生って知ってますか？」

「もちろんだよ。有名だから」

「そのキース先生の古い知り合いを捜してるんですけど」

「うーん、知らないな。でもキース先生はこの街出身だから、昔から住んでる人に聞けば分かるかも。あの変わり者親子とか」

「変わり者親子？」

「ほら、あの球体を追い掛け回してた女の子がいるだろ？ あの子とその親が変わり者なのさ。変わり者なのは見れば分かると思うけど」

確かにあれは変わり者よね。ただクロードやカナメさんが気にしてなし、少し訪ねてみるのも悪くないかも。

「ありがとうございます」

早速会いに行ってみよう。

……

……

……

…

この家よね。物がごちゃごちゃと外まで出てきて、倉庫みたいな所の中には鉄で出来た何かが転がっている。

「お嬢ちゃん、うちに何か用かい？」

ボーっとしていると家主と思わしき、恰幅のいいちよび髭のおじさんがやってきた。

「あ、えっと、ちょっと興味がありまして」

「ほっほう。お嬢ちゃんも変わり者だな。よし、いろいろと見せてやろう」

「どうも」

中に入らせてもらうと、外から見た以上にいろいろな物が転がっていた。おじさんが説明をしてくれるけどチンプンカンプンだ。

「こんなに静かに聞いてくれたのはお嬢ちゃんが初めてだよ。お茶を出してやるから此处で待ってな」

おじさんに言われてテーブルに毛布を掛けて、椅子がなく、テーブルの下が窪んでいる不思議な所で待っていると、おじさんがお茶を持ってきてくれた。それと同時に誰かが家にやってきた。あれって

……

「親父が女の人連れ込んでる!？」

「馬鹿言えプリシス!! こんな若いお嬢ちゃんに手を出すか!! お前だって男を連れ込んでんじゃねえか!!」

「これは違っし!! 勘違いしないでよ」

「えっと、レナ、どうなってるの?」

「どう言えいいのかしら?」

「「お知り合い?」」

「「まあ、はい」」

.....

.....

.....

...

どうやらクロードも街中であのプリシスという少女に会ったみたいで、キカイっていうのの話をしたら誘われたみたい。

「それにしてもどうしてこれらを造ろうと考えたのですか？」

「あゝ、ほら、思いつきって奴よ」

「おかげで変人扱いだけだね」

「プリシス、そりやお前もだろ？ それにこれらはいつか多大な評価を受けるぞ」

「そういうのって大抵制作者が死んでからだよね」

「ちったあ親父を敬え」

「やーだよー。それより茶請けがないよ。お客様がいるんだから高いのね」

「調子のいい奴め」

おじさんがお茶請けを取りに行った後、プリシスは真剣な顔をして話し始めた。

「実はね、親父のこれは思いつきなんかじゃないの」

「どういう事だい？」

「昔、空から降ってきた鉄の塊を調べていろいろ造っていったの」

空から降ってきた！？ それってソーサリーグローブみたいなものかな？ でも影響は特にないみたい。

「親父は凄いよ。失敗ばかりだけど、便利な物をいっぱい造ってる。それが認められなくても挫けない。普通じゃ無理だよ」

「……そうね」

「クロードから聞いたんだけど、ソーサリーグローブを調査してるんだって？ あたしも旅に連れてってよ」

「えっ？」

「何を言ってるんだ！ この旅は危ないんだ！！」

「分かってるよ。でもさ」

「持ってきたぞ。プリシス、お前は部屋に行ってる。ちょっと大切な話をするからな」

「せっかくお茶請けが来たのに？」

「お前のじゃねえよ」

「ぶー」

プリシスはふてくされながらも扉の向こうへと行ってしまった。

「話とは？」

クロードが聞くとおじさんは突然土下座をした。

「あいつを、プリシスを連れてってやってくだせえ！！」

「ちょ、顔を上げて下さい！！」

「あいつは俺を見て育ったせいであんな風になっちまった。そのせいで友達の一人もいやしねえ。でもあんなら俺らを見ても無視も拒絶もしなかった。だからプリシスを任せたい。頼む」

「レナ……」

困った顔でこちらを見るクロード。気持ちは多分私と同じだと思う。

「私はいいわよ」

「そうか。僕も同じだよ」

「それじゃあ」

「プリシスを連れて行きます。他の仲間も何とか説得しますから」
「あんたらには感謝しても仕切れねえな。プリシスをよろしく頼む」
すっかり話し込んだじゃったわね。プリシスを連れてキース先生の知り合いを早く捜さないと。

要side

聞き込みの結果、このボーマン薬局って薬屋の店主がキースって学者の古くからの友人らしい。

「大学での聞き込みは正解でしたわね」

「早く会ってみようよ」

「そうだな」

途中でたまたま合流したセリーヌとアシュトンと共に店に入る。店内では暇そうな白衣の男がいた。

「……ん？ おお、お客さんか。いらつしゃい。どんな薬をお探しだい？ それとも学用品をお求めかな？」

「貴方がキース先生のご友人のボーマンさんですね？」

「客じゃないのか。確かに俺がボーマンだ。キースの友人つてのも正しいが、お前は？」

「はい、実はですね「敬語はいらんよ」そうか。実は古文書をキースつてのに解読してもらおうと思つて来たんだが、どうやらアポが必要みたいでな。そんな時間はないから友人のあんたを通じてアポ無しで通してもらおうつて考えた」

「悪くない考えだな。時間がないならそういうのも手だ。しかしその古文書つてのはそこまでのもんか？ 見せてみる」

「貴方に解読が出来まして？」

「あの言語馬鹿の友人だ。多少の言葉くらい解る」

それもそうか。友人にそんなのがいれば、よっぽどでもない限り自然と解っちまうか。

「どれ……………」

「どうですか？」

「さっぱりだ。確かにキースでもない限りは解読出来んな。これはどこから？」

「クロス洞穴だ」

「まだ人の手が入りきってないあそこならあってもおかしくないか」

「それじゃあお願い出来るんですか？」

「馬鹿言っちゃいけないな、変なの背負った兄ちゃん。あんたらはズルしようとしてんだ。ちよっとくらいは俺にも得をさせてくれないとな」

「希望は？ 金か？」

「そっちの兄ちゃんの話が早いな。だが金なんていらん。この店だつて道楽みたいなものだしな」

「なら何を望みますのよ」

「薬草だな」

道楽とはいえ薬局をやってるんだ。そういうのが好きな人間なんだろう。

「どんな薬草だ？」

「そうだな。ただの薬草じゃつまらん。未発見クラスの薬草を頼もうか」

「ねえ、カナメ」

「何だよアシュトン」

「メトークスはどうか？ あれなら」

「もうないぞ。しかしマズい事言っ たな」

「メトークスつてえと、伝承の薬草じゃねえか！！ 条件を変える。未発見クラスじゃない。未発見の薬草を持ってこい！！ 場所はこの街の近くにあるリングアの聖地だ！！ クロス洞穴を制覇し、メトークスなんてもんを見つけたんだ。楽勝だろ？」

ほらみる。条件がキツくなった。俺らがそれだけの实力があると判断されちまった。まあ頼まれたからにはやりきってみせるさ。

「セリーヌ、アシュトン、さっさとクロードとレナちゃんと合流して行くぞ」

「そうですわね」

「待ち続けるよりはいいか」

.....

.....

…
…

先に決めておいた待ち時間にクロード達は街の入り口に来た。あの時の少女を連れて。

「お待たせ」

「その娘はどうしたんだ？」

「今日からお世話になるプリシス・F・ノイマンです！ よろしくね」

「大丈夫ですか？」

「私だって発明品を使えばモンスターくらい余裕だよ」

「まあまあ、ちょっとくらい良いじゃないか」

アシュトン、下手にフォローするとロリコンに……もう思われてるか。

「しかし発明品ってのはそのリュックに入ってるのか？」

「そつだよ」

少女、プリシスがゲームのコントローラーのようなものを操作すると、リュックからデカい機械仕掛けのマジックハンドとハンマーが出てきた。

「……街中に出すもんじゃないな」

「そつちが頼んだんじゃん」

「すまなんだな、プリシス。クロード、レナちゃん、リンガの聖地
つてところに行くぞ」

「どうして？」

「そこで新種の薬草を見つけないと学者に会わせてもらえませんか
よ」

「なんだか大変な事になったんだね」

「本当にな。だが地元民であるプリシスつてのが仲間になっただけで
も多少は心強いかな。こいつの発明が役に立ったらもっと有り難いけ
どな。」

プリシス side

「リンガの聖地って結構強いモンスターいるけど、クロード達って強
いのかな？ ソーサリーグローブを調査するぐらいだから強いはず」

だけど。

「此処がリンガの聖地か。荒れてるけど自然もちゃんとあるな」

「あ、これ薬草じゃないか？」

「そうみたいだけど、それは見た事あるわよ」

「こんな浅い場所だしね。もっと奥に行こうよ」

「プリシス、危ないよ」

心配してくれるのはいいけど、どうせならあたしの力を見せてあげよう。ちょうどモンスターが出てきたし。

「あれはマンドラゴラですわね」

「モンスターまで薬草か。こりゃ未発見の薬草を探すのは骨が折れるぞ」

「プリシス、下がって」

「大丈夫だよアシュトン。いっくよ、ロケットばーんち！ー」

リュックから出てるマジックハンドが飛んでモンスターをぶっ飛ばした。うーん、爽快。

「凄いじゃない！ー」

「やるもんだ」

「へっへっ」

なんかこうやって褒められるのって初めてだからこっばずかしいな。
でもいい気分。

「未発見でなくとも薬草は使えるから採取しながら行こう」

「そうね」

この先も私が大活躍してみせるよ。

かなり奥まで来て分かったけど、みんな本当に強い。クロードやアシウトンの剣術も、セリーヌやレナの紋章術も、よく知らないけど多分一級品だ。その中でもカナメは印象に残った。だってウルフ系の魔物を数十mも投げ飛ばすんだもん。

「しかし化石が多いな。これは恐竜か？」

「マニアなら涎物だね」

「……………」

「レナ？」

「あれも、恐竜の化石？」

レナは何を見つけたんだろ。化石なんて恐竜以外に何があるって…

……………

「きよ、じん？」

アシュトンが呟いたけど、確かにそれは巨人だった。恐竜よりも大きな人の骨格。

「これでいいんじゃないのかしら？」

「セリーヌ、これは持ってけないよ」

「そうだな。それにボーマンが望んでるのは薬草だ」

それだけ言うとカナメは先に歩いていった。それを追いかけると、植物とは違う緑の床が広がる場所があった。

「！　おいおい」

「どうしたんだ、カナメ？」

「見るよ、クロード。ワームホールだ。しかも異常なまでに安定している」

「！！　こんなの初めてだ」

「巨人もこれから来たかもな。ロマンがある」

ワームホール？　空中に開いてるあの穴の事かな？　空中に穴なんてあるんだ。

「全員構えろ。敵だ」

カナメの言葉と同時に穴から黄色いナマコみたいなモンスターが三匹出てきた。見た事がないモンスターだ。

「負けないよ！　ロケットぱーんち！！」

私が先制で攻撃をしたけど、マジックハンドはぶよぶよしたモンスターの身体に弾かれてしまった。

「打撃は効かないのか！！」

「なら打撃じゃない攻撃をすればいいんだよ！！　ハリケーンスラッシュ！！」

「それなら僕も、バーストナックル！！」

アシュトンが回るように剣を振ると、小さな竜巻が出来てモンスターの巻き込んで、クロードが拳から炎を飛ばしてモンスターに当て

た。でもあんまり効いてないみたい。

「これは紋章術に任せるか。セリーヌ、レナちゃん」

「任せなさい」

「分かりましたけど、いい加減ちゃん付けはやめませんか？」

「嫌か？」

「ちょっと」

ちゃん付けって子供扱いされてるみたいだもんね。私もあんまり好きじゃないんだよね。

「グラビティプレス!!」

レナの紋章術で大量の重りが降ってきた。これは効いたらしく、モンスターは気絶していた。

「とっておきですね。サンダーストーム!!」

紋章術の力で雷撃の嵐が起こって気絶していたモンスターを消し飛ばした。

「やりましたわ!!」

「お疲れ。ほら、ブラックベリイ」

「ありがとう。ってカナメ!! 後ろですわ!!」

「んあ？」

カナメの後ろにさっきのモンスターが迫っていた。傷がないからさっきのとは別固体！？

「おっ……」

「吞まれた！？ みんな！ カナメが吞まれちゃったよ！！」

「どうしようか」

「攻撃したら中まで響きそうだね」

「なら放置します？」

「大丈夫じゃありませんか？」

どうしてそこまで冷静なのさ！！ 仲間がピンチだっていうのに！！

ピギィ

私だけ慌てる中、モンスターが悲鳴を上げた。そしてボコボコと形を変えるとモンスターが内側から弾け飛んだ。

「どんなのかと思ったが、つまらん敵だったな」

「だからってあんな事するのはやめてくれよ。慣れないプリシスが慌てたじゃないか」

「そうか。悪かった」

あたし、おちよくられたの？ いや、あたしじゃなくても慌てるよ。人が喰われたんだよ。

「あれ？ この薬草見た事ないわね」

「他のと違う薬草だね。もしかしたらさっきのモンスターみたいに別の場所から種が飛んできて自生したのかも」

「なら新種の可能性が高いな。持って帰るか」

みんな普通にしてる。さっきあんなのがあったのに。あたし慣れるかな？

要side

リングに戻ってきて薬局にあの薬草を持って行った。

「戻ってきたか。ってプリシスじゃねえか」

「やつほ、ボーマン」

「年上にはさんくらい付けろ」

知り合いだったか。同じ街に住んでるから当然か。

「で、目的の物は持ってきたか？」

「これで満足か？」

「これは！？ お前ら、とんでもない事をしでかしたな」

「それって」

「文句無しに新種だ。冗談をやつてのけるとは恐れ入った」

冗談かよ。随分と悪い冗談だ。だがこれで準備完了だ。ようやく古文書を解読してもらえるな。

「早速行くぞ。キースの野郎に会わせてやるよ」

.....

.....

…
…

学者の家に入るとあの学生がいた。

「またですか。アポイントがなければ」

「アポイントがなければ、なんだ？」

「ぼ、ボーマン先生！？」

「キースに会いたいんだが、いいよな？」

「は、はい！！」

ボーマンも先生扱いされてるんだな。学生は急いで二階に上がって、そして降りてきた。

「お待たせしました。どうぞ」

「よし、行くぞ」

二階に上がると白衣を着た眼鏡の男が座っていた。

「お前から訪ねてくるとは珍しいな、ボーマン」

「こいつらの頼みでな」

「誰だ？」

「古文書を解読してほしいんだと」

「古文書か」

「僕が説明します」

クロードが俺らを代表して今回の件について説明してくれた。説明
つても今まであつた事を言ってくれたただけだな。

「クロス洞穴から取ってきた古文書か。難しいな。現代のどの言語
にも、古代文字にも似てないし、規則性もない。こりゃ歴史的発見
かもしれないぜ」

「やってくれますか？」

「王国のくだらん依頼よりもよっぽど有意義だ。喜んでやらせても
らうよ」

「やったー!!」

「ただ先に言うが、ソーサリーグローブとは関係ないと思うぞ」

「あ、そうですか」

これは仕方ないだろうな。もし昔もソーサリーグローブみたいのが
あれば多少なりとも他の文献にあるだろうからな。

「良かったなお前ら。今晚はうちに泊まってけ。無茶をさせちまっ
たからな」

それは有り難い。宿代を使わずにすむからな。ここはボーマンの好意に甘えよう。

……

……

……

…

まさかボーマンが既婚者だったとはな。ボーマンの奥さん、ニーネさんの夕飯は美味かった。まあうちの妻達の方が上だがな！！

「今日は疲れた」

「鍛え方が足りんのだよ」

「僕はカナメを基準にしてほしくないな」

「アシュトンだけじゃなくて全員だよ」

「アシュトン、クロード、今から鍛えてやろうか？」

「「やめて！！」」

「はっはっは、元気だな」

俺らがじゃれているとボーマンが部屋にやってきた。

「どうした？」

「お前らの旅についてくからな」

「「えっ？」」

「何故だ？」

「理由なんて気にすんなよ」

そう言うとボーマンは出て行った。クロードとアシュトンがボケツとしていた。突然だからな。俺も驚いた。

「どうしたんだろう？」

「さあな。だがボーマンは鍛えているようだから大丈夫だろ」

「鍛えてるの？」

「見れば分かるさ。お前らもそのうちそれくらいの実力は付く」

「付くかなあ」

「付くつての。俺はちよつとトイレ行くな」

部屋を出て家の中を歩いているとボーマンとニーネさんの声が聞こ

えてきた。

「行くんですね」

「ああ。勝手に悪いな」

「貴方がそういう人というのは分かっています。お店は気にせず頑張ってください」

「すまな……ありがとうございます」

「ふふっ、どう致しまして」

……連絡するか。

……

……

……

…

今いるのは屋根の上、星空を眺めながらアリストテレスに通信をしてもらった。

『もしもし?』

「木乃香か。俺だ」

『要さん? どないしたん?』

「ああ、ちょっと連絡しとこうと思ってな。子供達は?」

『寝とるよ。深夜やもん』

「そうか。元気にしていってくれよ。俺も元気に帰る」

『おかしな要さんやな。大丈夫、こちらは元気やよ』

「ならいいんだ。じゃあな」

『またな』

ただ妻や子供が元気と聞いただけで安心出来るとは、俺も単純な男だよ、本当に。

メカニック少女と難題（後書き）

もみもみラジオ

椛「皆さんこんにちは、犬走椛です。今回で仲間が二人も増えましたね。そして次回の予定ですが、多分10万アクセス記念です。多分というのはまだ10万アクセス行っていないからです。気が早いものです。では文さん、お願いします」

文々。ニュース

文「どうも、射名丸文です。早速ニュースに入りましょう。香霖堂に月の石なるものが入荷されました。別に月人がいる幻想郷では大した代物ではないですが、外界でバンパクなるものが開催された時に展示されたもののようです。私には分かりません。では次回もお楽しみに」

10万アクセス企画 その1（前書き）

阿利かな雑談室

阿リサ「10万アクセスです。ありがとうございます」

叶「今回と次回はそれを記念してコラボを軽くやるから、嫌いな人や本編だけが楽しみな人はバックだよ」

阿リサ「ちなみに今回のコラボは龍賀様とのコラボだけど、龍賀様の誕生日企画でもあります」

叶「龍賀様、誕生日おめでとう!!」

阿リサ「ではどうぞ」

10万アクセス企画 その1

要side

また異世界、どっかの荒野に飛ばされた。神様曰く、誰かを鍛えるとからしいが、今回は誰だよ。俺は修行に便利な道具じゃないんだぞ。

「要、元気か？」

「……………森か。元気そうだな」

「今少し忘れてただろ」

失礼な奴だな。そんな事ないに決まってるだろ。

こいつは森龍斗、金髪で蒼と紅のオッドアイを持つシヨタだ。なんか今は学ランを着てる。実に似合わない。

「凄い失礼な事を考えなかったか？」

「俺は事実しか考えん。んで、鍛えてほしいのはお前か？」

「ああ、あんたに負けたあの日から鍛え続けた。今こそあんたを超える」

「ほざけ若造。俺があの日と変わらないと思ったか？ 格の違いってのを見せてやろう」

俺も森も戦闘態勢に入る。森の奴はナイフを構えている。

「零崎……」

「あん？」

「零崎龍識。それが俺の本当の名前だ」

「あつそ」

「あつそ、つて。驚かないのか？」

「何故？」

「……いや、いい。さあ……零崎を始めよう」

零崎ねえ。確かどこぞの殺人集団だったけ？　だが戦いにおいてそんな下らん情報は必要ない。ただ潰す。それだけだ。

龍斗 side

要の構えに隙はない。だが隙なんてものは戦いの中で自然と出来る。

「斬る」

――閃鞘・七夜

クラウチングスタートのような体勢になり、斬りかかろうとしたが、目の前には要の膝蹴りが迫っていた。

「チィッ!!」

攻撃を中断し、それを受け流す。

「閃鞘や閃走は暗殺技だ。真正面から使うのは頂けないな」

「大抵の奴なら効くんだが」

「そりゃ知らなかったり、知識程度で喰らった事のない奴限定だ。俺はオリジナルを喰らった事がある」

「あんたはそういう人だったな」

下手な攻撃は一瞬のモーションを見てからでも対処されてしまう。なら向こうに攻撃させてから攻撃すればいい。

俺は刀を投影で創り、平行に構える。

「何をするつもりか知らんが、乗ってやるよ」

要が殴りかかってくる。この瞬間を狙う！！

「虚空陣奥義……悪滅！！」

要の殴りにカウンター気味に横に刀を振るい駆け抜ける。本来なら空間を埋め尽くすような斬撃が要を襲うはずだが、刀が折れてそれが出来なかった。

「危ない危ない。武装・ORTをしなかったら即死だった」

「……………」

「そんな目するなよ」

そこらの転生者なら塵すら残さず斬殺出来る技を喰らっても効果は無し。しかもO R Tを纏っている部分には直死の魔眼でも死は視えない。

「さて……完全武装・O R T」

更に要は全身にO R Tを纏う。この身であの領域まで届くか？ いや、届くんじやない。超えてみせる！！

「まずはその力を無くしてみるか。『さあ』『消えて』『みるかい？』『』」

――大嘘憑き（オールフィクション）

「『あれ？』『』」

「遊んでんのか？」

全てを虚構^{なか}った事にするこの過負荷^{マイナス}。少なくとも弱体化はさせてしまうというのに、一切効いていない。

「何をしたかは知らんが、人の力ではバケモノはどうしようもないぞ」

「バケモノを超えるのは人間とかいう台詞はなかったか？」

「んなもん人が認識出来るレベルの、人寄りの化け物だ。真性のバケモノはそんなレベルじゃない。バケモノを殺せるのは、バケモノ

だけだ」

「ならバケモノを殺せる技を使えばいい。神だろうと殺す技でな！」

――固有結界・過負荷オーバーロード

ロアの固有結界を発動させる。この固有結界自体は発動しているだけでは相手に直接的に効果があるわけではない。固有結界の効果は自身の魔術の威力の倍加。

「逆行運河・創世光年！！！」

要を魔力の檻に閉じ込め、固有結界によって超強化された魔力攻撃を叩き込む。蒼崎青子の魔法に極めて近いこの魔術、固有結界の力を得た今なら破壊力だけなら魔法にすら劣りはしない！！　しない、はずなんだが……………

「どうして無事なんだよ！！」

「無事じゃないだろ。ほら、腕が吹き飛んでる」

それも超回復のせいで治り始めている。死が視えない相手に高威力の攻撃で破壊するのが一番だが、それすら効かないなんて。

「しかも能力が更に強化されてないか？」

「星の枷を解除したからな。ただこれで終わりじゃないとだけは言っておこう」

まだ、これ以上強くなるのか。

「くくっ」

「続けるか？」

「当然だ！！ それでこそ超えかいがある！！ クロス！！ セツトアップだ！！」

《ようやく出番ですか。では本気でやりましょう、マスター！！》
さっきは投影品なんて使ったが、やっぱり俺のデバイスであるクロスは使いやすい。フルドライブの刀の形態であるクロスを軽く二、三回振って構える。

「無極零式・虚無」

刀を要に向かって振る。それだけで小型のブラックホールが発生する。

「ブラックホールか。コアを破壊するだけだ」

要はブラックホールに向かって魔力の針を投げつける。小型とはいえいくつものブラックホールに吸い込まれながら冷静に対処出来るのは流石だな。

「無極一式・牙」

高速での一突きも容易く受け止められる。

「無極二式・雨」

更に連続での突きもダメージが一切与えられない。

「無極三式・烈火」

炎を纏わせた斬撃も白刃取りをされた。

「無極四式・零」

光速を超えた居合いは要の首を捉えたが、刃は食い込まない。

「無極極式・世界！！」

全ての無極を同時に叩き込んだが、それでも効いている様子はなかった。要はORT以外を使っているわけではない。だがそれを突破出来ない。小細工のない単純な強さ。それがこれほどなんて。

「もつと何かしてみろよ」

もしあのORTを剥がせれば勝てるか？ いや、そんな事はないだろう。外は硬いから内部は脆いなんて考えは通用しない。だが外よりは柔らかいだろう。

「おーい」

弱点を探せ。今の要はどういう状態か把握しろ。人型で硬い鎧を纏っているだけ………待てよ。あくまで生物なんだから毒は………
…効かなそうだな。

「いら」

ペシン

「痛っ」

「何を考えてるんだ？　言ってみろ」

「教えてくれるのか？」

「そうしないと始まらないだろ」

「なら、要ってその状態でもあくまで生物だよな。毒って」

「効かない。ブラックバレルでも最近は克服し始めてる」

「だよな」

ブラックバレル・レプリカじゃ無駄なんだろうな。

「だが生物であるってのはいい着眼点だ。生物だから呼吸とかはしてるぞ。だからといって水中や無酸素はほぼ意味がないと考える。」

ORTが宇宙生命体なんだから」

「そうか。要の中は柔らかいか？」

「もっと言い方があるだろ。まあ外殻よりかは柔らかいな。次は？」

「もつない。ありがとう」

今ので対策が思い付いた。それが効くかは別にして試す価値はある。

「……………無極零式・虚無」

「……………？」

俺が刀を振っても創られないブラックホールに要が首を傾げた次の瞬間、要の身体の一部が破裂した。

「！？」

上手くいったか。

「驚いたな。何をした？」

「身体中穴だらけなのによく話せるな」

「頭が無事なら問題ない」

頭も狙ったんだがな。頭は他より頑丈だったか。

「それで、何をした？」

「ナノサイズのブラックホールを創ってあなたの呼吸に合わせて体内に放り込んだ。そして膨張させて爆発させた」

外が無理なら中から。他の奴なら一つでも消滅するレベルだと思うんだが、本当に中也硬いな。

「成る程。油断した」

そうこう言ってる間に要の肉体は完全に再生していた。本当に吸血鬼も真っ青な回復力だ。

「いいもんを見せてもらった礼に、奥の手をお見せしよう」

「じゃあ見せてもらおう」

「んん、ほいつ!!」

要が手をかざすと、そこに水晶で出来た剣が現れた。

「水晶魔剣、そう名付けてみた」

「かなりの魔力を感じるな」

「まあ固有結界だからな」

固有結界!? 固有結界を剣という形に押し込めたって言うのか!?

「以前敵の体内に固有結界を展開させる水晶魔像や、自分に使う水晶魔拳つてのを作ってた。物質化出来ないかと思ってやったら出来た」

結構な時間が掛かったけどな、って笑ってるけど世界を一つの形に収めるなんて並大抵の事じゃないんだぞ。あ、でもORTの固有結界は固有結界であって固有結界でないって聞いた事があるような。

「ちなみにこれで斬ると相手は水晶溪谷に飲み込まれる」

「それは怖いな。でも要って剣技とか使えるのか？」

「使えるはずないだろ。使う時は喧嘩でバットを振る時の感覚で使う」

「なら鈍器の形にしろよ」

「語呂が悪い」

要も技の語呂とか気にするんだな。そんな事を思っていたら要は剣を消してしまった。

「どうしたんだ？」

「見せたる」

「へっ？」

「だから見せたる。もう終わり」

本当に見せるだけかよ！！ そうツツコミを入れようとしたら足元に魔法陣が現れた。もう時間か。

「じゃあな。楽しかった」

「俺もだ。でも結局あんたを超えれなかった」

「まだ時間はあるさ。そうそう、言い忘れてた」

「何を？」

「水晶魔剣を奥の手と言ったな。あれは嘘だ」

「嘘かよ!!」

最後は締まらない終わりになっちまった。

10万アクセス企画 その1（後書き）

もみもみラジオ

椀「皆さんこんにちは、犬走椀です。秋が近くなり、秋の味覚も段々と増えて参りました。皆さんは秋の味覚は何が好きですか？私は梨が好きですね。瑞々しく、シャクシャクとしたあの食感。たまりません。次回はいろいろな作者様のキャラを集めて座談会です。では文さん、お願いします」

文々。ニュース

文「お願いされましょう。今日も元気な文さんですよ。今日のニュースですが、紅魔館が燃えました。火元はパチュリー・ノーレッジさんのロイヤルフレアとみられています。朱い夕焼けの中、紅い屋敷が赤い炎に包まれる姿は幻想的に映ったと通りがかった普通の魔法使いさんは証言しています。ちなみに屋敷は一部損傷程度の被害だったそうです。全焼でなくて良かったですね。では次回もお楽しみに」

10万アクセス企画 その2（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「今回は座談会よ。叶ちゃん、注意事項をお願い」

叶「了解。この座談会には以下の成分が含まれています」

- ・多重コラボ
- ・台本書き
- ・グダグダ
- ・無ネタ

叶「これらが苦手な人は次回からの本編をお楽しみに」

アリサ「それではどうぞ」

10万アクセス企画 その2

久遠「れでいーすえーんどじえんとるめーん！！ 始めました座談会！！」

要「久遠、久しぶりの本編だからって自重しような」

久遠「自重は世界を壊すって偉い人が言ってた」

要「誰も言っていないだろ。それよりも今回出演するキャラ紹介をしないとな」

久遠「そうだね。今週のケン○ンの皆様です！！」

『ワーーーーッ！！』

要「今週でもないしケン○ンでもない。お前も乗るんじゃない」

久遠「では最初に秋代様より、要が潰したい相手の一人。最凶の死徒。アキラ・シュヴァイツァーです！！」

アキラ「こんにちは、アキラです。今回はよろしく」

要「ああ、よろしく。そのうち潰すからな」

アキラ「今の君の全力なら可能じゃないか」

要「さてな」

久遠「次は黎音様より、モフツちゃやくよ。ゼフィリス・エーデルフェルトです！！」

ゼフィリス「久遠を……モフれないだと……？」

要「お前もキャラ崩壊が激しい……いや、正常か」

久遠「さあ次だよ」

要「ゼフィリスのボケを受け止めてやれ」

久遠「次は海人様より、結局あんたもエリオでしょう。不破飛翔です！！」

飛翔「どうしてそんな説明になった。間違ってないがおかしいだろ」

要「今日の久遠はいつもと違うから諦めろ」

飛翔「今のうちにどうにかした方がいいぞ。初登場のキャラが久遠をこんなキャラだと思ってしまう」

要「でもなあ」

久遠「次は灰音様より、変なの！ リッゴーなんちゃら！！」

リッゴー「なんだその酷い紹介は！？ いくら名前が長いからって省略すんな！！」

久遠「此処では私が紙だ！！」

要「誤字だぞ。修正ちゃんとやれ。わざと残してもネタにはならん」

久遠「次は雪月花様より、木の股から生まれるを体现した人。シン・ガロードです!!」

シノン「ディセNDERだから間違っではないけどさ、木の股はないだろ」

要「分からない人はTOWについて調べるといい」

久遠「次は橘 潤様より、貴様のような男がいるか!! 月影凜です!!」

凜「どこからツツコめばいいの」

要「知らんよ。元女だからしょうがないだろ」

凜「好きで男になったわけじゃないよ」

久遠「次はバルディッシュ様より、アグレッシヴな水の精!! ウンディーネです!!」

ウンディーネ「今日の久遠はどうしたのだ。ここまでくると流石におかしいぞ」

久遠「何が?」

ウンディーネ「これは分かっているのか」

久遠「次は249様より、ヤンキー。長瀬陽です!!」

陽「簡略過ぎんだろ！！ もうちょっとマシな説明しろ！！」

リッゴー「俺よりマシだろ！！」

要「争うなよ」

久遠「次はぱっつあん様より、死を貫く神の魔弾！！ シキ・K・アスタロトです！！」

シキ「何故か真面目な紹介になった気もするんだが」

要「今日の久遠の考えは本当にさっぱりだ。 出番があるってのはそこまで嬉しいのか」

久遠「こっから初登場キャラ達だよ。 まずはRain様より、胃痛仲間が増えるよ。 やったね要。 トーマ・ミグラシオンです！！」

トーマ「初めまして、よろしく」

要「なんだ、胃痛か。 気を付ける。 ここにいと悪化する可能性がある」

トーマ「さっきから見てて何となく理由が分かるよ」

久遠「次は時空の旅人様より、要の弟子みたい。 神威です！！」

神威「みたいって何？」

要「だったらもうちつと強くなれ」

久遠「次は松上様より、愉快的死人。新井諒です!!」

諒「死んでないから!! 生き返ったからノーカンだから!!」

要「お前も来たのか」

久遠「次は十六夜アミナ様より、まだなんとも言えない女性。カレン・フツケバインです!!」

カレン「よろしくお願いします」

要「まだ数話だから久遠も何も言えんか」

久遠「次は毬藻様より、シスコン。規月葵です!!」

葵「別に僕はシスコンじゃないからね」

久遠「諒もシスコンだよな」

諒「こつちに振るな!!」

久遠「次は畏無様より、師匠の強さに弟子が泣いた!! 遠坂霧夜です!!」

霧夜「確かに何度も泣かされたな。容赦ないもんな」

久遠「最後はレティウス様より、特に言う事なし!! 赤羽紅那岐です!!」

紅那岐「その言う事なしってのはどういう意味なんだ？」

久遠「さあ以上が今回のメンバーです」

紅那岐「無視！？」

要「どうするんだ？ テーマとかがあるわけでもなし、また適当にそれぞれが会話してもらおうか？」

久遠「それが一番楽だよ。じゃあ解散！！」

要「解散したら駄目だろう」

~~~~~

トーマ「隣いいかな？」

神威「どうぞ」

トーマ「君は要さんの弟子なんだな」

霧夜「こっちもそうだな。修行がキツいのなんの」

トーマ「俺もシキさんに鍛えてもらったな」

アキラ「ならみんな強いのかな？」

リッゴー「あんたは出るな。この出演者の中でもトップクラスだろ」

カレン「強いんだ」

アキラ「どう思う？」

カレン「私は強いとかよく分かんないかな」

リッゴー「強いとかの問題じゃないな」

霧夜「俺は話に聞いた事があるけど、少なくとも戦いたくないな」

神威「師匠のライバルだもんな」

〃  
〃  
〃

陽「おう、元気なさそうだな」

葵「元気がないわけじゃないですけど、何を話せばいいか」

凜「難しく考える必要はないよ。このメンバーだと何でも話せるから」

葵「何でもか。そう考えると逆に悩むな」

陽「人間そんなもんだって。人間じゃないのがこの場には沢山いるけどな」

ゼフィリス「わざわざ私の方を見て言わないでもらおうか。振らないでくれ」

凜「ああ、納得かも」

葵「ゼフィリスさんは人間じゃないですか？」

ゼフィリス「いや、人間だ」

飛翔「人間だったのか!？」

ゼフィリス「飛翔までか。スペックは違うが人間だぞ」

飛翔「それは意外だった」

〃〃〃

ウンディーネ「うゝむ」

諒「どうかしたのか？」

ウンディーネ「今回は女性キャラが少ないと思ってな」

シキ「ゲストで女性はウンディーネとカレンとやらだけか」

シノン「別に気にするような事でもないんじゃないか？」

シキ「それは男目線の考えだと思うが」

諒「女性からすれば居辛いのかもって事か」

紅那岐「確かに女が沢山いる中に男がポツンといても寂しいもんな。その逆か」

ウンディーネ「いや、ただの話題振りだ」

紅那岐「違うのかよ」

シノン「下手に馴染めてないよりはいいじゃないか」

シキ「彼女は初登場でもないんだ。むしろ初登場の二人は大丈夫か

？」

諒「楽しんでるよ」

紅那岐「つかそれは主催者が心配すべき事じゃないか」

久遠「そんな事いちいち気にしてられないよ。気にしたら負けだよ」

要「気にしなさい」

~~~~~

久遠「終わりました！！ あんまり会話に出れなかったキャラも、特徴が出せなかったキャラも、恨むなら作者を恨め！！」

要「最後くらいは真面目にやろうな」

久遠「はい。皆さんわざわざお疲れ様でした。これからもチートじゃ済まないをよろしくお願いします」

アキラ「普通になられるとそれはそれでね」

ゼフィリス「ああ、違和感があるな」

飛翔「おかしい方に慣れたからな」

リッゴー「とりあえずお疲れさん」

シノン「こういう機会はあるまいよな」

凜「時間もないからね。難しいよ」

ウンディーネ「そういうのでも集まるのが座談会だ」

陽「まあ今回は短かったけどよ」

シキ「そういうのは思っても言うものでないだろう」

トーマ「初めてだから長さが分からないな」

神威「確かにそうかもしれない」

諒「16人が多いか少ないかも分からないし」

カレン「また来てみればいい」

葵「機会があれば来るかも」

霧夜「座談会じゃなくてもコラボすれば会えるよな」

紅那岐「いろいろ集まるのは座談会だけだろ」

要「では改めて、チートじゃ済まないをこれからもよろしく願います」

10万アクセス企画 その2（後書き）

もみもみラジオ

椛「皆さんこんにちは、犬走椛です。最近思うのですが、きのこの山とたけのこの里はどうして対立するのでしょうか？ どちらも美味しいのに」

雨「分かってないな。きのこの山こそ究極の逸品よ！！」

文「これだからきのこ厨は。たけのこの里のチョコとビスケットのハーモニー、あれこそ至高！！」

椛「お二人はお帰り下さい。でも私はブラックサンダーが好きです。ホワイトチョコの一口大のちびサンダーがマイブームです。では文さんは仕事をお願いします」

文々。ニュース

文「全く、きのこ脳は……………あ、どうも、射命丸文です。今回のニュースは特にないですね。幻想郷はいつもほのぼのしていますか

ら。よく異変が取り上げられますが、異変だって毎日起こっているわけではないですし。では次回もお楽しみに」

ラクール武具大会……その前に（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「今回からはラクール武具大会」

叶「その前の準備とオマケだね」

アリサ「準備はまだまだあるんだけど」

叶「クロード編だけならこれでいいんだけど、レナ編もやらないといけないもんね」

アリサ「では本編どうぞ」

ラクール武具大会……その前に

クロードside

リングでプリシスとボーマンさんを仲間にしてラクール王国へ向かった。遠くから見てもわかるくらいにラクール王国は大きく、立派だった。

「このエネルギーシユな都会の空気！ 美しい街並み！ まさに世界の中心地ですわ！！」

「私もこんな都会は初めてですからワクワクします」

「やっぱりラクールは何度来てもいいよね」

「三人共、本来の目的は」「えっ？」「……なんでもありません」

女性陣の威圧感がハンパないよ。アシュトンもそれに圧されてるし、カナメとボーマンさんは笑ってるだけだし。

「しかし随分賑やかだな。ただ賑やかなだけじゃなくて祭りでもあるみたいだ」

「なんだ、カナメは知らないのか？ ラクール武具大会があるんだよ」

「『ラクール武具大会？』」

「おいおい、カナメだけじゃなくてクロードとレナもか」

なんだかよく分からないけど、僕とカナメとレナ以外は知ってるみたいだ。でもラクールはこの星でもかなり大きな都市だから有名なお祭りなんだろうな。

「じゃあ僕が説明しようか？」

「アシュトンじゃ不安だからセリーヌ頼む」

「酷いよカナメ」

でも悪いけどアシュトンはどこか抜けてそうだって僕も思っちゃってるんだよな。それに説明してもらえるなら誰でも良いし。

「ラクール武具大会とは各地の武芸者が集まって己の武術を競う大会ですわ」

「補足すると武芸者は腕だけ良ければいいってわけでもないの。武具もラクール市内の武具店から選ばなくちゃいけないんだよ」

セリーヌさんとプリシスが説明してくれる。武具は現地調達って事になるのかな？

「理解した。つまりは腕と同時に武具を見極める目も必要なわけか。だから武術大会ではなく武具大会と」

「さっすがカナメ！ 飲み込み早いね！」

確かに腕だけを競うなら同じ武具の方がいい。なかなか考えられて

るんだな。

「更に優しいボーマンさんが教えてやろう。武具大会で優勝するのは選手のみではなくその武具店にも名誉ある事だ」

「そうですね。自分のお店の武具を使って優勝したんですから」

「ああ、その通りだ。だけど店にとってはそんなのは二次、重要なのは優勝により知名度アップなんだよ」

知名度アップ……成る程！ボーマンさんの言いたい事が分かった気がする。

「知名度が上がるって事は客も増える。客が増えるって事は売上が上がる。店にとってこれ以上に有益な事はない」

「だからお店は売上を上げるために今の時期は張り切っているんですね」

「ご名答だクロード。この時期にラクールには最上級の武具が集まる。それを買うのもこれからの旅を有利に進めるのに有効だぞ」

そろそろ古い武具もボロボロになってきて、新しい武具も必要になってきた頃だ。タイミングとしては良かったのかもしれない。

「だけでもまずは王様に会わないといけないよね」

「アシュトンの言う通りだ。僕らの目的はソーサリーグロブの調査なんだから」

ラクール王に会って調査の協力をしてもらう。観光とかはその後でも十分に出来るさ。

……

……

……

…

「残念ですが謁見は出来ません」

「そんな」

城の受付でラクール王の謁見を頼もうとしたら断られてしまった。なんでも武具大会前後は忙しいから会えないらしい。

「誰も会えないんですか？」

「そうですね。でも大会で優勝した人はお褒めの言葉を貰う時に会い出来ます」

優勝ってそんな簡単に出来るはずがないよ。でもそれしか方法がないならやるしかないか。

「武具大会といえば、今回はあのディアスが出るそうじゃないですか」

「ディアスが!？」

「そうですよ。今回の大本命ですよ」

まさかこんなに早くにディアスに会う機会が来るなんて。

「みんな、僕は武具大会に参加したいと思うんだけど」

「クロード？」

「いいと思うよ。あたしもクロードが大会で優勝するの见たいし」

「優勝は大袈裟だよ。でも自分の実力を試したいし、もし運良く優勝出来れば王様に会えるしね」

みんな多少考えたけど快く賛同してくれた。そして受付で参加申し込みをした。

「お名前を」

「クロード・C・ケニーです」

「クロード・C・ケニー様。出身地は？」

「出身地？ あー、えと」

「アーリアです」

出身地を正直に言うわけにもいかず悩んでいるとレナがフォローしてくれた。

「アーリア、と。登録完了です。こちらのバッチをどうぞ」

「ありがとうございます。この後にする事がありますか？」

「武具店に登録して大会開始を待つだけです。大会までは選手やその付き添いの方はホテルが無料になります」

選手ってのは随分と優遇されるんだな。それだけの大会という事なんだろう。まあまずは武具店を探さないといけないな。

………

………

………

…

街の武具市場には凄い数の武具店が並んでいた。こんなにある中からいい武具を探さないといけないのか。

「クロード、どうするよ」

「どうしよう」

「このお店はどうか？ 動きやすそうだよ」

「アシュトン、それ双剣用」

「あ……」

アシュトンみたいにいい武器を見つけても僕に合った物じゃないと使えない。僕に合った物でも悪い武器では使えない。難しいな。

「あれ？ カナメは？」

「そういえばいないわね」

「おい」

「あ、いた。どこに行ってたのさ」

「悪い悪い。クロードに合った武器を探しててよ」

「その様子ですと見つかりましたの？」

「ああ、まずは見てみる」

カナメが見つけたのは極々平凡なお店。特徴がないのが特徴と言ったところだろうか。

「戻ってきたぜ」

「待ってたよ。その金髪の兄ちゃんが選手かい？」

「はい。早速ですけど」

「大会参加装備だろ。ちょっと待ってな」

店主と思われるおばさんが店の奥に行って武具を持って戻ってきた。

「どうだい？」

「剣はいいけど、防具が随分軽装だね」

「これだと一撃でやられてしまいそうですわ」

「いや、僕はこれでいいよ」

「クロード、本当にいいの？」

「ああ」

僕の戦い方は素早く動いて敵の攻撃を当たらないようにするのが前提だ。今まで見たのは重い鎧ばかりでそれが生かせそうになかったけど、これならいける。カナメもそれを考慮してくれたのだろう。

「ありがとよ。じゃあ今からあんたはうち、ナイトウォーカーの登録選手だ」

「はい」

武具店も無事に決まった。今からは武具大会までは自由行動にしよう。

「みんな、今から自由だ。観光するもよし、修行するもよし、武具大会まで好きに過ごそう」

「それは有り難い。俺は出掛けるな」

カナメは真っ先に街の外へと行ってしまった。何をしに行ったんだろう。まあ僕は武具大会までウォーミングアップがてら魔物退治でしようかな。

要side

俺が街を飛び出しやってきたのはリングの聖地。その奥地にあったあの新種の薬草があった場所だ。

「やはり異様だな」

俺が見ているのはあのワームホール。あの時は珍しいとは思わな

かったが、自然に出来たにしては不自然なこれが、もし誰かの手で創られたものとしたら。

「アリストテレス、解析を」

《了解しました。しばしお待ちを》

アリストテレスがワームホールの解析を始める。俺は周囲の探索を

……

「そこにいる奴。何者だ」

「私に気付くか。ただの物好きではないようだな」

巨人の化石の後ろから三対の赤い翼を生やした銀髪の優男が現れる。今までエクスペルで会ったどれよりも強力な力があるようだが、それだけだ。

「貴様、随分変わった玩具を持っているな」

《私の事ですか？ 玩具ではなく道具です》

「変わらんだろ。俺の補助アイテムのくせに」

《これは残念。相棒と言ってくれると思ったのですが》

「言ったら調子乗るだろ」

《言わなくとも調子乗りますよ》

「ハハハハハ、漫才も出来る玩具か。だが性能はなかなかだな」

「だろ？ やらんぞ」

「いらん。だがその穴の解析をされると面倒なのでな。貴様共々破壊させてもらう」

優男が手を振るとワームホールから無数のモンスターが湧いて出た。中には大型のドラゴンやケルベロスといった魔獣の類もわんさかいる。

「さらばだ」

これだけいれば俺なんて瞬殺と思ったのか優男は転移して消えた。

グオオオオオオオオ

ガアアアアアアア

グルルルル

「五月蠅いな。アリストテレス、解析を続ける。雑魚は殺つとく」

《頑張つて下さい。モンスター諸君》

多少は主を応援しろつての。昔はこんなじゃなかったのにどうしてこうなった。

………

………

………

…

ガツガツ　ブチッ

リングの聖地の奥地より咀嚼音が響く。

「ドラゴン美味しいな」

俺が程良く焼いたドラゴンの肉を食っている音だ。モンスターの群れ？　瞬殺してやったよ。

《解析完了しました。やはり人工的なものようです。先ほどの男の魔力も感知しました》

「あれが創ったのか？」

《それは解りません。モンスターを出しまくってくれたお陰で魔力が滅茶苦茶ですから》

あんだけモンスターが出りや魔力が乱れて当然だな。

《それと中を僅かながら解析可能でした》

「内容は？」

《時の流れが止まっており、物体の移動や行動が不可能だったようです》

「だった？」

《このワームホールのせいでその効力が弱まっているようです。またワームホールはいくつかあり、モンスターはそこから入り込んだのかと》

なかなかとんでもない空間だな。行動すら出来ないとは。だがやりようによつては修行に使えるそうだ。

「つてか僅かじゃねえだろ」

《僅かですよ。空間の広さやワームホールが繋がる場所など、解析出来る部分もまだまだあります。空間の性質など大した事はありません》

「そうかい。流石は俺のデバイスだ、と褒めてほしいか？」

《気持ち悪いのでやめて下さい》

んな事分かってらあ。さて、もう少し調査したら帰るか。

「そついや中に入って調査は出来そうか？」

《主なら問題ありません》

ワームホールの時間の流れは止まっているようなもんだから調査は
沢山出来そうだ。

ラクール武具大会……その前に（後書き）

もみもみラジオ

椛「どうも、犬走椛です。台風大変でしたね。皆さんは大丈夫ですか？ 雨季さんの住んでいる地域は大丈夫だったそうです。今回の武具店の名前に使ったナイトウォーカーは、スターオーシャン・セカンドストーリーの漫画とスターオーシャン・ブルースフィアのキラクターデザインをした東まゆみさんの短編集の名前です。そして最後の要さんがやっていた事は雨季さんの思い付きだそうです。では文さん、お願いします」

文々。ニュース

文「皆さんこんにちは、射命丸文です。幻想郷では外の流行り言葉がいろいろ入ってきました。ただ山姥偽也留とはどういう意味でしょう？ では次回もお楽しみに」

ラクール武具大会前 レナ編（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「今回はラクール武具大会前のレナの行動よ」

叶「レナさんは何をしたのかな？」

アリサ「それは見てのお楽しみ」

叶「こんなところで言ったら楽しみがなくなるもんね」

アリサ「では本編どうぞ」

ラクール武具大会前 レナ編

レナ side

ディアスが来ている。それを聞いただけで落ち着きがなくなってきた。一体何をしているのか、もしクロードと戦ったらどうなるのか。

「レナ、何をそんなにそわそわしてるんだい？」

「緊張してるのかも」

「参加するのは僕なんだよ」

「そうよね、ちょっと外に出て落ち着いてくるわ」

みんなに心配させるわけにもいかない。外の空気に当たってこよう。

「それにしても本当に賑やかよね」

戦士同士の本気の戦いを見せ物にする。これってどうなのかしら。クロードは楽しめるなら楽しんだ方がいいって言ってたけど、やっぱり私はそんな簡単には割り切れない。

「はあ……………あら？」

そんな事を考えながら歩いていると街の外れまで来てしまったようだ。そこにポツンと立つ家、それがなんだか気になった。

「失礼します」

私は何かに誘われるようにその家へと入っていった。中には沢山の武具があり、どうやら工房のようだ。お爺さんが剣を打っていて、女の子がそれを見ていた。

「おや、お客さんかね？」

「あ、いえ、たまたま来てしまっただけですから、迷惑なら帰ります」

「よいよい、気が済むまで見ていきなさい」

カーン カーン

お爺さんの打つ剣は凄く綺麗で、完成していなくても名剣と分かるほどだった。

「これは武具大会に？」

「そのつもりじゃが、担い手がいないくての」

「誰にお願いしても使ってくれないんだよ。おじいちゃんの武具は世界一なのに」

武具をよく知らない私でも素晴らしいと感じるほどのものだ。これが使われないなんて勿体ない。

「ならお姉ちゃんが使ってくれる人を探してあげよつか？」

「本当に！？ やったやったー！！」

「よろしいのですかな？」

「勝手に入ってきたお詫びもありますし、この武具は素晴らしいですし」

「それは……ありがとうございます」

「お姉ちゃん早く行こー！」

「そうね」

大会参加者ってどんな所に集まるのかしら？ でも困ったら情報が多い酒場に行くのがいってカナメさんが言ってたから酒場に行ってみましょう。

ディアス side

駄目だな、まともな武具が見つからない。いや、一つだけあったがもう契約されていた。残念だが仕方ない。少し酒場で休むか。

「お願いします、見るだけでもいいですから」

「誰がジジイの作ったもんなんて使えるか!!」

「こんなのより絶対いいもん!!」

「んだとガキヤア!!」

あれはレナ……何をしているんだ。

「そこまでにしておけ」

「ディアス!?!」

「ここは子供の来る場所じゃないぞ、レナ」

「子供じゃないわよ!!」

「なんだあ? お前も俺様の武具を馬鹿にするのか?」

「そんな事はない。ラクールオブラクールと呼ばれていただけあり
いい武具は多かった」

それを聞くと男は満足そうな顔をした。だが男は気づいていないよ
うだ。俺が褒めたのは男が持っている武具ではない。そして過去形
という事にも。

「だがその栄光に浸りすぎたな。刃は曇り、過去の面影などない」

「な、なんだと!?!」

「何故貴様が怒る？ 俺はラクールルの武具を貶しているだけだ。お前の武具ではない」

「くっ……」

「ディアス……」

「なんだレナ」

「この子のお爺さんの武具を見てあげてほしいの」

「お兄ちゃん、お願いします」

……当てもなく探すよりかはいいか。それに街の大抵の武具店は見回ってしまった。良いものである可能性は少ないが見ないよりいいか。

「こつちだよ」

少女の後をついて行くとかなり街外れに来た。こんな場所に武具店などあったのか。

「ここだよ」

ふむ、武具店というよりも鍛冶屋だな。これは期待が出来るかもしれない。

「おじいちゃんただいま!!」

「使ってくれるかもしれない人を見つけてきましたよ!!」

「本当かね？」

「俺だ。だが武具を見てからだ」

「そうですね。これがそうですじゃ」

老人が持ってきた剣を一目見ただけで確信した。これ以上の武具はラクールには存在しないと。

「登録しよう」

「本当！？」

「ああ」

「ありがたや、わしの武具を使ってくれる方が現れるとは」

「俺こそこんな武具に会わせてもらった事を感謝したい。レナも感謝する」

「そんなのいいわよ」

「少しこの武具を借りるぞ。慣れたいからな」

出て行こうと思った時にある事を思い出す。

「レナ、お前がいるという事はクロードも来ているのだな？」

「そうよ」

「そうか……決勝を楽しみにしている」

「えっ？」

最高の状態で相見える事を楽しみにしているぞ、クロード。

ラクール武具大会前 レナ編（後書き）

もみもみラジオ

椀「皆さんこんにちは、犬走椀です。最近はどこかに出掛けたい気がします。水族館なんていいですよ。ただ深海魚は駄目です。怖い。では文さんお願いします」

文々。ニュース

文「お願いされましょう。射命丸文です。幻想郷で美味しいラーメンが流行っています。私も食べましたが非常に美味しかったですね。ちなみに私は塩ラーメンが好きです。皆さんはどうですか？ では次回もお楽しみに」

ラクール武具大会 前編（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「美味しいカレーの作り方でテストで点は貰えるのかしら？」

叶「よく聞く話だね。本当にあったのかな？」

アリサ「それは誰にも分からない。とりあえず武具大会前編ね」

叶「では本編どうぞ」

ラクール武具大会 前編

カナメside

あのワームホールの調査が済んでも武具大会はまだ始まっていなかった。まあ数日も適当に過ごしていたら始まったからいいんだけどな。この大会、どうなるか。

「いっぱい人がいるよ。こんなに人が集まってるの初めて見たよ」

「アシュトンったら子供みたいだね。まああたしも親父に数回連れてきてもらったくらいだから興奮してるけどさ」

「相変わらず人気だな。俺も学生時代は何度も来たもんだ」

「クロード、負けたらお仕置きですわよ」

「それは怖いな。頑張るよ」

全員がワイワイとしている中、レナだけが心配そうな顔をしていた。

「クロードとディアスは戦うのかね」

「へっ？ な、何を言ってるんですか!？」

「何をそんなに慌てるんだ？ ん？」

「あ、えと」

「別にどつちかを応援しなきゃいけないって決まりはないんだ。そう深く考えるな」

「……はい」

こりやどうなるかな。場合によってはクロードにもレナにも悪影響が出る。が、その逆だって有り得る。俺が考えてもしようがないが、気になるよな。

クロードside

受付に行くと会場入り口まで案内された。その選手専用受付で武具を受け取るみたいだ。

「お名前をお願いします」

「クロード・C・ケニーです」

「クロード・C・ケニー様。武具店ナイトウォーカーに登録されていますね。武具はこちらになります。どうぞ」

「ありがとうございます」

「持ち物を預かります」

「はい」

持ち物を全部預けたところで知ってる声が聞こえてきた。

「俺の武具はまだ届いてないのか？」

「ディアス様は特別に試合開始まで待つようにと」

「ディアス、おじさんの、ギャムジーさんの武器が届いてないの？」

「お前には関係ない」

「関係ないわけじゃない！！ 紹介したのは私よ！！」

ディアスの武器を紹介したのがレナって、一体どういう事なんだ。

「レナ、説明してくれ。なんでディアスの武器を紹介なんてしてるんだ」

「あ……それは」

「やきもちか？ 子供だな」

「なっ！？」

やきもち、いつ僕がそんな……

「俺は武器を探しに行く」

「待ってディアス！」

ディアスを追いかけようとするレナ。そんなレナに対して僕は語気を強めて言った。

「レナ、君はどっちの味方なんだ！ディアスに武具を紹介するなんてどっちに勝ってもらいたいんだよ！！」

「クロード、そんな、酷いわ！！」

「酷いのはどっちだよ」

「……っ！！」

受付から走って出て行くレナ。そんなレナを追いかける事もなく準備をしようとする、みんなの視線を感じた。

「あれはあんまりですわ」

「僕もあれはないと思うよ」

「あたしもな。レナが可哀想だよ」

「女性には優しくしないとな。あんなんじゃ嫌われるぞ」

「なんだよ。僕が悪いのかよ」

でも実際に僕に非があるのは分かっている。ただここまで来ると引

けないんだ。

「控え室に行ってくる。みんなは観客席に行っていてくれ」

今は落ち着いていよう。こんな気持ちじゃ勝てない。そういえば力ナメがいなくなっていたな。レナを追いかけたのか？

レナ side

ディアスを追いかけたけど見失ってしまった。ならギラムジーさんを探してどうしてるか聞かないと。

「こっちよね」

ギラムジーさんの工房へ走って向かう。そして工房に入るとギラムジーが倒れていて、女の子、スフィアちゃんが泣いていた。

「どうしたの!？」

「ひっく、おね、ちゃん。おじいちゃんが」

「ギラムジー殿、どうし!？ 何があつた!！」

「ディアス、そんな大きな声を出さないで」

何があったのか知らないけど、スフィアちゃんが怯えちゃうわ。

「スフィアちゃん、お爺ちゃんを治すからね」

「うん」

回復術でギムジーさんの傷を治していく。気絶はしているけど、幸い傷は浅いものばかりだ。

「後はベッドに寝かせておけば大丈夫」

「おねえちゃん、おじいちゃんの剣、変なおじさん達に取られちゃったよ」

「そう。ディアス」

「分かっている。あの剣は下郎には勿体無い」

「行きましょう。スフィアちゃん、取り返しに行ってくるわ」

ギムジーさんの剣を探しに行こうと工房を出ると外にはカナメさんが立っていた。

「どうしているんですか!？」

「気になってな。どうするつもりだ? 闇雲に探しても見つからないぞ」

「ならお前は何処を探せばいいのか分かるのか？」

「そうだな。剣を奪われた理由を考えてみな。理由もなく奪われるなんてないからな」

奪われた理由。多分ディアスが酒場で兵士を挑発したからだと思う。それを考えるとその兵士が盗んだとしか。

「分かったか？」

「しかし犯人が俺らの考えたのとは限らない。それに正解だったとしても何処かは分かっていないぞ」

「そういう馬鹿は行動は決まってる。馬鹿がいた場所に行ってみようか」

それなら酒場ね。手掛かりがないよりはいいわ。

.....

.....

.....

…

酒場に行くと本当にあの兵士がいた。

「ははは、あの爺さんこんな剣作ってやがったとはな」

「綺麗な剣ですよ、兄貴」

「これであのいけ好かない剣士は大会に出れないし、俺は極上の剣を手に入れた。最高だな」

最低な人達ね。懲らしめないとイケないわね。

「貴様ら」

「！ てめえ！！」

「それを返してもらおう」

「はいどうぞ、なんて言うと思ってんのか？ お前ら！！」

『おう！！』

今のディアスは剣を持ってないのに何人も兵士が剣を抜いて立ち向かってきた。

「ディアス、お前は試合があるだろ。下がってろ」

「……お前の實力見せてもらう」

「邪魔するなら誰だろうと容赦しないぜ!!」

ディアスに代わりカナメさんが立ちふさがる。

「馬鹿共、寝てろ」

バタバタバタ

兵士達は何の前触れもなく倒れていく。一体何が起こったの？ カナメさんが何かしたのだろうけど。

「残りはお前だけだ」

「なっ、なっ」

「か弱い老人から物を奪うなど言語道断。まあ強い老人なら良かったけど、なっ!!」

ドゴッ

「ゲブツ!?!」

カナメさんは盗んだ人のお腹を殴って気絶させる。そして剣を取り上げてディアスに渡した。

「さっさと行きな」

「……闘気のみで敵を倒すか」

「自慢だが、俺は並じゃないからな」

「そのようだ。ではなレナ」

「うん」

私も早く行つてクロードに会つて謝らないと。クロードの気持ちをよく考えずに感情だけで飛び出してきちゃったけど、許してもらえるかしら。

ラクール武具大会 前編（後書き）

もみもみラジオ

椀「こんにちは、犬走椀です。最近ハマっているのはコンビニの唐揚げです。安くて美味しいので夕飯のおかずにもなります。本編は試合していませんね。次回はしっかり試合だそうです。では文さん、お願いします」

文々。ニュース

文「交代しました、文です。最近ハマっているのはワインです。幻想郷では紅魔館でぐらいしか手に入りませんが。ニュースは特に…あ、ヤツメウナギが大量発生してみすちーが大儲けをしていますね。では次回もお楽しみに」

ラクール武具大会 後編（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「超お待たせ!!」

叶「新作の方に集中しすぎでしょ」

アリサ「楽しみにしてた人は本当にごめんなさい」

叶「とりあえず見ていつてね」

ラクール武具大会 後編

クロードside

僕が選手控え室で待っていると名前を呼ばれた。出番らしい。僕と、多分対戦相手の選手は控え室を出ると、それぞれ違う方へ案内された。

「この先に進むと戻れません。それでもよろしいですか？」

「はい」

僕は闘技場へと足を踏み入れる。物凄い観客と歓声。地球ではスポーツの大会とかでこれ以上の人数が集まるのはよくあるけど、この星では初めて見る光景。何よりその声援全てが自分と相手の二人だけに向けられているという感覚が不思議でなかった。

（レナは……）

ついついレナがいないか探してしまったが、その姿は見えなかった。

『それでは両者構え！！ 試合開始です！！』

「うおりやああああああ！！」

相手の選手が向かってくる。けど守りを重視したその重い鎧で動きに繊細さがない。

「喰らええ！！」

「当たらないぞ!! バーストナックル!!」

「ぐあっちい!?!」

「そこだあ!!」

ガァン

僕の剣が相手の兜を弾き飛ばした。その衝撃で相手選手は気絶をした。

『そこまでです!! 勝者、クロード選手!!』

「……………勝っちゃった」

ま、まあ勝てればいいんだ。

……
……
……
……

次の試合まで時間があるから観客席で他の試合を見ていよう。

「あ、いたいた。みんな!!」

「クロード！ 勝ち抜けおめでとう!!」

「僕も仲間として嬉しいよ」

「楽勝だったね！ 次も勝つてよ!!」

「本当にいい動きだったぞ」

こうやって祝福されるとくすぐったいな。まだ一回戦突破しただけなのに。

「ありがとう。それで、レナは？ あとカナメ」

「それが二人共まだ「みんな!!」レナ!!」

僕らが話していると噂をすればなんとやらと言わんばかりにレナがやってきた。あとカナメ。

「勝ったんですって？ おめでとう!!」

「圧勝だったそうじゃないか」

「うん、ありがとう」

うおおおおおお

物凄い歓声が聞こえてくる。闘技場にはディアスが上がってきていた。

「クロード、よく見ておけ。あれがお前が決勝戦で戦う相手だ」

「カナメは気が早いな」

でも、もし決勝戦まで行けばディアスと戦う事になるだろう。そうじゃなくてもディアスの動きを見るのは勉強になるだろう。しっかりと見よう。

『それでは試合開始です!!』

「ケイオスソード!!」

「ぬあああああ!!?」

『あ、そ、そこまです!!』

早い。ただの一撃だが無駄が一切ない。まるで剣が自分の一部のようにうだ。

「強い」

僕でも勝てるのか? いや、そもそも戦いになるのか?

「頑張れよ」

「そんな無責任な」

……
……
……
……

二回戦はなんと不戦勝。なんでも僕が一回戦に勝った相手に去年完敗した人らしく、僕がその人を簡単に倒してしまったので諦めたらしい。体力温存が出来るから運が良かった。

「クロード選手、次の試合の準備をして下さい」

「分かりました」

今回勝てば決勝戦だ。気合いを入れていこう。

『準決勝です！！ 勝つのは新人のクロード選手か、ベテランのウオーゼ選手か！？』

相手はかなり大柄な男。武器を持ってないところから見るとカナメやボーマンさんと同じ格闘家か。

「坊主には悪いが俺が勝つぞ」

「戦う前から勝負を決めないでくれ」

『試合開始です!!』

「又ウン!!」

相手が殴りかかってくる。体系のわりには素早い。そして相手の拳が地面に当たると地面がへこんだ。

「すばしっこいな」

「そっちが遅いんだよ! 流星掌!!」

「効かんなあ!!」

流星掌で飛ばした気の拳が簡単に碎かれる。やっぱり力じゃ勝てないよな。

「フンツ!! せえい!!」

「……………」

「いい加減に当たれい!!」

僕が避け続けると相手がしびれを切らして大技を使おうとする。

「そこだ!! 爆裂破!!」

その隙を見て僕は地面に剣を叩きつける。すると地面が盛り上がり、相手を吹き飛ばした。

「ぐぬっ!？」

「僕の勝ちだ」

僕は飛んで壁にぶつかった相手に剣を突きつけた。

『そこまで!!』

遂に次は決勝戦か。

――

準決勝から決勝戦までの時間はそこまでないからすぐに闘技場入り口へと向かった。

「ディアス……」

「クロードか。ここまで登り詰めてきたか」

「ああ」

「決勝戦、楽しみにしているぞ」

「僕もだ。全力で倒しにかかる」

「フッ」

互いに背を向けて歩き出す。油断は絶対にしない。僕の全てをぶつけてやる。

「クロード選手、お待ちしております。準備はよろしいでしょうか？」

「はい」

闘技場に入りディアスが出てくるのを待つ。反対側の入り口からディアスが入ってきて剣を構える。

「貴様の全力とやら見せてもらおう」

「その全力でディアスの本気を引き出してみせる」

『それでは決勝戦……試合開始です!!』

僕ら飛び出して剣をぶつけ合う。ディアスが使っているのは細身の剣なのにその一撃は僕の腕を痺れさせる。

「ケイオスソード!!」

「空破斬!!」

空破斬を剣撃を飛ばさず壁とする事でディアスの剣圧を防ぎきる。

「クロスウェイブ!!」

「今だ!! 兜割り!!」

ディアスの十字の斬撃の上に飛んで避ける。例え地面を抉る攻撃だろうと避けてしまえば意味がない。そして僕はそのままディアスに剣を突き立てようとした。

「甘いな。臆!!」

だがディアスは分かっていたかのように空中に向かって衝撃波を放ってきて僕を打ち落とした。

「つく!!」

「どうした。お前の全力はその程度か？」

「まだだ!!」

無駄な動きはするな。確実に、僅かな隙を見逃すな。隙がないなら作ればいいんだ。

「爆裂破!!」

地面を叩き、地面を隆起させる。準決勝で使ったものとは比べものにならない範囲で攻撃する。ディアスは跳んでそれを避ける。

「流星掌!!」

跳んだディアスに向かって気を飛ばす。

「空破斬!!」

ディアスは空中で放った斬撃で気の拳を切り落とす。だけど空中であんな事をすればバランスが多少なりとも崩れる。そこを狙う。そう思っていたが、ディアスがしたのは予想を遥かに超える事だった。

「ハアアア……」

ディアスが炎を纏って更に飛び上がった!?

「行くぞ。朱雀衝撃波!!」

「やるしかない! 吼竜破!!」

ディアスが纏う炎がまるで不死鳥のようになり向かってくる。僕は闘気で出来た竜の口から気の波動を撃ち放った。だがディアスはそれを貫き、僕に突撃した。

……

……

……

…

………ん。

「クロード!! 大丈夫!？」

「レ、ナ? ……そうか、僕は」

負けたんだ。結局一撃も当てられなかった。

「ごめん、負けちゃった」

「いいのよそんなの。無事で良かったわ」

「それにいい試合だったよ」

「全くだ。さあ準優勝賞品を貰いに行こうぜ」

「準優勝でも貰えるの?」

そんな発言をするとみんなの視線が痛かった。だって知らなかったんだからしょうがないだろ。

「相変わらず騒がしいな」

「ディアス」

「見事だった。本気になったのは久しぶりだった」

短くそう言つとディアスは去っていった。そうか、僕はディアスの本気に出来たのか。

「ああもつ！ あの態度はやっぱり嫌いですわー！」

「まあまあ、いいじゃないですかセリーヌさん。行きましょう」

………

………

………

…

準優勝賞品を貰った後にレナとカナメが行きたい場所があると言いつ出した。

「ここよ。ここにディアスの剣を作ってくれた人がいるわ」

ディアスのあの剣をか。ディアスもそうだったけど剣も凄かったから気になるな。

「こんにちは、ギャムジーさん」

「おや、お嬢さん。それにそっちは準優勝者の」

「こいつに合う剣を作って貰えねえかな？ どうせ謁見出来るまでは暇だしな」

「その必要はないぞい」

工房にいたお爺さんが剣を持ってきた。ディアスの剣に似ているけど、少し違うな。

「これはわしが作っておいたもう一つの剣じゃ。あやつに見せたらお主に合うと言ってな」

「……ありがとうございます」

手にぴったりと吸い付くようだ。外に出て軽く振るとその素晴らしさが分かる。

「お爺さん！ 凄くいいですよ！！」

「それは良かった」

よし、それじゃあ先に進むとしよう。

ラクール武具大会 後編（後書き）

もみもみラジオ

椀「皆さんこんにちは、犬走椀です。今日から三連休。皆さんはどうやって過ごしますか？ 楽しく健康に過ごして下さいね。では文さんどうぞ」

文々。ニュース

文「どうも、文です。さてニュースですね。幻想郷では食玩とやらがブームです。食玩は卵型のチョコに入っているのですが、あれ食べる部分少ないですね。では次回もお楽しみに」

謁見？ いいえ違います（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「この作品は週一更新になりました」

叶「えっ!？」

アリサ「やる気があるともっと早くなるとか」

叶「作者やる気だせ!！」

アリサ「短いけど見ていつてね」

謁見？ いいえ違います

要side

武具大会が終わったんだが、まだ数日は謁見が出来ないらしい。その期間もよく分からんし、どうしたものか。

「……」

「どうしたのレナ。悩み事？」

「大した事じゃないんだけど、お母さん達どうしてるかなと思って」

「ははあん、ホームシックってわけだ」

「そう、ですかね」

「恥ずかしがる事はないぞ。初めての旅なんだから。むしろ今まで大丈夫だったのが偉い」

しかしこれはある意味いい機会かもしれないな。時間はあるんだし、アーリアまで行ってもいいだろう。

「なら帰るか」

「えっ、でも」

「みんなも別にいいだろう？」

「そうだね。アーリアに行きたいね」

「構いませんわ」

「僕もいいと思うよ」

「謁見はいつか分かんないしね」

「クロス大陸か。久しぶりだな」

「なら全員賛成だな」

「みんなありがとう」

レナは普段我慢しがちだからこういつ時くらい我が儘言わないとな。

………

………

………

………

港に着いたはいいが、クロス大陸行きの船までは時間があるか。何

をしようか。

「あ、そういえば酒が切れてたな」

「カナメも好きだよな」

「プリシスも大人になれば分かるって。なあ、アシュトン、ボーマン」

「僕は賛同出来ないな」

「酒の旨さが大人になれば分かるというのは理解出来るが、お前の量は異常だぞ。医者として見てもお前が健康なのが不思議だ」

そんなに言われるとは。自分でも飲み過ぎというのは分かってるが止められないんだよ。完全に中毒だな。

「……行ってくる」

「そう落ち込まないでよ」

「みんなやる事がないだろうから付き合っよ」

優しさが痛いな。

.....

.....

.....

...

酒場の中ではいつも以上の酒の匂い、そして泥酔している奴らが沢山いた。その光景に流石に全員固まった。

「店長、何があっただ？」

「ああ、あそこの女性が飲み比べをしているのですよ」

そこには大量の酒を飲み干している女がいた。対決していた男は泥酔して寝てしまった。しかしあの女、三つ目だな。

「これじゃあ情報は聞けないわね」

「なかなかいい飲みっぷりだな」

「あら、貴方も付き合ってくれるのかしら？」

「とりあえずあんたは何の情報を探してるんだ？ それからだ」

「私と同じ三つ目の男を探しているの」

「なんだエルネストか。店長、ワイン一本」

「そう、エルネスト。……………ってなんで貴方がエルネストを知ってるのよ!？」

いきなり大声を出さないでくれ。驚いたろうが。

「酒を呑み合った仲間だ」

「カナメ、それっていつ？」

「クロスで」

「あの時に…………じゃあ朝から呑んでたんですね」

いけね。秘密にしてたのに言っちゃった。しょうがないか。

「クロスでエルに会ったのね!! ありがとう!!」

「待て待て、今でもいるとは限らないぞ」

「それでも情報はそれしかないのよ」

「なら俺らと一緒に来い。俺らは世界中を旅してる。会う可能性は高い。あ、みんな悪い。勝手に言っちゃって」

「僕はいいよ。彼女に聞いてみたい事もあるし」

クロードが聞きたい事か。多分だが女が違つ星から来ている事だろう。エルネストと同じならテトラなんちゃらって星から来たんだろう。

「他のみんなは、大丈夫そうだな」

「うん（ええ）（ああ）」

「ならお願いするわ。私はオペラ・ベクトラ。よろしくね」

クロード side

船の上、僕はさっきの女性、オペラさんの所へと向かっていた。

「すみません、オペラさん。少しお話がしたいんですが」

「確か、クロードだったわよね。何か用かしら？」

「貴女は別の星の人ですよね」

額にある三つ目。これはテトラジェネスの特徴だ。テトラジェネスの科学力は地球並かそれ以上。だから違う星にいてもおかしくはない。だけどここは未開惑星だ。

「違う星から来たとしたら？」

「未開惑星保護条約に違反しています。知らない訳でないでしょう」

「貴方は地球の、銀河連邦の人間だったのね。なら銀河連邦はこの星の調査に来ているの？」

「質問はこつちが先なんですが、僕は事故ですよ。それで貴女はどうなんです？」

「……さっきのカナメとの会話で出たエルネストという名が出たのを覚えているかしら？」

「はい」

「彼は私の片思いの人なの。彼は考古学者で様々な星の遺跡を探索してきたわ。私はそれについて歩いた。そして今回も。貴方には分かるかしら？ 大切な人のために何かをするという事を」

「……はあ、仕方ないか。今の僕に彼女をどうこうする権限があるわけでもないし。」

「あんまりやりすぎると見過ごせませんからね」

「分かってるわ」

なんだか新しい問題が増えた気がするな。

謁見？　いいえ違います（後書き）

もみもみラジオ

椀「皆さんこんにちは、犬走椀です。この時期は。。。の秋というフリーズが言われる時期ですね。恥ずかしながら私は食欲の秋です。では文さんお願いします」

文々。ニュース

文「私はゴシップの秋。どうも文です。昨日栗饅頭を食べました。美味しいですね。秋というと秋姉妹ですが、真後ろに冬が迫ってるのに気付いてないんですね。では次回もお楽しみに」

再び山岳宮殿（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「一週間過ぎてるわね」

叶「モチベーションをこれから上げるそつだよ」

アリサ「なら次回は早くなるわね」

叶「どうだろ」

アリサ「不安ね。では次回もお楽しみに」

再び山岳宮殿

要side

レナが自分よりもオペラを優先してくれと言うものだからクロス王国へとやってきた。

「いいな、久しぶりのクロスは」

「カナメでもそう思うんだ」

「クロード、それはどういう事だ？」

「カナメって酒場があればいいって感じがするからさ」

「そこまで節操なしじゃない」

確かに酒場があるのは重要だが、更に重要なのは街の雰囲気だ。クロスは発展していながらもラクールのように急いでいない。そんな雰囲気がいい。

「まずは王様に会わないと。もしかしたらエルネストさんは王様に会ってるかも」

「エルネストって人は考古学者なんだよね」

「そうよプリシス。エルは古い遺跡の発掘なんかを個人でやってるわ」

「ここいらで古い遺跡つてなると」

「アシュトンの時に行った山岳宮殿ではないかしら」

「懐かしいですね。あそこに入るには王様の許可が必要ですからエルネストさんは行ってるはずですよ」

話が纏まると次は行動。早速クロス王に会いに行くとしようか。

………

………

………

…

クロス城へ行くと、もう当たり前かのように謁見の間へ通された。

「おお、そなたらか。噂は聞いておるぞ」

「噂ですか？」

「クロードは武具大会で準優勝したそうではないか」

「もうご存知でしたか」

情報つてのは世間を駆け巡るのが本当に早い。文明がそこまで発展していないこの世界でこれだからな。

「王様、今日はその報告ではないのです」

「ならばセリーヌがうちのドラ息子に会いに来てくれたか？ それなら直接行けば良からう。早く孫の顔が見たいからな」

「そ、そんな／＼／＼」

セリーヌ、照れるな。そしてクロス王はわざとやってるだろ。若者をからかうのは面白いけどよ。

「王様、聞きたいのは三つ目の男性についてです」

「三つ目。その女性のようなか？」

「初めまして王様。私はオペラ・ベクトラと申します。三つ目の男性は私の友人でして」

「ふむ。確か数日前に謁見に来たな。山岳宮殿へ入る許可を取りにな」

「それでは」

「お主らはその権利は既に持つておろう。自由に行くがよい」

『ありがとうございます』

全員で感謝してから謁見の間を出て行く時にクロス王がポツリと「孫が見たいの」と呟いたのは気にしない方向で行こう。

オペラ side

この宮殿ね。確かにエルが好みそうな場所だね。

「さあ行くぞ」

クロードを先頭に宮殿の中を進む。宮殿の中は迷路のように入り組んでいたが、エルを追って遺跡に潜っていた私にはそんなに難しいものでもない。

「ガアアアアー!!」

「邪魔よ、フレイムランチャー!!」

飛び出してきたモンスターを自慢の紋章銃から出た炎で焼き払う。

「何それ凄い!! 見せて見せて!!」

「また後でね、プリシス」

プリシスはこういう機械類が好きなのね。あの無人くんってロボットから分かってたけど、あの科学力はこの星のレベルじゃないわよ。

「これは……」

「ボーマンさん、何か見つけました？」

「おう。この焦げ後見てみる。まだ新しい」

「この壁も崩された感じだな。爆弾でも使ったのか？」

「エルかもしれないわ。急ぎましょう」

私は崩された壁の先にある階段を下る。少し進むと広間があり、大きな赤いトカゲが数匹倒れていた。

「一体誰が」

「エルね。傷口から見る限り、A P I 3 プラズマランチャー、ファ
イアフライの一撃かしら」

「完璧に違法じゃないですか」

クロードとそんな話をしているとみんなもやってきた。

「うわ、すごい」

「既にやられてたみたいだな。まあ事切れてはいないようだが」

カナメのその言葉に全員が警戒する。当然だ。もう死んでいると思
っていたのだから。

「どどどど、どうするの!？」

「慌てるなアシュトン。起きる前に仕留めればいい」

そう言つてカナメはトカゲに近付き、一匹一匹、確実に首をへし折
つていった。まるで鶏を絞めるように丁寧に、淡々と。

「おし、終わり」

「彼、どこであんな技術を？」

「知りませんが、カナメさんですから」

「僕もレナに同意見かな」

「私達もすっかりカナメに毒されてしまいましたわね」

「私だって最初は驚いたけど慣れちゃった」

「僕はまだ慣れないよ。ああ、心臓に悪い」

「ストレス緩和の薬草でも擦ってやろうか？」

人間が慣れる生き物というのを実感したわ。

………

………

………

…

宮殿の奥に明らかに最近まで人が住んでいた場所があった。大量の本や研究器具が並んでいる。

「王様の部屋、ではないな。研究者の部屋か」

「そうね」

ただど放置されて数日ってところかしら。彼は籠もるタイプだからもう帰ってこないでしょう。

「ハズレかあゝ」

「ならどうしよう」

「アーリアに行く、だろ。それが当初の目的なんだから」

アーリアは確かあの村よね。ちょうどいいし、あれの確認をしまし
ようか。

再び山岳宮殿（後書き）

もみもみラジオ

椛「皆さんこんにちは、犬走椛です。最近寒さが厳しくなってきましたね。でも私は寒さに強いのです。でもコタツには入ります。コタツにはまだ早いですけど。では次回も……文さんお願いします」

文々。ニュース

文「今忘れられてませんでしたか！？ 悲しいですよ、うう……。では幻想郷のニュースです。ゆつくりが繁殖しています。大発生です。特に一部のゆつくりがウザいのです」

「おお 酷い酷い」

文「……………イラスト。では次回もお楽しみに」

神護の森にある異物（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「やれば出来るじゃない」

叶「次回からコラボをやるみたいだからね」

アリサ「そうなの？」

叶「モチベーションを上げるためだって。読者様には迷惑を掛けるね」

アリサ「本当に。では本編どうぞ」

神護の森にある異物

レナ side

ん、故郷^{アーリア}はやっぱり落ち着く。しばらく離れていたから余計にそう感じるのかも。

「レナ!!」

「お母さん!! ただいま!!」

「どうしたのよいきなり、驚いたわ」

「少し時間が出来たからカナメさんの提案で来たの。まだ旅は続けるけど、いろいろあったのよ」

「そう。皆さん、ようこそアーリアへ。何もない村ですがゆつくりしていつて下さい」

わざわざ何もないなんて言わなくてもいいのに。神護の森って立派な自然があるじゃない。

「なら解散でいいかな。僕も村のみんなに挨拶したいから」

「クロードに賛成だ。アーリアもある種、俺らの故郷だからな」

クロードとカナメさんの言葉を聞いてなんだか嬉しく思う。二人にとってはアーリアは第二の故郷なんだ。

「じゃな」

カナメさんが先に歩き出すとみんなもそれぞれ移動していった。私も一旦お母さんと家に帰る事にした。

……

……

……

…

これまでの旅の話をお母さんにしていると、お母さんはお世話になつてるみんなに夕食を作るって言つて出掛けちゃった。張り切つて作りすぎないといいんだけど。

「どうしようかしら」

お母さんが戻ってくるまで時間はある。お母さんの手伝いをしてもいいけど、久しぶりのアーリアを歩くのもいいわね。神護の森に行くのもありかしら。

「あら？ オペラさん！！」

「レナ、どうかした？」

「オペラさんこそ何をしてるんです」

オペラさんは村長の家のテラスから神護の森を眺めていた。なんだから風景を楽しむって雰囲気じゃなかったけど。

「神護の森に何かあるんですか？」

「まあ、あると言えばあるわ」

「なら行きましょうよ」

「えっ、でも」

「すぐ近くじゃないですか。みんなも呼んできますね」

何があるか気になるし、時間が潰せるかもしれない。まさに一石二鳥ね。

神護の森に何かがあるらしく、全員で見に行く事になった。ただオペラのとなると……

「カナメ」

「どしたクロード」

「オペラさんの言ってたのって」

「お前も結論が出たみたいだな。みんなにはなんと言つか」

そんなこんな言ってる間に着いたのは神護の森の奥。俺らが始めてレナに出会った場所だ。今となっては懐かしい。

「気持ち良い場所ですわね」

「ギャフツ」

「フギヤツ」

「ギョロとウルルンも最高だ、って言ってるよ」

「！ あれ何なの！？」

プリシスが森の木々を掻き分けて奥へ進む。どうやら何かを見つけたらしい。プリシスの後ろを追い掛けると、どう見てもこの星に似合わない乗り物、宇宙船があった。

「なんだこりゃ」

「これ凄いよ！！　なんて言っていていいか分からないけど、とにかく凄いよ！！」

プリシスは流石メカ娘。すぐに食いついたな。他の、俺とクロードとオペラを除いたみんなは驚くというか呆然としている。

「これが、オペラさんの言ってた」

「そうよ」

説明はするのかね。説明するとしたら俺らもフォーローに回るべきか。

「プリシス、危ないよ」

「大丈夫だって。アシュトンには恐がりだなあ」

「だが変なのを触るのはおじさんも感心しないな」

「ボーマンまでえ。オペラ、紋章銃貸して」

「いいわよ」

プリシスがさつきから宇宙船でずっと機械弄りをしていると思ったら、今度は紋章銃を要求するか。何をするのか全員が覗き込んだ。

「早いですわね。手捌きが早くて何をしているのかさっぱりですわ」

「よく見えても理解出来ないから意味ないと思うがな。プリシスは昔っからこうだ」

「プリシスの昔か。どんなだったんだろ」

「出来た！！」

どんなものが出来たのか。紋章銃自体の見た目は変わっていないよ
うだからソフトが変わったのか。

「中身は大分変わったはずだよ」

「へえ。確かに違うわ」

「オペラさんは分かるの？」

「自分の武器よ。分かりやすく言うならワインの違いが分かるようなものね」

「それ分かりやすいかな？」

俺には分かるが、他に表現するなら肉まんの中身が分かるようなものか。とりあえずこれで話題は逸れた。更にずらすか。

「レナ、ウェスタさんが買い物していたようだが」

「そういえばお母さんがみんなのために料理作ってるんだったわ」

「この人数だと大変だろう。手伝うか」

「そうですね。オペラさん、あれは」

「もういいわ。プリシスが弄り回して使い物にならないでしょうし」

「ひどっ！！」

――

ウエスタさんは既に大量の飯を作っていた。相変わらず手早い。

「さあ皆さん、遠慮せずにどうぞ」

「美味しそうですね。料理習おうかしら」

「愛しの王子様のため？」

「カナメ、からかわないで下さる？」

「そりやすまん」

「いやしかし美味そうだ。まあニーネが一番だが」

「自分の奥さんと比べたらいけませんよ」

「妻の飯が一番なのは誰でもだつて。俺もだし」

『あはははは、はあっ!?!』

全員が有り得ないものを見るような目で俺を見てくる。俺に妻がいるのって不自然か？

「カナメさんって既婚者だったんだ」

「まあな」

「奥さんは心配しないのか？」

「ボーマンとこと一緒に理解があるからな」

理解があるというよりは諦めてるといっ方が正しいかもしれん。この後、食事中もずっと質問攻めを食らった。

神護の森にある異物（後書き）

もみもみラジオ

椛「皆さんこんにちは、犬走椛です。前書きでも言っていたように次回はコラボです。三回ありますからご了承下さい。最初はナガン様となります。では文さん、お願いします」

文々。ニュース

文「zzzz……はひっ？ 仕事？ 久しぶりに早くて準備なんて出来ませんよ。私は寝ます。職務怠慢？ 文句は作者に。では次回もお楽しみに」

番外・最近は魔女も修行をする時代か……（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「コラボですって」

叶「うん知ってる」

アリサ「とりあえず初めての人とだからやりにくかったって」

叶「慣れてないからね」

アリサ「本編とは関係ないから本編が見たかった人はバック。ではどうぞ」

番外・最近は魔女も修行をする時代か……

要side

平原だ。突然なんじゃらほいって人もいるかもしれないから言うが、また神様に飛ばされての世界移動だよ。俺の役割ってなんだよ。

『修行を付ける事だよ』

「そんな役割は嫌です、神様」

『まあまあ、そんな事は言わないで。今回は魔女に修行をしてあげてね』

魔女って、魔女なら魔女らしく魔法使いの所へ行けよ。俺も魔導師ではあるが、教えられる事なんて無いに等しいぞ。

『もう来るから』

「ひゃあっ!？」

落ちてきたな。見た目は黒い初音ミクみたいだな。これが魔女か。

「神様も落とすのが好きですね」

『人間は反応が面白いんだよ。特に落とした時は』

「でも魔女でしょう」

「同じだよ」

「あたしを無視すんな!!」

「ああ、すまん」

しっかしあれだな。俺を相手に修行するだの模擬戦するだの、俺はお前らの訓練道具じゃねえ。

「ちやつちやと済ませるぞ」

「ちよつと待つてよ。あたしは無理矢理連れてこられたんだけど」

「……神様？」

『要くん怒らないで。だって彼女が強くなりたいとか呟くからいけないんだよ』

明らかにあんたがいけないんだよ。全く、やる必要すらないな。

「今すぐこいつと俺を元の世界に帰して下さい」

「せつかくだからやる」

「おい、いいのかよ」

「あんた強そうだし、腕試しにいいかなってさ」

「ならやってやるよ。俺は一条要だ。お前は？」

「時音みきよ」

みきside

あたしが愛用している仕込み刀を構えると要つてのは眉を顰めていた。

「そのふざけた武器はなんだ？ 重心で刀なのは分かるが」

「形なんて関係ないでしょ」

「やる気が削がれるだけだ。水晶魔剣」

水晶で出来た剣ね。魔力がとてつもなく高い。どんな剣技を使ってくるのか。

「フンッ!!」

「!？」

気がつけば後ろに要がいて剣を振り下ろしてきていた。ただ単に力一杯攻撃しているだけで技も何もない。それをギリギリ避けると剣は地面を斬り裂き、更に斬れた場所は水晶になっていた。

「これくらい避けてもらわないとな」

「その剣何!？」

「触ったら水晶になる。相手を捕まえる時に便利だぞ」

「捕まえるじゃなくて殺すじゃないの？」

「殺すのも可能だ」

どうであれ厄介な武器だ。防御出来ないから避けるしかない。

「しかし速かったね。見えなかったよ」

「実は全力で走った。能力も解放してな」

「それだけの相手と見てくれたと思ってもいい？」

「どうか。だがこっちも全力でやらないとそっちも全力出さないだろう？」

当然。相手がやる気ないのに自分ばかり本気でやるのはやるせないもんね。

「ならあたしもいろいろやらせてもらっわ」

あたしは結界を創る。時計がいくつも浮かぶあたしの世界。

「そら」

「効かない」

結界内の時計が盾となって水晶の剣を防ぐ。あたしはその瞬間に要の後ろに回って刀で斬りかかった。

「武装・O R T」

ガキン

腕が変わった！？ 刀でも斬れないし、人なのこいつ！？

「ステインガー・ザ・ハンズ！！」

時計の長針や短針、秒針が飛んでいく。接近戦では分が悪そうだから遠距離で攻める。

「ニードルマシンガン」

要はそれを針のような魔力弾で撃ち落とす。そして撃ち落とし切れなかったものは素手で砕いていく。

「大体分かった」

「？ 何が」

「お前の実力。これから修行をしてやる」

思い出すとあたしが強くなりたいて言っただからこうなったんだっけ？ 実力が分かったなら教えてもらおうかしら。

「あたしの欠点は？」

「言っていないのか？」

「当然でしょ」

「全部」

「ぜ、全部？」

「ちなみに長所も全部」

それって平凡って事じゃないの。そんなはつきり言う？

「お前は全体的に強いオールラウンダーなんだが、何か特別なものが欲しいな」

「使わなかったけど、時空間を司る程度の能力ってのがあるのよ」

「なんで使わなかったんだ？」

「まだ上手く使えないのよ」

これは元々あたしの能力じゃないから、上手く使えなくてしょうがないのよね。

「……………」

「どうしたの？ 急に黙り込んで」

「その能力以外は？」

「特には」

「ならそれを鍛えるしかないな」

つまらない答え。妥当なんだけど、こう、すぐに効果があるようなものはないの。

「じゃあなんか技教えてよ」

「技？ 俺には大層な技なんてないぞ。魔法はデバイスに、戦闘はORTに頼りつきりだからな」

「そっいえばORTって？」

「とんでも生物」

なんかはぐらかされた感じ。でもそれって戦いは自分の実力じゃないって言ってるように見えるけど。

「それでも多少はあるでしょう？」

「ふむ、内臓でどうだ？」

「内科医？」

「相手の体内に直接衝撃を与えて内部から破壊する技だ。見た目は変化ないが、内臓、筋肉、骨、血管とかを壊すぞ」

「ふーん、凄いいけど名前がかっこ悪いね」

「センスの無さに定評のある俺だ。でも剣だと難しいか」

ならあたしに合いそうなのないじゃん。タイプが違いすぎるのに修

行なんてのが無茶だったのよ。

「お前はどんなのを覚えていたんだよ」

「剣技」

「完全に門外漢じゃねえか。少し考えさせてくれ」

無理に考えなくてもいいのに。

.....

.....

.....

...

「よし」

しばらくして何か考えついたみたい。

「ちょっとネギ貸せ」

「はい」

あたしは仕込み刀を貸す。要がそれを振りかぶると刀身から、多分
気と魔力が混ざったので出来たエネルギーの刃が伸びる。とにかく
伸びる。

「とりゃ
」

軽い声と共に刀が振り下ろされる。エネルギーの刃は刀身から離れ
ていろいろなものを斬りながら飛んでいった。

「ドヤッ
」

「あれってよくある斬撃を飛ばすのの強化版でしょ」

「まあな。でもあのまま振り回すのも可能だ。エネルギーだから重
さもない」

「名前は？」

「いちいち技名必要か？」

さっきの内壊とかいので分かってたけど、こいつそいつのに興味
ないタイプだ。

「お前ならすぐにも出来るだろ」

「多分
」

「じゃあ帰ろう。早く帰ろう。神様」

『ほいさっさ』

神の力で要は帰っていった。あたしはこの世界で少し練習している。

番外・最近は魔女も修行をする時代か……（後書き）

もみもみラジオ

椛「皆さんこんにちは、犬走椛です。今回出た魔女という単語はまどマギのだそうですが、雨季さんは興味の欠片もなくて大分困ったようです。何事も流行りは知らないといけませんね。次回のコラボは黎音様です。では文さん、今回は仕事して下さいね」

文々。ニュース

文「ほら薊ちゃん、たかいたかい」

薊「キャツキャツ」

文「えっ？ 仕事？ 知りません。私の仕事は薊ちゃんの子守りです。椛に似て可愛いですね」

薊「あい!!」

文「では次回もお楽しみに」

番外・要なんてなかったんや（前書き）

アリかな雑談室

叶・アリサ「トリック・オア・トリート」

叶「ハロウィンだから言ってみたかった」

アリサ「日本だとまずやらないけどね」

叶「いきなり来られてもお菓子の用意なんてしてないもんね」

アリサ「今回は黎音様とのコラボ。出てくるゼフィリスは初期からの要のライバルポジションキャラよ」

叶「お父さんは出ないけど。ではどうぞ」

番外・要なんてなかったんや

N O s i d e

皆さんにはこのような経験はないだろうか。何か過剰にストレスが溜まったり、疲れてしまったりした時に、動物を見て癒されたいという感情に駆られた事は。

「……久遠に会いたい」

ここにいるゼフィリス・エーデルフェルトもそんな感情に駆られる一人である。まあ彼が元より動物好きというのも理由の一つであろう。

「……予定はないな」

ゼフィリスは今日の予定を確認するとすぐに久遠の魔力を探して世界移動をした。少しでもゆっくりしていると彼への緊急の仕事が入ってきてしまうから。

ゼフィリス s i d e

久遠を探して世界移動をした方がいいが、どこだ？ この小さな村にいるのか？

「旅のお方ですか？」

「まあそうですね」

村を歩いていると老婆に出会った。ある種の旅人だから肯定しておこう。

「そうですか。では御狐様にお会いになっていきなさい」

「御狐様ですか？」

「この村の神様ですじゃ。あの祠の中に居られる」

まさか久遠か？ 久遠の魔力は確かにあの中からする。何をやって
いるのか。

「久遠、いるのか？」

「……………」

「いないのか？」

「……………いる」

随分と眠そうな返事をするな。中で寝ていたのか。中は埃っぽくないのだろうか。

「入るぞ」

「んに〜」

祠の中に入るととんでもなく綺麗に整理されていた。冷蔵庫やコンロも完備されている。改造したのがよく分かる。

「何をしていたんだ？」

「寝てたの。ってゼフィリスだ。やつほ」

「寝てたのは分かるがな。御狐様と呼ばれているのは？」

「それ元々この祠にいる神様。私は居候してるんだ」

どこにでも土地神の類か。だからと言ってここまでやるのはどうかと思うぞ。

「行こっか」

「どこへだ？」

「のんびり出来る場所」

久遠は狐に変化すると、私の頭に乗った。移動は私か。適当にこの世界の自然豊かな場所へ向かうとしよう。

ちようどいい山があつたのでその山の中腹で休む事にした。山頂は寒いのでな。

「ゴロゴロ」

「随分と甘えるようになったな」

「最近ずっと一人だったもん。座談会は除く」

「メタ発言は感心しないな」

私の膝の上で寝転がる久遠を撫でてやる。綺麗な毛並みは自分でしっかりと手入れをしている証拠だ。

「お腹撫でて」

「はいはい」

「ふにゃふにゃ、私も撫でたげる」

久遠は少女の姿に戻ると私の髪を撫で始める。

「サラサラだね」

「久遠もな」

ゆったりとした時間が流れ続ける。何かあるわけでもなく、ただいるだけ。

「そういえばこの前まーちゃんに会ったよ」

「舞花にか。どうだった？」

「なんだかワイルドになってた。お嬢様なのは変わらないんだけど」

「……そうか」

お前はどこへ向かいたいんだ娘よ。父親として心配だぞ。たまには顔を見せてくれ。

「そろそろ行こうか」

「帰るのか？」

「んーん、違う世界。この世界も堪能したから」

「世界を旅しているのか？」

「うん。楽しいよ」

久遠も遅しくなったな。一人で世界を旅をするなど昔の久遠ではしなかっただろう。しっかりしていたが、他人に依存している感じがあつたからな。

「じゃあまたね。姐己！」

《まっかせて》

久遠は自分のデバイスを使い世界を移動した。あのデバイスにあんな力があつたのか。それとも追加されたのか。まあ私には関係のない事だ。

「私も帰ろう」

休憩は十二分にした。もしまた疲れが溜まれば久遠に会いに来よう。もしくは要との決着を……………やはり久遠だな。

番外・要なんてなかったんや（後書き）

もみもみラジオ

椛「皆さんこんにちは、犬走椛です。今回はかなり短かったです
許して下さい。次回はぱっつぁん様とのコラボですね。では文さん
えっ？ 大天狗の仕事が溜まってそっちを片付けに行った？ こっ
ちの仕事もして下さいよ。という事ですので、次回もお楽しみに…
……そろそろリストラですかね」

番外・隠された力（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「今回はぱっつあん様とのコラボ!」

叶「以上!」

番外・隠された力

要side

旅の中でも暇な時間は出来るもので、俺は神様に頼んでとある世界に行く事にした。

「開いてるな？」

「一条か。どうした」

「別に。暇だったからな」

「そうか」

こいつはクロカミ、名前はシキ。俺の知り合いだな。なんでか妙に俺の妻であるヴィータを慕い、閣下と呼んでいる奇妙な奴だ。そしてここはこいつの経営している喫茶店だ。

「何か注文するか？」

「とびつきり濃いブラックコーヒーを」

「意外だな。酒を頼むと思ったのに」

「酒も好きだが、濃いブラックコーヒーも好きでな。仕事場とかではよく飲んでいたよ」

「酒」一条のイメージを改める必要があるそうだな」

最近はそれがすっかり定着しているからな。俺としても仕方ないとは考えているんだが。

「あれ？　なんで要がいるんだ？」

「ようティア、邪魔してるぜ」

喫茶店にやってきたのはティアレンスって男っぽい娘だ。決して男の娘ではないので注意しろよ。

「ほら、とびつきり濃いブラックコーヒーだ」

「シキさん、それは嫌がらせか？」

「とびつきりと言われたからな」

出されたコーヒーはギリギリ液体といった感じのドロドロしたものだった。懐かしい濃さだ。

「頂きます」

一口飲むとくどいまでに苦さが広がる。

「実にいい」

「要って味覚壊れてるだろ」

「作った私が言うのもなんだが、ティアに賛成だ」

「言ってる。そうだティア、強くなったか？」

「ん？ まあ鏡との戦いで見いだせた力はある程度使いこなせるようになったけど」

鏡つてのは俺のマテリアルとかいうのだ。そこそこ強いぞ。

「なら戦ってみるか？」

「面白い。本気の鏡にも勝てるようになった自分が要にどれだけ近付いたか試したくなった頃だ」

「成る程ね……………自惚れるな小娘」

闘気だけでカップが真っ二つに割れる。流石にそれにはティアやクロカミも驚いたようだ。

「こんな濃いブラックコーヒーを零して、掃除が大変だぞ」

違った。掃除の心配をしただけだった。

「しかし、本気にさせた程度で調子に乗られてもな」

「どついう事だ？」

「俺も鏡もお前達と戦った時には本気ではあったが全力ではなかった。全力ならダイオラマ球が一瞬で壊れるかもな」

こうは言っているが、今の鏡の全力は知らないんだよな。あくまで憶測。

「聞き捨てならないな。私との戦いでも全力でなかったと？」

「ルールに縛られていたからしょうがないだろ」

「あの戦いの時にルールを提示した覚えはないが」

「ああ、なかった。俺はお前達を殺さないように勝手にルールを考えていた。多分鏡もだ」

なのにこいつらときたら、問答無用に直死とかをバンバン使ってたやがって。試合が死合になるだろう。

「ティア、ここは私に譲れ」

「嫌だよ。オレが要を殺す。自惚れてるのはどっちかはっきりさせてやる」

「なら今回はティアとだ。神様、見てましたよね？」

『もちろんさあ。広い世界でいいね？』

「はい。硬くては広い場所で」

『じゃあ飛ばすよ』

俺とクロカミとティアの足元に魔法陣が展開される。あれを使わせてもらおうとしますか。

ティア side

本当に広いだけの場所だな。でも関係ない。今はこの自惚れ野郎に一泡吹かせてやる。

「ティア、一条が強いのは知っているだろうが、戦法は力でごり押しというのが主体だ。戦術がないわけではないが、全力でなかったとはいえ私と引き分けたのだから気を付ける」

「大丈夫だよシキさん。最初から本気で殺しにかかる」

日本刀、薄刀『針』を創造し、正眼に構える。想像するのは最強の自分。自己暗示しろ。オレはあの男を殺す。

「完全武装・ORT。準備出来たぞ」

全身が水晶のようなものに覆われる要。でもあれが全力ではないのは知っている。

「星の枷とかいうのを解除しろよ」

「それだけの实力があると判断したらな」

「舐めるな!!」

一步の踏み込みで要を斬り裂ける間合いに入る。蒼い瞳によって見える要の僅かな死に向かって刀を振り下ろした。

「速いが単純」

パキン

「!!!」

刀が折られた!? あれが見えたというのか!?

「おいおい、あんな単純な軌道じゃ俺は斬れないぞ」

「まさか、先読みしたのか?」

「俺の経験値を舐めるなよ?」

確かに今の私の剣は基本的過ぎたのかもしれないが、経験だけで打ち破られるなんて。

「俺が攻めたら逆に俺が斬られる自信はあるぞ」

「攻撃に入ったら避けるのも防ぐのも出来ないからか?」

「そうそう」

軽く言ってくれる。それならカウンター気味に斬ってやろうか。

「早く刀を創造しろよ。まだ楽しませてくれるよな？ さあ、喧嘩しようぜ」

ゾッ

「……………？ オレはいつの間にこんな離れた場所にいる？ なんて震えている？ 恐怖しているのか？ 本気の殺し合いを喧嘩と称したあの男の中にある何かに。」

「仕切り直しか？ なら星の枷、解除」

「……………違う」

確かに要の力はグンと上がった。でもこれじゃない。死が視えなくなったが、この程度じゃすまない力を感じた。

「全開だ」

オレの身体に緑に輝く紋章がいくつも浮かび上がる。

「いいぞ！！ 楽しい喧嘩にしようじゃねえか！！」

「調子に乗るな！！」

要が突撃をしてくる。オレは新しい刀を創造して斬りかかる。そこからは単調な戦闘だ。どちらも攻撃が当たらないように避け、流す。

「早く俺を斬ってみせろよ！！ なあ！！！！！！」

「五月蠅い！！」

挑発なのか狂気なのか知った事じゃないが、冷静に攻める。

「視えた!!」

ザンツ

大振りの攻撃をしようとした要の腕をすれ違いざまに斬り落とす。だがオレの刀が急に水晶に覆われて使い物にならなくなった。

「迂闊に触れるなよ？ 像になるから」

「先に言え」

刀を破棄して新しい刀を創造する。今は攻めてこなかったものの、要には十分過ぎる隙だったはずだ。

「先にか。なら言うが、俺は手癖が悪い」

「は？」

何を言っているのか訳が分からなかったが、次の瞬間には斬り落としたはずの要の腕が飛んできた。身体を反らしてそれを避けると腕は要の方に飛んでいき、要はその腕と肩の切り口をくつつけて治した。まるでトカゲかロボットだな。

「楽しいな」

「そんなでもねえよ」

「そうか？　なら隠し玉を見せてやるか」

遂に出るか。どんな力が分からない。それでも負けるつもりはない。そう、負けるつもりはないと思っていた。

「完全武装・ORT　ビーストモード」

要が変身をする。髪は地面まで届き、手足の爪は鋭く、猛々しい牙が生えた。まさに獣だった。そしてオレの四肢は引き千切られ、心臓は引き抜かれ、そして頭が潰された。

シキside

一条が姿を変えた瞬間にティアが膝を付き、呼吸を荒くした。目も虚ろだ。それも仕方ないのかもしれない。あれほどの力は初めて見た。今の一条はそれだけ圧倒的な死を漂わせている。直死とは違う、単純な暴力的な死を。

「立てよ。変身しただけだぞ」

「あ……生き、てる？」

「なあに言ってたんだ。変身してから俺は一步も動いてないんだ。殺

「気や闘気だけでお前を殺せつてのか？」

「実際にそれが可能そうなら、いや今の一条なら簡単にやってのけるかもしれない。」

「一条、それは……なんだ？」

「O R Tのビーストモード。O R Tにはお前達もよく知るノーマルモード。移動のためのU F Oモード。そして戦闘のためのビーストモードがある。これがO R Tの全力つてところか」

「まさか、そんな力が……つまり一条は今まで戦闘状態でないまま戦い続けてきたのか。」

「この制御が上手く出来るようになったのは最近だ。俺にとっては最高の力だよ。特殊な力はないが、暴力に特化しているからな。ただ早く、ただ力強い」

「一条がおもむろに手を振ると地面が引き裂かれ、一部の空間すらも切れた。」

「強すぎるのも問題だな。さあティア、やるのか？ やらないのか？ これは五分しかなくていられないんだ」

「五分もあれば世界を滅ぼしても余裕がありそうだが。」

「ハアハア……」

「無理するなよ」

「して、ない!!」

「してるって。座れ」

「「!？」」

見えなかった。一条がやったのはティアの後ろに回ってティアの肩を叩く。おそらくそれをしたただけなのに初動すら見て取れず、地面には一条が動いた痕跡すら見当たらない。

「……………勝てるはずがないだろ」

「そこは才能と努力で補え。ふいゝ、疲れた」

一条は普通の人としての姿に戻ると地面に腰を下ろした。

「やっぱり活動時間一分はなんとかしないといかんか」

「待て。さつき五分と言わなかったか？」

「そこに突っ立ってるだけなら五分。動くと一分だ。ちなみにもう一段階上の力もあるんだが、そっちは二、三撃でお終い。しかも使用後は数日間はまともに戦えなくなる」

まだ上があったのか。活動限界に比べデメリットが大きいようだが、その分どれだけの力を秘めているのか。

「クロカミ、飯だ。飯をくれ」

「全く。ティア、立てるか？」

「……………」

「ティア？」

「腰……抜けた」

「あはははははははははは！！！」

「笑うな要！！！」

最後はなんとも締まらなかったが、こつこつ終わりもいいだろう。

番外・隠された力（後書き）

もみもみラジオ

椛「前書きは最短を目指したそうです。どうも、犬走椛です。要さんが新しい力を使いましたね。これ以上チートにしてどうするのでしょうか？ では文さん、お願いします」

文々。ニュース

文「久しぶりにちゃんとやりますよ。射命丸文です。先日風見幽香さんが野菜の市場を開きました。全ての野菜が絶品の一言。なんと開店から数分で品切れ状態。隣で同じく野菜を販売していた秋姉妹は血涙を流していました。もうあんだ達の季節終わりだから。では次回もお楽しみに」

戦争準備（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「さーむーいー」

叶「一気に冷えてきたね」

アリサ「体調管理には注意をしてね。 作者は風邪をひいたから」

叶「治ったけどね。では本編どうぞ」

戦争準備

要side

俺達がラクールに到着するとそこは以前のような活気はなく、物々しい雰囲気にも包まれていた。

「あんた達も避難してきたのか！ さあ早く城へ行くんだ！！」

「あの、それって」

「モンスターが攻めてくるなんてな。だけどラクールの前線基地が食い止めるから安心しろよ」

「モンスター！？」

どうやらかなり大変な事になっているようだ。モンスターとなると、ソーサリーグローブが落ちたエル大陸からだろうな。面倒な。

「僕らも戦います」

「何を言ってるんだ！ 早く城に行きたまえ！！」

「そつだぞ。みんなもクロードみたいな考えをするなよ」

「カナメ！！」

「今は言う事を聞かんか馬鹿たれ」

こいつは一度熱くなると冷めるまでが長い。熱しやすく冷めにくい性格なんて損だぞ。

「相談は城に着いてから。異論は認めんぞ」

多少頑固にでも連れて行こう。今は城内での情報収集が先決だ。

………

………

………

…

城内には既に沢山の避難民がいた。中にはディアスの武器を作ったギラムジー爺さんもいた。今はクロードがギラムジー爺さんと話している。

「クロードだったかの。剣はどうなっておる？」

「もう慣れました。本当にいい剣です」

「実はあれはまだ未完成なんじゃ。完成させるのはお主自身じゃよ」

「はい」

「話は済んだか？ これからについて話すぞ」

「分かった」

ギラムジー爺さんと話したお陰かクロードも落ち着いている。今ならしっかりと話し合いが出来るだろう。

「まずこれからどうするか。何か意見がある奴は？」

「あたしはやっぱクロードの言った通りに戦うべきだと思うよ」

プリシスの意見は無難だが一番いいものだろう。だが難しいかもしれない。俺らはこの城に避難している状態。出ると兵士に止められる。

「そういえばラクール王を見てないんだけど」

「確かにいないわね。前線基地とやらかしら？」

「王様が前線に行くかしら？」

王か。上手く説得出来れば前線基地とやらで戦う事を許されるかもしれない。

「ラクール王を捜そう。それが近道になりそうだ」

「捜す必要はねえよ」

「ボーマンさん？」

「心当たりがある。付いて来な」

ボーマンは詳しくは語らず歩き出す。信用は出来るからみんな黙ってついて行くと地下の研究室のような場所に着いた。隣の部屋から人の気配がするな。

「こつちだ」

ボーマンは静かに隣の部屋へと行く。

「遂にラクールホープは……」

「まだ……エナジーストーンが……」

「ホフマン遺跡に……」

話し声が聞こえてきたが、よく分からん単語ばかりだ。子供の声も聞こえる。

ガタッ

「あっ」

「何者だ!?!」

クロードの馬鹿。こついつ時にこそ慎重に行動しろよ。兵士に捕まっただじゃねえか。

「貴様ら! 何をしていた!?!」

おお怖い怖い。王様激怒してんな。よつぽどな機密情報と見た。

「そう力ツカなさらないで下さいよ。ここは俺の顔に免じてね」

「！ お前、ボーマンか！？」

「お久しぶりです」

今までの行動から予想は出来ていたが、やはりボーマンは国の関係者だったか。

「何故、いるのだ」

「今はこいつらの仲間としてソーサリーグロブの調査をしているんですよ。そちらはどうですか？ さっきの様子だとラクールホープは完成間近かと」

「ちょっとおじさん、一体なんなのさ。ここの研究員じゃないのになんでラクールホープを知ってるの？」

「こらレオン」

たった一人だけいた子供が会話に割り込む。それを親と思わしき研究員二人が止める。しかし獣耳が生えているんだが、先祖帰りの類だろうか。

「マードック、フロリス、気にすんな。おつきくなったなレオン。おじさんの事覚えてるか？」

「知らないよ。それより僕はラクールホープに関しては最高責任者なんだ。陛下やパパ、ママと知り合いだからって勝手に話を進めないでよね」

「最高責任者。それは恐れ入った。俺はボーマン・ジーン。元研究員だ」

元、か。何があつたのか。ここの研究員をしていれば少なくとも町医者よりは儲かつただろうに。

「元？」

「そう。すぐに辞めちまつただけだな」

「ならおじさんはパパが言うところの負け犬って奴だね」

「レオン！」

「マードック、表に出ろ。ちょっと男らしい話し合いをしようじゃないか」

「いや、ボーマンが負け犬という意味では」

「楽しい会話に割り込ませてもらうが、ラクールホープとやらについて教えてくれ。ここまで入ってしまったなら処分するより引き込んでしまった方が早いだろう？」

「カナメが言うのも最もか。陛下、話しても？」

「うむ。だがこれを聞いたならば最後までラクールのために働いて

もらっぞ」

全員無言で頷く。まあこっちからしたらお願いしたいくらいだからな。

「じゃあ教えてやる。ラクールホープってのは紋章力を利用した大砲みたいなもんだ。その威力は小島程度なら吹き飛ばす。元々は国同士の侵略戦争のために造られた兵器なんだが、今や国どころか世界を救うまさに希望^{ホープ}となったわけだ」

侵略戦争という言葉でラクール王とレオンとかいう子の親は暗い顔をした。以前は知らないが、今はそれを恥じているという事だろう。レオンは誇らしげだったかな。

「ただラクールホープには大きな問題があった」

「エネルギー運用だな。エネルギー自体は紋章術師を集めれば問題ないが、小島を破壊するほど膨大なエネルギーを溜め、放出するのはそう簡単な事ではない。下手をすれば自爆して国がお陀仏だ」

「カナメよ、先に言わないでくれ」

「悪い」

「まあカナメの言う通りの問題があったわけだが、解決したみたいだな」

「僕の研究によればホフマン遺跡にあるエナジーストーンを使えば大丈夫さ。後はそれを僕が取りに行くだけ」

「レオン一人でか？ マードック、フロリス、いくら息子が優秀だからって無理があるぞ」

「今はそれに割り振る兵士すらないんだ」

戦争状態みたいなものだからしょうがないんだろうが、子供を一人で危険な場所に行かせるのは感心しないな。特にまだ10になるかならないかのような子供を。

「陛下、その任務に俺達を就かせて下さい」

「良いのか？」

「俺達は処分されるべき存在ですよ？ みんなも付き合ってくれるな？」

『もちろん』

断る理由もない。やってやろうじゃないか。

「ついて来るのはいいけど僕の邪魔をしないでよね」

生意気な奴だが、子供はこれくらいがいいか。

戦争準備（後書き）

もみもみラジオ

椀「どうも皆さん、犬走椀です。皆さんが好きな暖房器具はなんですか？ 私はコタツと湯たんぽです。特にコタツにミカンは最高です……………今私の事を犬だろと思った人は前に出なさい。では文さん、お願いします」

文々。ニュース

文「はい、文々。ニュースですよ。最近妖精達のイタズラが激しくなっているような雰囲気があります。とは言っても被害は小さなものですけどね。性的なイタズラを考えた人は前へ出なさい。では次回もお楽しみに」

ホフマン遺跡・前編（前書き）

アリかな雑談室

アリサ「今回も前後編なのね」

叶「短いから繋げればいいのに。早く更新したいからってないよね」

アリサ「気持ちは分からないでもないけどね。次回の更新も早くしないと釣り合わないわよ」

叶「だね。では本編どうぞ」

ホフマン遺跡・前編

要side

レオンを連れてラクールを出る。途中レオンは兵士に挨拶をされていたが、そのあとの兵士の顔ときたら。やっぱりこんな子供が上司というのが気に入らないんだろう。仕方ないっちゃ仕方ないな。

「これから港に行つて船でホフマン遺跡に行くんだよ」

「どんな遺跡なんだ？」

「古代の技術が今でも残る場所だよ。地下は坑道なんだ」

流石に博識なだけあってこっちの質問には大抵レオンが答えてくれる。だが生意気な雰囲気のためにあまりいい心地がしない奴が多いようだ。

「レオン博士、お待ちしていました」

「ご苦労。船の準備は出来てるね？」

「はっ！！」

「本当に可愛くないですわ」

「セリーヌ、そういうのは口に出すな」

愚痴を漏らすセリーヌを小声で注意する。相手がいくら大人びてい

ても子供なのに変わりはない。子供ってのは傷つきやすいんだからな。

「お姉ちゃん達、早く乗ってよ」

「分かりましたわ」

「あいよ」

船はかなり小型だが、ホフマン遺跡は大陸に近い小島にあるそうだから大丈夫だろう。

クロードside

船に揺られて数十分で小島に着いた。森の中に建物が見える。あれがホフマン遺跡だろうか。

「自分はここでお待ちしております」

「みんな、僕にしっかりついて来てよ」

口には出さないけど可愛くない奴だ。よくカナメは優しくしてやれ

るよ。

「森は木々が邪魔だろ。クロード、アシュトン、剣で払いながら進んでくれ」

「僕達がか？」

「カナメでいいんじゃないの？」

「馬鹿言つなアシュトン。毒のある植物を触つたらどうする」

カナメなら大丈夫だろう。多分カナメの事を知らないレオン以外の全員が同じ事を思ったはずだ。それにその手の毒はポーマンさんが解毒してくれると思う。レナのアнтиドットって解毒術もあるし。

「さあ進め」

「えー」

「アシュトン、文句を言つても僕達じゃ勝てないよ」

そう、カナメと言い争うには経験が足りない気がする。大して歳は変わらないのにな。

「ジュールジュール」

「モンスターだー!!」

そんな事を話していたらイソギンチャクに歯が生えたようなモンスターが出てきた。

「お兄ちゃんどいて！！　ブラックセイバー！！」

レオンが紋章術を使って黒い三日月状の刃を飛ばした。その斜線上にいたモンスターや木々は次々と切り倒されていった。

「レオンやるね！！」

「そう言うならアシュトンお兄ちゃんも頑張ってみせてよ」

「よし、ハリケーンスラッシュュ！！」

アシュトンは身体を回転させて竜巻を起こす剣技を披露する。それに続くようにみんなでもンスターを蹴散らしながら遺跡へ向かった。

……

……

……

…

ホフマン遺跡は高かった。ピラミッドのような建物に階段があつて、その頂上が入り口らしい。そしてその入り口に入ると、取っ手も何もない巨大な扉が立ち塞がった。

「どうするんだ？ 壊すのか？」

「そんな野蛮な事をする必要はないよ。このボタンを押せばいいんだ」

レオンは扉の四隅にあった丸い飾りの一つを押す。

シーン

「あ、あれ？ 違った。こっちかな？」

レオンは反対側のボタンを押す。

シーン

「じゃ、じゃあやっぱりこっちだ!!」

また戻ってきてボタンを押す。

シーン

これってもしかして。

「そうか!! 両方同時に押したらいいんだ!! クロードお兄ちゃん、手伝って!!」

「はいはい」

僕はレオンがいる方と反対側に行く。

「「せーの」」

そして同時にボタンを押すと扉に光の筋が入り、そこから扉が割れるように開いた。

「やった！！ 僕が開けたんだ！！」

『……………』

みんながそんな事を言うレオンを少し白い目で見る。でも僕は違った。気付いたんだ。レオンは僕と同じという事に。どっちも優秀な親がいて、それを目標に歩んできた。でもそのせいで周りからは鼻屑をされ、陰では七光りなんて言われてきた。

ただ違うのはレオンにはそれに見合うだけの才能があった、あつてしまったんだ。僕はそこまで才能がなかったから高い地位には立てなくて子供らしくいれた。偉大な父という壁に反発をしたりもした。だけどレオンは若くして親を越えてしまった。だから偉くなくてはいけない。子供ではいられない。ラクールホープの最高責任者という立場もそれを増長させたのかもしれない。

才能とは何も人を幸せにするためのものではない。そういう事なのだろうか。

「クロード、何をしてるの？ 行っちゃうわよ」

「今行くよ」

先に進もう。考えるのは後だ。

ホフマン遺跡・前編（後書き）

もみもみラジオ

椛「皆さんこんにちは、犬走椛です。最近のコンビニスイーツは美味しいですね。クリームいっぱいロールケーキや本格的なティラミス、プリンやシュークリームも美味しいです。では文さん、お願いします」

文々。ニュース

文「どうもー、文です。えっ？ クリームが口に？ あはははは、べ、別に撮影前にシュークリームを食べてなんていませんよ。今回の幻想郷ニュースですが、寺子屋で大鍋パーティーが開かれました。上白沢慧音さん主導で作られたすいとんはとても美味しかったです。では次回もお楽しみに」

ホフマン遺跡・後編（前書き）

アリかな雑談室＋

アリサ「……………＋？　なんだか昔も同じような事があったわね」

叶「あったね。今回からは私の妹が登場だよ。かなたちちゃんカモン！！」

かなた「初めまして、かなたと申します。これからよろしくお願ひしますわ」

アリサ「要の娘さんにはお嬢様ね」

かなた「そういうコンセプトらしいですわ。歳は八歳という設定です」

叶「コンセプト言わない。設定言わない。これからはこの三人でやっていきます」

アリサ「では本編どうぞ」

ホフマン遺跡・後編

クロードside

遺跡の中は不思議な感じだった。機械とは違っのだが、自動扉があったりした。

「目的の物は地下だったわよね。地下へはどう行くのかしら？」

「あれに入るんだよ」

「なんか面白そう」

プリシスが真っ先にレオンの示した人が一人やつと入れるような空間に入っていく。すると左右の扉が閉まり、何かが動くような音がした。あれはエレベーターか。

「僕も行くよ」

あれがエレベーターと分かれば怖い事はない。こういうのに耐性がないレナやアシュトンは少し不安そうだったけど、みんなが行けば大丈夫だろう。

……

……

……

…

地下はまさに坑道といった感じの場所だった。岩が剥き出しのトンネル、線路やトロツコ、ピッケルなどの掘削道具。いろいろな鉱石がありそうだ。

「クロード!! これ見てよ!!」

「な……に？」

プリシスが追いかけて回っていたのは宙を飛ぶクマのぬいぐるみだった。あれもモンスターだろうか。飛び回ってるだけに見えるけど。

「プリシスは何をしていました？」

「あ、セリーヌさん。なんだかよく分かりませんが、楽しんでるみたいです」

「……………レイ」

セリーヌさんが紋章術で光線を降らせてぬいぐるみを倒した。もちろんプリシスも巻き込んで。

「プリシス! 大丈夫!？」

「ゲホゲホッ、セリーヌ!!」

「遊んでる貴女が悪くてよ」

そんな事をしているうちに全員が降りてきた。本格的にエナジーストーン探索の開始だ。

「広い坑道だな。どうやってエナジーストーンを見つけるんだ？」

「手探りしかなさそうね。でもレオンなら知ってるかしら？」

「知らないよ。だってここにエナジーストーンの反応があつたってだけだもん」

なら本当に手探りしかないな。そこらに落ちてるとは限らないし、きっと最深部とかなんだろうな。

「そうだ！ カナメ、前の山岳宮殿みたいに道が分からないか？」

「複雑すぎるな。宮殿はある程度規則性があつたから音波で調べても大丈夫だったんだが」

「そうか……」

音波って、カナメはソナーかよ。

……
……
……
……

かなり進んだけど、確かに入り組んでいて分かりにくい。まるで蟻の巣みたいだ。今いるのは他より広い空間だ。

「ちゃんと帰れるかな？」

「大丈夫だよアシュトン。あたしがマッピングしてるから」

「プリシス、助かるよ」

それにしても地下という閉鎖的空間なのにモンスターが結構いる。プリシスが追いかけていたぬいぐるみみたいなモンスターや、前面全てを隠すような盾を持った鎧モンスターもいた。わざわざエレベーターから降りてきたのだろうか。

「ありゃ」

「カナメさん、どうかしました？」

「レナ、近付くな。レナだけじゃなくて全員離れてろ」

カナメが何かを見つけたらしく、僕らは少し離れた。ただレオンだ

けはカナメに近付いていった。

「何を見つけたのさ。最高責任者である僕にちゃんと報告「ダイナマイト」!？」

ズササササササササッ

凄い後退りで僕らの所までレオンが来た。しかしダイナマイトなんて、でも坑道だからおかしくないのか。

「も、もつと早く言つてよ!！」

「悪いな。これから爆発させるから全員この広間から出てろ」

「カナメ、気を付けてな」

「怪我しないで下さいよ」

「カナメなら大丈夫ですわよ」

「そしたら俺が治療してやるよ」

「僕としてはこっちまで爆発が来ないか心配だなあ」

「あたしはダイナマイトの分解をしたいけど」

「遺跡を壊すなんてエルが……エルも壊してたわね」

「なんでみんな普通にいられるのさ!！」

レオンは一人騒いでいたけれど、みんなで広間から離れた。

ドガアアアアン

離れてからすぐに大きな爆発音が聞こえてきた。流石にこれほどの爆発となると心配になってきた。

「おーい、大丈夫だぞ」

カナメの声が聞こえてきた。どうやら無事のようにだ。

「どうしてあの人生きてるの？」

「レオン、きつと音だけの爆発だったんだよ」

絶対に違うけどひとまずレオンを安心させるためにそう言う。そしてカナメがいる広間に行くと壁に巨大な穴が開いていて、その先は道になっているようだ。

「見ろよこれ」

「うわ、凄い」

穴の先の壁には巨大な壁画が描かれていた。こんなに大きなもの、一体どうやって書いたのか。

「まだ奥があるみたいだな」

周りに警戒する事もなく歩いていくカナメ。僕らはそれについて行く。そして進んだ先には緑に光る岩山があった。

「やった！ エナジーストーンだ！！」

レオンが走って岩山に近寄っていく。ああいうところは本当に子供らしい。

「全く」

「へっ？」

カナメが一瞬でレオンの後ろに移動するとレオンを後ろに放り投げた。何故そんな事をしたかったのか分からなかったが、上からモンスターが落ちてきた事でその理由に気付いた。

「初めて見るモンスターね」

「ああ。でも倒してエナジーストーンを手に入れないと」

モンスターは二足歩行の獣が仮面を付けたようなので、更に宙を浮いている。

「でやっ！！」

「ていつ！！」

まずは僕とアシュトンが攻撃を仕掛けたが、かなりの速さで逃げられた。一旦動きを止めた方が良さそうだ。

「無人くんをくらえー」

プリシスが無人くんを蹴る。なんだか哀愁漂って飛んでいった無人くんだが、見事にモンスターにヒットした。僕らの攻撃ってそんなに遅いのか。それともプリシスの命中率がいいのか。

「チャンスだな。毒気弾!!」

ボーマンさんがそこへ丸薬を投げた。丸薬からは毒が立ち上り、モンスターを絶命させた。

「どんなに速くても絶対に当たればいいのよね。αオンワン!!」

オペラさんは紋章銃から丸い弾丸を撃ち出した。弾速は速くなかったものの、モンスターを追尾し続けてモンスターに当たった。

「オオオオオ」

そんな時、残っていたモンスターの一匹が唸った。すると空から雷が降ってきた。

「うあっ!?!」

「アシュトン! キュアライト!!」

直撃を受けたアシュトンをレナが回復させる。まさか紋章術を使えるなんて。

「燃え尽きなさい!! イラプション!!」

最後はセリーヌさんが紋章術でマグマを噴き出させ、モンスターを焼き尽くした。

「こんなモンスターがいるなんて」

「世の中何がいるか分からない。これもそういうもんさ」

「カナメ、戦った？」

「……………レオンはどこだ？ さっきから見ないが」

逃げたな。でも確かにレオンがいない。どこに行ったんだ？

「……………」

「そんな所にいたのか。どうしたんだ？」

「だってあんなモンスター、図鑑で見た事なかったし」

「成る程、知識に無いものには耐性がないのか」

「仕方ないじゃないか！！」

世の中全てが知っている事ばかりじゃないのに。むしろ知らない事の方が多いのにな。

……

……

……

…

エナジーストーンを回収してホフマン遺跡の外に出た。プリシスがマッピングをしていてくれて助かった。

「！ 今の」

「オペラさん？」

オペラさんが遺跡の出口から反対の方向へと走っていった。

「チツ」

カナメがオペラさんを追って走る。ただその顔は苛ついているようだった。

「私達も追い掛けましょう」

レナの言う通りだ。二人が何のために走っていったか知らないけど追い掛けるしかない。

要side

オペラが見たものを俺も確認した。間違いない。あれはエルネスト。
だが……

「エル！ エルなの！？」

「……やあオペラ。ボクに会いに来てくれたのかい？」

「おい」

「カナメもかい。久しぶりだね。君も会いに来てくれたんだね」

「オペラさん、カナメ、その人は？」

クロード達がやってきた時、エルネストの目が変わった。見ているのはレオンか。

「エナジーストーンは彼が持っているのか。さあ、ボクに渡しなさい。それは君達が持つていてはいけないものだ」

「エル、貴方を言うてるの？」

……もついいか。俺のイライラも限界だ。

「いい加減黙れよ。エルネストを真似するならまずは一人称をしつ

かりしろ。あいつは『ボク』とは言わない」

「……………チエツ、もう少しバレないかと思ったんだけどな」

エルネストの後ろに男の影が浮かぶ。あれは霊だな。馬鹿な奴だ。エルネストの身体の中にいればやられる事はないのに。

「『どうする？　ボクを攻撃しようとしたらこいつは盾になるよ』」

「卑怯よ！　エルを離しなさい！！」

「大丈夫だ。俺に任せろ」

「『ははは！　君に何が出来るんだ？　ゴーストであるボクをガシツ　へっ？』」

「こういう事が出来るんだよ！！」

俺は霊の頭を掴んでエルネストから引き剥がした。そしてそのままぶん回して地面に叩きつけた。

『ぐうつ！？　な、なんで！？』

「そこにいるなら触るなんて余裕だ。霊？　魔法？　幻想？　知るか。潰すだけだ」

ドゴオオオオン

地面に倒れていた霊を殴って潰した。その際クレーターが出来てしまった。苛ついてこんな事をするなんて俺もまだ子供だな。

「う……」

「エル！ 起きたのね！」

「オペ、ラ？ 俺は……」

「覚えていないなら無理に思い出す必要はない」

「カナメか？ せめて説明くらい頼む」

「霊に憑かれてた。以上」

「分かりやすい説明ありがとう」

エルネストは立ち上がると歩き始めた。オペラはそれについて行くとしたが、立ち止まった。

「ねえエル、一人で行かないで彼らと旅をしない？」

「だが、いいのか？」

「オペラさんの仲間なんですから大歓迎ですよ。なあみんな」

「……もちろん」

「それは嬉しいな。っと、そういえば自己紹介を忘れていたな。俺はエルネスト・レヴィードだ。よろしく」

「終わったなら早くしてよ」

レオンは多少空気を読まないで将来苦労するぞ。とにかくこれで新しい仲間が増えたな。めでたいめでたい。

ホフマン遺跡・後編（後書き）

もみもみラジオ

椛「皆さんこんにちは、犬走椛です。なんだか前書きに新キャラ登場しましたね」

薊「あざみもあいたい！！」

椛「前書きに行きたいの？ でも薊は後書きキャラだから出れるか分からないわよ」

薊「なんで？」

椛「バランスっていうものがあるのよ。では文さん、お願いします」

文々。ニユース

文「前書きに出すくらいやってあげればいいのにね。読者の皆さんもそう思いませんか？ さて幻想郷では一足早く冬到来です。雪が降ってきて山は白く染まっています。実に美しい光景です。ただそ

んな感想を持つのは最初だけです。後は寒くて排雪が面倒です。では次回もお楽しみに」

前線基地（前書き）

アリかな雑談室＋

アリサ「今回は幕間的な感じ」

叶「なのに来るまで長かったね」

かなた「作者さんは考え付いたら一気に千文字以上書きますが、考え付かないと駄目ですもの」

アリサ「活動報告のネタなんて思い付きで千文字くらいをすぐに書き上げるものね」

薊「どーん!!」

叶「ぐえへっ!?!」

アリサ「あらあら、来ちゃったのね」

薊「きちやったの!!」

かなた「ですがもう終わりですので次回ですわ」

薊「えー」

アリサ「では本編どうぞ」

前線基地

要side

無事ホフマン遺跡を攻略し、エルネストも仲間になった。めでたいから帰りの船でエルネストと酒を飲み交わしていたら怒られてしまった。流石に反省している。

「お帰りなさいませ、レオン博士」

「陛下は？」

「研究室でお待ちです」

今はレオンを連れてラクール城までやってきた。そして研究室まで行くとラクール王とレオンの両親が待っていた。

「おお、無事戻ってきたな」

「僕の実力があれば当然です」

王達が知らないからって嘘はいけないな、レオン。だが過程なんて今ははどうでもいい。エナジーストーンを持ってくるか否かが問題だろう。

「これがエナジーストーンです。これからラクールホープの総仕上げに入ります。それと陛下、一つお願いがあります」

「なんだレオン？ 申してみよ」

「この者達を前線基地へと配属してやって下さい」

前線基地つつとモンスターの進行を食い止めてる場所じゃねえか。
随分と気が利くな。

「レオンがそれほど言うならば良いのだろう」

「それに陛下も元々そのおつもりだったようだしね」

「あなた、そういう事は言わないものよ」

「オホン」

「「あ、すみません」」

仲のいい夫婦だな。俺も馬鹿夫婦としては周りに負けていないらしいが、自分ではよく分からね。

「さて、お主等は前線基地へ行く気はあるかな？」

「喜んで！　こちらからお願いしたいくらいです！！」

クロードが代表を言う。前線基地でかなりの戦績を残せばエル大陸へ行く事も許されるだろう。

「僕はラクールホープを造ってるから」

「本当にレオンで大丈夫？　あたしが手伝ってあげよっか？」

「別にいらないよ。なんなら前線基地にラクールホープと一緒にプリシスお姉ちゃんの新しい武器でも持って行ってあげようか？」

「生意気」

「プリシスも大概だぞ」

「カナメひとつ！」

「それは失礼」

子供同士の喧嘩に口を出すのはいけなかったな。

レナ s i d e

前線基地。そういう名前が付いているだけあって、そこはラクルの端にエル大陸を向いてあった。

「立派なものだな。もし何もなければ未来への遺産になっただろう」

「だがこの戦争がなければ生まれなかった遺産だぜ、エルネスト」

「それもそうだ。唯一の救いはモンスターとの戦争という事だろう。人との戦争ならば負の遺産になっていたかもしれない」

エルネストさんは何か視点が人とは違うけど、考古学者だからかもしれない。

「少し医務室に行ってもいいか？ 俺は医者として現状を見ておきたい」

「私も一緒に行きます。回復の紋章が役に立ちますし」

「じゃあ女性陣とボーマンは医務室へ。男性陣は武器を揃えてくる。一時間後に司令室に集合だ」

カナメさんの提案でそれぞれが行動を始める。私達が医務室へ行くと、そこは怪我をした兵士達が沢山いた。

「あなた方は？」

「ラクール王に命じられてやってきた者だ。傭兵みたいなもんだが、俺は医者だし、こいつは回復術が使えるからここに来た」

「それは助かります。私達だけでは数が足りなくて」

「そうだろうな。レナ、一緒に重傷患者の手当てをするぞ。他は軽傷なのを頼む」

私はボーマンさんと一緒に重傷の人を診る事になったけど、私が考えていた以上の惨状だった。手足が折れているのは当たり前。目が潰れていたり、身体の一部が欠けている人も少なくなかった。

「レナ、治せるだけ治すぞ」

「……はい」

無くなってしまったものはどうしようもないけれど、せめて痛みから解放をさせてあげよう。

クロード side

流石にモンスターと戦う前線だけあって立派な武器が溢れていた。それでも僕にとってギャムジーさんから頂いた剣以上のものは見つからなかった。

「みんな武器は見つかったか？」

「うん。いい双剣があったよ」

「鞭は見つかったが、流石にオペラのボックスはないな」

「それくらい自作しろよ」

「カナメ、簡単に言ってくれな」

ボーマンさんや女性陣の武器もこっちで買ったから次は薬品かな。

「鉱石まで売ってんのか」

「自分で剣を鍛える人もいますからね」

へえ、鉱石か。綺麗な宝石みたいのから鈍い輝きの鉄まで……

「これは？」

僕が気になったのは透き通ったクリスタルのような鉱石だった。なんだか剣が反応をしたような気がしたんだ。

「こいつはどっかの誰かが持ってきた鉱石だよ。あんまりにも売れないから安くするよ」

「……この鉱石で剣を鍛えてもらえますか？」

「いいのかい？ 名剣のようだが」

「はい」

この剣がきつとそれを望んだんだ。なら僕はそれに従おう。

「なら一万フォルで」

「名剣を好きに出来るのにセコいな」

「全くだ。賤しいな」

「僕も一万は高いと思うよ」

「ええい！　なら半額だ！！」

カナメとエルネストさんはともかくアシュトンまで値引きを言うなんて思わなかった。

前線基地（後書き）

もみもみラジオ

椛「本当に薊が行ってしまいました。どうも、犬走椛です。そろそろ物語もエクスperl編は終盤です。これからどうなるのでしょうか。では文さん、お願いします」

文々。ニユース

文「キムチ鍋が美味しいです。どうも、文です。皆さんはどんな鍋が好きですか？ ちゃんこ鍋やすき焼き、しゃぶしゃぶなどいろいろありますよね。幻想郷では最近キムチ鍋が流行りです。温まります。では次回もお楽しみに」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0349u/>

チートじゃ済まないin星海

2011年11月24日11時45分発行